

院政期真言密教をめぐる如意輪観音の造像と信仰

清水 紀枝

目次

序章	本研究の目的と背景	1
第一章	日本における二臂如意輪観音像の成立について	4
はじめに		4
一	『凶像抄』にみえる石山寺本尊「如意輪観音」像	5
二	醍醐寺の如意輪観音信仰との関わりについて	9
三	東大寺大仏左脇侍「如意輪観音」像と醍醐寺	11
四	如意輪観音信仰をめぐる石山寺・東大寺・醍醐寺のネットワーク	15
五	日本独自の二臂如意輪観音像の成立と醍醐寺	16
むすび		18
第二章	半跏思惟形の如意輪観音像の成立と醍醐寺	23
はじめに		23
一	半跏思惟形の如意輪観音像と聖徳太子信仰	24
二	『別尊雜記』の四天王寺救世観音像	27
三	十二世紀後半の四天王寺と醍醐寺	30
四	石山寺本尊タイプの二臂如意輪観音像との影響関係	35
五	半跏思惟形の如意輪観音像と叡尊	36
むすび		40

第三章 醍醐寺をめぐる宝珠法の展開と如意輪観音信仰

はじめに

一 醍醐寺と宝珠信仰

二 宝珠法と如意輪観音信仰

三 醍醐寺の如意輪観音信仰と宝珠

四 院政期の醍醐寺をめぐる如意輪観音信仰の展開

五 摩尼宝珠曼荼羅と如意輪観音信仰

むすび

第四章 後白河院をめぐる如意輪観音の造像と信仰

はじめに

一 半跏思惟形の如意輪観音像をめぐる人的ネットワークと後白河院

二 後白河院と如意輪観音信仰

三 後白河院と醍醐寺

四 後白河院と四天王寺

五 日本独自の如意輪観音像の展開と後白河院

むすび

第五章 院政期真言密教をめぐる如意輪観音像の展開と王権

はじめに

一 如意輪観音信仰の伝来と皇室

二 御代始三壇法の如意輪法と天台宗

三	仁寿殿観音供の本尊と真言宗	90
四	如意輪観音の功德と王権	96
五	如意輪観音と転輪聖王	98
	むすび	103

付論	後白河院政期における「阿育王塔」の制作について	108
----	-------------------------	-----

	はじめに	108
一	後白河院政期における小塔供養について	108
二	後白河院の阿育王信仰と王権	110
三	後白河院の阿育王信仰と重源	111
	むすび	113

結章	今後の課題と展望	116
----	----------	-----

参考文献一覧		120
--------	--	-----

図版出典		128
------	--	-----

序章 本研究の目的と背景

平安時代初期、弘法大師空海は唐に渡り、密教の正統な継承者となった。帰国後に彼が確立した真言密教は、やがて奈良時代以来の旧仏教勢力を凌ぐ飛躍的な発展を遂げる。

空海は様々な密教のほとけをもたらしたが、なかでも如意輪観音は、彼の直系の弟子達によって特別に重んじられた。たとえば空海の十大弟子のひとり実恵や、孫弟子にあたる聖宝は、自らの開いた寺院の本尊を如意輪観音とし、真然は清和天皇のために毎日、如意輪観音の供養を行ったと伝えられる。さらに平安時代後期以降、天皇の即位礼をはじめとする宮中の儀礼に如意輪法が導入され、皇室の信仰とも緊密に結びついてゆく。

しかし如意輪観音に関する研究は大幅に立ち遅れており、その成立や具体的な信仰の様相については、未だ不明な部分が多い。岩本裕氏により如意輪観音の原名が明らかにされ、如意宝珠への信仰に関わって成立した可能性が指摘されている^(注一)が、インドや中国での信仰や造像の実態も明らかでない^(注二)。また日本の状況についても、個々の作例に関

する検討はなされてきたものの、各時代における造像や信仰の様相を捉えようとするような、体系的な研究はほとんど行われてこなかった。

なお中国や日本における如意輪観音像は通例、『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』(唐・金剛智訳)等の經典にもとづいた六臂の姿であらわされ、右手第二手に意のままに願いを叶えてくれる如意宝珠を、左手第三手に煩惱を破碎し法を広めるという輪宝を持つのが特徴である。すなわち「如意輪」の名は「如意宝珠」と「輪宝」を意味するもので、これらの持物の力をあわせもった観音と解されている^(注三)。

その一方で従来、日本における如意輪観音の像容が、こうした通例の姿とは異なる独自の展開を遂げていることが注目されてきた。石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍は、施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた二臂像であり、如意宝珠や輪宝をもたないにもかかわらず、如意輪観音と称されている。また、中宮寺本尊をはじめ、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像の中にも、如意輪観音とよばれるものがある。このような

如意輪観音像は經典に説かれず、日本以外には確実な作例が見当たらない。

しかるにこれら特異な如意輪観音の像容については、經典に典拠を求めることができないため、その思想的背景を解明することは困難であるとされてきた。これに対し本論では、これら如意輪観音の新たな像形式が現れた背景に、何らかの意図のもとにこれを主導した人物の存在を想定した。そして、その人物と同じ思想や信仰を共有する人的ネットワークによって、この像形式が各地に伝播したのではないかと推測した。

そこで関係史料にあらためて目を向け、各作例と如意輪観音を結びつけた人物を探った結果、醍醐寺僧を中心とする人的ネットワークの存在が浮かび上がった。醍醐寺は如意輪観音を本尊として特別に信仰する真言密教寺院である。さらにこのネットワークが、院政期の王権とも密接に結びついていたことが判明した。

なお院政期以降、醍醐寺を中心として、天皇や法皇のために如意宝珠を本尊とする修法が盛んに行われ、その本尊として宝珠をあらわした舍利容器や厨子が制作された。近年、内藤栄氏によって、この醍醐寺における宝珠信仰が如意輪観音信仰と密接に関わっていたことが指摘されている(注四)。よ

ってこれら宝珠法に関わる仏具もまた、日本独自の如意輪観音像の展開とみなし、あらためて検討を加えることとした。なお本論の構成は以下の通りである。

序章 研究の目的と背景

第一章 日本における二臂如意輪観音像の成立について

第二章 半跏思惟形の如意輪観音像の成立と醍醐寺

第三章 醍醐寺をめぐる宝珠法の展開と如意輪観音信仰

第四章 後白河院をめぐる如意輪観音の造像と信仰

第五章 院政期真言密教をめぐる如意輪観音像の展開と王

権

付論 後白河院政期における「阿育王塔」の制作について

結章 今後の課題と展望

まず第一章では、石山寺で特異な如意輪観音像が成立した問題にあらためて注目し、特にこれが東大寺へと伝播した背景について検討を行いたい。

つづいて第二章において、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称された具体的な経緯を探る。

また第三章では、宝珠をあらわした舍利容器や厨子に注目

し、特に如意輪観音信仰との関わりについて考察したい。

さらに第四章は、第二章・第三章で示した人的ネットワークが後白河院と密接な関係にあることに注目し、後白河院が半跏思惟形の如意輪観音像の成立や宝珠法の展開に関与していた可能性について論じるものである。

そして第五章では、院政期以降、如意輪観音に対して王権の守護に関わる功德が期待されていることに着目し、天皇や法皇の信仰が、日本独自の如意輪観音像の展開にいかなる形で関わっていたのか追究する。なおこれに関連する付論として、後白河院政期の小塔供養が、王権の護持を目的として行われた可能性について論じたい。

本論は、以上の五章および付論において、日本における如意輪観音像の新たな展開に目を向け、その具体的な成立時期や信仰の様相、これを主導した人的ネットワーク、そして仏教界の動向や王権との関わりを明らかにしようとするものである。

注

(注一) 岩本裕「如意輪観音の原名について」(『足利惇氏博士喜寿記念 オリエント学インド学論集』国書刊行会、一九七八年)。

(注二) 宮治昭「観音菩薩像の成立と展開―インドを中心に―」(『シルクロード学研究』十一、シルクロード学研究センター、二〇〇一年)。

(注三) 井上一穂『日本の美術 三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』(至文堂、一九九二年)。

(注四) 内藤栄「真言宗小野流の舍利法と宝珠法」(『舍利荘厳美術の研究』青史出版、二〇一〇年)。

はじめに

院政期に成立した密教図像集『図像抄』の如意輪観音の項には、右手を施無畏印、左手を膝上で与願印とし、左足を垂



図1 『図像抄』石山寺本尊

下した石山寺本尊の図像が収録される(図1)。同記事によれば石山寺本尊、およびこれと同じ形式の東大寺大仏左脇侍や岡寺本尊は、いずれも二臂如意輪観音像であるという。

しかるにこのような姿の如意輪観音像は經典に説かれず、日本以外には作例が見当たらない。後述するように、石山寺本尊の本来の尊名は「観音」であり、平安時代以降、石山寺に進出した醍醐寺僧の影響によって「如意輪観音」とよび変えられたことが指摘されている。

本章は、この特異な如意輪観音像が石山寺で成立した問題にあらためて注目し、特にこれが東大寺へと伝播した経緯について検討を行うものである。さらにこの如意輪観音の図像が、『図像抄』をはじめとする院政期の図像集に収録された背景についても考察を加えたい。

一 『凶像抄』にみえる石山寺本尊「如意輪観音」像

石山寺には現在、左手を与願印として、右手に宝珠を載せた蓮華をもち、左足を踏み下げた、木造の本尊如意輪観音像が安置されている(図2)。これは承暦二年(一〇七八)の火災後、十一世紀末頃の作とみられる再興像であり、当初は奈良時代に造立された塑像が安置されていた。福山敏男氏の研究により、当初の石山寺本尊は天平宝字五年(七六一)から翌年にかけて、良弁(六八九〜七七三)の指導下に造像さ

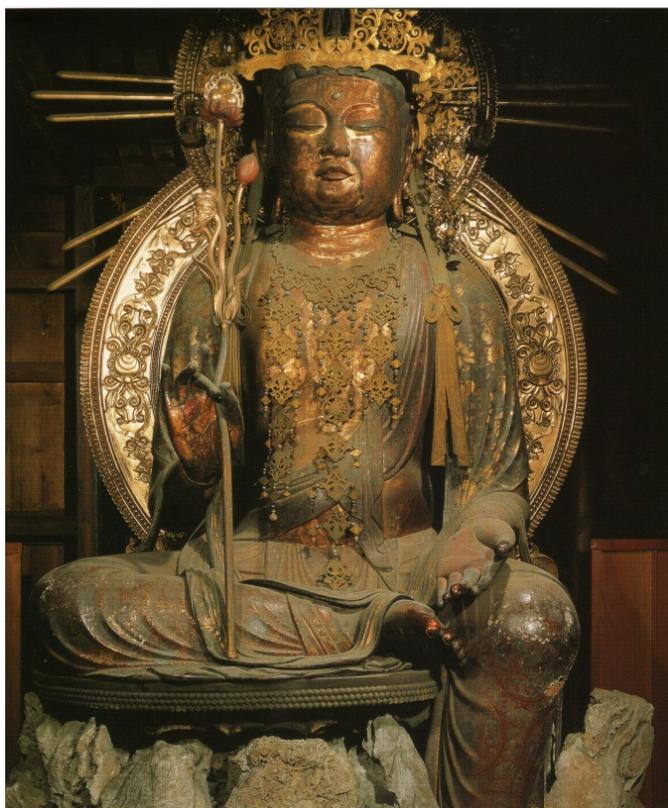


図2 現在の石山寺本尊如意輪観音像

れたことが明らかとなっている。

この本尊の当初の姿を伝えるものとして、十二世紀前半に成立した密教図像集『凶像抄』の記事が注目されてきた。真言僧恵什が編纂した『凶像抄』巻第六「観音上」の如意輪観音の項に、石山寺本尊に関する記述があり、

従昔所造画二臂像。皆右手作施無畏。左手於膝上作与願印垂下。左足坐盤石上。大和国龍蓋寺丈六如意輪像亦同之。東大寺大仏殿左方如意輪亦同之垂下左足。

とある(注一)。つまり右手を施無畏印、左手を膝上で与願印とし、左足を盤石の上に踏み下ろした二臂像であるといい、その凶像を載せている(図1)。さらに龍蓋寺、すなわち現在の奈良・岡寺の本尊や、東大寺大仏左脇侍もまた同じ姿をした如意輪観音像であると記される。

また同じく恵什の著した『勝語集』にも同様の記事がみえ(注二)、

石山良弁僧正建立也。彼僧正所造二臂如意輪既与願施無畏也。今在東大寺。加之僧正師義淵僧都建立龍蓋寺如意輪又以如此。又以如此施願無畏也。



図3 岡寺本尊

良弁の造立した石山寺本尊が与願印・施無畏印を結んだ二臂如意輪観音像であり、東大寺および義淵僧正の建立した龍蓋寺（岡寺）の如意輪観音像も同じ形式であると述べている。現在、岡寺の本堂には右手を施無畏印、左手を与願印として結跏趺坐する塑像の本尊が安置されている（図3）。大部分はすでに後補に変わり、頭部の一部にのみ奈良時代の造頭当初の部分を残しているという^{（注三）}。昭和五十二年に本尊の台座の調査が行われ、本来は結跏趺坐ではなく、石山寺本尊と同じく左足を踏み下げていたことが明らかとなった^{（注}



また東大寺大仏殿の本尊廬舎那仏の両脇には、施無畏印・与願印を結んで結跏趺坐する二軀の像が安置され、右脇侍は虚空蔵菩薩、左脇侍は如意輪観音と伝えられている（図4）。東大寺大仏殿は、鎌倉時代と江戸時代の二度、兵火により焼失しており、現在の像は江戸時代に再興されたものである^{（注四）}。左脇侍の当初の姿を伝えるものとして、十二世紀後半成立の『信貴山縁起絵巻』巻三が注目されてきた^{（注六）}。東大寺大仏殿の正面が描かれ、扉の隙間から左脇侍の一部がみえる（図5）。踏み下げた左足を踏割蓮華座に乗せ、左の掌を

四）。

外に向けて膝上に垂下していることが確認できる。これにより、左手は現在と同様、与願印を結んでいたが、坐勢は結跏趺坐でなく、左足を踏み下げたことが判明している。

すなわち石山寺本尊、東大寺大仏左脇侍、岡寺本尊は、いずれも当初は『図像抄』の記述通り、施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた姿であった可能性が高い。そして今日も三像は如意輪観音と称されている。

ところが、施無畏印・与願印を結び、片足を踏み下げた二臂の如意輪観音像は、経典や儀軌に説かれない。日本や中国



における如意輪観音像は通例、大阪・観心寺本尊(図6)のように、唐・金剛智訳『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』等の経説に基づいた六臂の姿であらわされる。つまり、右手の第一手を思惟相として、第二手に如意宝珠を、第三手に念珠を執り、左手第一手は光明山に触れ、第二手に蓮華を、第三手に輪宝をもった姿である。「如意輪」の名は「如意宝珠」と「輪宝」を意味するもので、如意輪観音はこれらの持物の力をあわせもった観音であると考えられている(注七)。しかし、三像が如意宝珠や輪宝をもっていたという記録は見当たらない。

なお、経典には二臂の如意輪観音像も説かれている。たとえば唐の景龍三年(七〇九)に漢訳された『如意輪陀羅尼経』には、「如意輪聖観自在菩薩」の像容が次のように記される(注八)。

内院当心画三十二葉開敷蓮花。於花台上画如意輪聖観自在菩薩。面西結跏趺坐。顔貌熙怡身金色相。首戴宝冠冠有化仏。菩薩左手執開蓮花。当其台上画如意宝珠。右手作説法相。

すなわち頭に化仏を付けた宝冠を戴いて、左手に如



図6 観心寺本尊

意宝珠を載せた蓮華を執り、右手で説法印を結んで、結跏趺坐する二臂像である。

また、唐の貞元十二年（七九六年）に漢訳された『大聖妙吉祥菩薩説除際教令法輪』にも、二臂の像容が説かれる^{（注九）}。

次明観自在。亦号如意輪。左掌摩尼珠。慧舒施願印。身皆白紅色。住大蓮華中。

ここでは、左手の掌の上に「摩尼珠」すなわち如意宝珠を載せ、右手は掌を外に向けて下に垂らす施願印とする。

さらに、『覚禅鈔』巻第四十九「如意輪下」には、『金輪呪王経』に基づく図像として、左手に如意宝珠を載せた蓮華を持ち、さらに右の掌の上に如意宝珠を載せ、結跏趺坐する二臂像が描かれている^{（注一〇）}。ただし『金輪呪王経』は今に伝わらず、その実態は不明である。

以上見てきたように、経典に説かれる二臂如意輪観音像は、いずれも石山寺本尊の像容とは異なっている。

なお、十二世紀後半に成立した図像集『別尊雜記』にも、『図像抄』の石山寺本尊の記事が引用される。注目したいのは、その裏書に「世間以此像号石山様」とある点で、施無畏印・与願印を結び、片足を踏み下げた形式の如意輪観音像が「石山様」と称されていたことが判明する^{（注一一）}。「石山様」という呼称は、この特異な二臂如意輪観音像の形式が、まさに石山寺において成立したことを示すものと考えられよう。つまり如意宝珠や輪宝をもたない、このような如意輪観音像が石山寺で成立し、やがて東大寺や岡寺へと伝わったことが想定される。

その一方で、石山寺本尊の尊名は本来「如意輪観音」ではなく、「観音」であった可能性が指摘されてきた。

二 醍醐寺の如意輪観音信仰との関わりについて

石山寺本尊の尊名について、正倉院文書中の天平宝字六年（七六二）八月二十七日付「造石山院所勞劇帳」や、天平宝字六年閏十二月二十九日付「造石山院所解」には、「観世菩薩」「観世音菩薩」と記される。しかし、永観二年（九八四）成立の仏教説話集『三宝絵』以降の史料では「如意輪観音」と称されていることが、従来注目されてきた^(注二二)。

この問題について、奈良時代の如意輪観音信仰に関わる史料を精査した井上一稔氏は、密部変化観音が多数を占める『西大寺資財帳』や、『東大寺要録』所収の「大仏殿西曼荼羅左右銘文」に如意輪観音の名が見出せないこと、また、道鏡が如意輪法を修したという有名な伝えについても、確実な史料が見当たらないことなどに着目した^(注二三)。すなわち奈良時代の日本では密教の変化観音としての如意輪観音への意識はまだ芽生えておらず、本格的な如意輪観音信仰は行われていなかったという。井上氏の説をふまえると、石山寺本尊の当初の尊名は「観音」であり、弘法大師空海が正統な密教を日本にもたらした平安時代以降、何らかの要因によって、「如意輪観音」とよび変えられたものと推測される。

この問題について岩田茂樹氏や徳竹由明氏は、『三宝絵』において石山寺本尊が「如意輪観音」と称された十世紀頃、石山寺に真言僧の淳祐（八九〇〜九五三）が入寺していることに注目した^(注二四)。菅原道真の孫にあたる淳祐は、真言宗・醍醐寺の観賢（八五四〜九二五）にしたがって出家した僧である。観賢は醍醐寺の開祖聖宝（八三二〜九〇九）の正嫡にあたり、淳祐は観賢のあとの醍醐寺座主となるべき立場にあった。しかし淳祐は身体に障害があったことから、これを辞退し、石山寺に隠棲して経典の書写や著述に専念したという。

従来、淳祐と如意輪観音信仰の密接な関わりが注目されてきた。その一端を示すものとして、その著作『聖如意輪念誦次第』が挙げられる^(注二五)。これは本尊に如意輪観音を据えた十八道加行の次第であり、醍醐寺の小野流において今日も用いられている。また、十二世紀の『秘蔵金宝抄』によれば、淳祐は如意輪観音の六臂を六観音に宛て、それぞれに六道を救う力のあることを説いたという^(注二六)。

醍醐寺は理源大師聖宝（八三二〜九〇九）が、貞観十八年（八七六）に如意輪観音と准胝観音を本尊として開創した寺院である^(注二七)。聖宝は弘法大師空海の弟子真雅について出家得度し、真雅の寂後は、同じく空海の弟子である真然から両部大法を受けるなど、空海直系の密教を継承したことで知

られる。聖宝はさらに修行の地である金峰山にも像高六尺の金色如意輪観音像を造立し、聖宝の住房であった延命院には、半丈六と等身の金色如意輪観音像が本尊として安置されていたという^(注一八)。また十二世紀の『醍醐雜事記』により、上醍醐の諸院には如意輪観音像が最も多く安置されていたことが判明する^(注一九)。聖宝の如意輪観音への特別な信仰が、直系の弟子である淳祐へと受け継がれた可能性は高い^(注二〇)。

淳祐以後、石山寺には続々と真言僧が入り、醍醐寺の法流を継承して、石山流とよばれる一派を形成した。徳竹氏は醍



図7 石山寺六臂如意輪観音像

醐寺における如意輪観音への特別な信仰をふまえ、石山寺本尊が如意輪観音と称された背景に、醍醐寺の法流を継承した真言僧の活動があったこと、とりわけ醍醐寺僧である淳祐の石山寺入寺がひとつの契機となったことを指摘した^(注二一)。つまり、石山寺本尊の尊名が「観音」から「如意輪観音」とよび変えられる過程で、淳祐の如意輪観音信仰が重要な役割を果たしたものと考えられてきたのである。

さらに石山寺と醍醐寺の如意輪観音信仰との密接な関係を示すものとして、石山寺に伝来する十世紀末頃の六臂如意輪観音像が注目される(図7)。この像の調査に携わった井上一稔氏は、とりわけ下膨れの強い顔立ちに着目し、これが十世紀頃の醍醐寺における造像に共通する特徴であることを明らかにした^(注二二)。石山寺と醍醐寺は地理的に近く、人的な交流も行われやすい環境にあった。井上氏はこの像が石山寺に伝来した背景に、両寺の地理的關係と、淳祐の如意輪観音信仰の影響を想定している。

また福山敏男氏は、このような六臂如意輪観音像の片膝を立てた姿が、半跏形である石山寺本尊と通じるところがあったために、両者が結びつけられたのではないかと推測した^(注二三)。淳祐ら如意輪観音を特別に信仰する醍醐寺僧が、このような像容の類似点に注目した可能性は高い。

なお、石山寺本尊の脇侍の尊名について、『正倉院文書』では「神王」とされるが、『覺禪抄』など平安時代の文献には「執金剛神」「金剛藏王」と記される。特に右脇侍の金剛藏王菩薩像は、もともと両足を地につけて立っていたものを、後世、切断して足をあげる姿に改変されたことが判明している^(注二四)。すなわち脇侍像もまた、平安時代以降に尊名が変更されたものと推測される。近藤謙氏は、これら執金剛神や金剛藏王菩薩、そして石山寺毘沙門堂に伝来する兜跋毘沙門天が聖宝の信仰と関わりの深いことに注目し、醍醐寺が石山寺の造像を主導した可能性を指摘した^(注二五)。

以上、先学の研究によつて、十世紀の淳祐以降、醍醐寺の法流を継ぐ真言僧が石山寺に入り、本尊の「観音」像を「如意輪観音」とよび変えたものと考えられてきた。しかし、奈良・平安時代における石山寺の状況を伝える史料は乏しく、これ以上詳しいことは明らかにされていない。

三 東大寺大仏左脇侍「如意輪観音」像と醍醐寺

その一方で、石山寺で成立した特異な如意輪観音像が、東大寺や岡寺に伝播した問題については、従来ほとんど追究されてこなかった。岡寺本尊の呼称については、西国三十三所

巡礼に関わる史料にみえ、十三世紀成立の『寺門高僧記』巻四に収める、天台座主行尊(一〇五五〜一一三五)の巡礼記に「二番 龍蓋寺 土仏如意輪丈六」とあり^(注二六)、久安六年(一一五〇)の長谷僧正の参詣次第にも「龍蓋寺岡寺ト云丈六如意輪」と記される。よつて平安時代後期頃には如意輪観音と称されていたことが窺えるが、史料が不足しており、この前後の尊名を知ることができない。

対して東大寺大仏左脇侍の尊名については、その変遷をある程度たどることができる^(注二七)。前述の通り、東大寺大仏の両脇侍は江戸時代の再興像であり、右脇侍は虚空藏菩薩、左脇侍は如意輪観音と称されている(図4)。『信貴山縁起繪巻』や『図像抄』の記事をふまえると、当初の左脇侍は、施無畏印・与願印を結び、左足を踏み下げた像であったと推測される。しかるに、天平十五年(七四三)に聖武天皇が布告した東大寺大仏発願の詔には、脇侍像について一切言及されていない。『東大寺要録』や『七大寺巡礼私記』といった十二世紀以降の史料は、脇侍像の造立開始を天平勝宝元年(七四九)四月八日のことと伝えるが、詳しい造像事情については不明である。

なお左脇侍の尊名の変遷については、田村寛康氏の論考に詳しい^(注二八)。八世紀の『延暦僧録』や九世紀前半の『大仏

殿碑文』には「挟侍菩薩」とあるのみだが、永観二年（九八四）の『大仏殿納物』には「観音」と記される。そして、嘉承元年（一一〇六）の『七大寺日記』以降、「如意輪観音」と称されているという。これらの史料、および奈良時代には本格的な如意輪観音信仰が行われていなかったとする井上一稔氏の説^{（注二九）}をふまえると、東大寺大仏左脇侍も石山寺本尊と同様、本来は観音であった可能性が高い。

従来、虚空蔵菩薩と称される右脇侍との組み合わせについても考察が行われてきた。鎌倉時代に成立した原本を写したものとみられる東大寺蔵『東大寺大仏縁起絵巻』巻三には、右脇侍の姿が描かれており、左脇侍とは左右対称の、施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた形式であったことが判明する^{（注三〇）}。右脇侍の「虚空蔵」という呼称については、前述の十世紀『大仏殿納物』まで遡ることのできるもので、右手を与願印とし、半跏に坐す姿が『虚空蔵菩薩能滿諸願最勝心陀羅尼求聞持法』に説く虚空蔵求聞持法の本尊の姿と共通することなどが指摘されてきた^{（注三一）}。

しかし、盧舎那仏の両脇に観音と虚空蔵、あるいは如意輪観音と虚空蔵を安置するという経説は見当たらない。小野玄妙氏は、『観虚空蔵菩薩経』に虚空蔵菩薩が「若現大身与観世音」、つまり観音と同じ大きさであると説かれていること

に注目した^{（注三二）}が、これが盧舎那仏の両脇に配された典拠は不明である。また、如意輪観音と虚空蔵菩薩が多々の場合、如意宝珠をもった姿で表されることも、両者の共通点として注目されてきた^{（注三三）}が、東大寺大仏の両脇侍が宝珠をもっていたと伝える史料はなく、ただちにこれを根拠とすることは難しい。

この三尊の組み合わせについては、かなり古くから疑問が呈されていたようで、保延六年（一一四〇）の『七大寺巡礼私記』にも言及されている。著者である親通は、まず胎蔵界曼荼羅の釈迦院中の釈迦が観音と虚空蔵を脇侍としていることを述べ、次に「観普賢経」等に釈迦と大日如来が同体とあることに着目した。大日如来は盧舎那仏と同体関係にあるから、釈迦と盧舎那仏もまた同体であるとし、このような三尊の組み合わせが成立したものと考えたようである^{（注三四）}。

しかし、胎蔵界曼荼羅は空海が大同元年（八〇六）に初めて請来したものであり、東大寺大仏の両脇侍が、天平時代の造立当初から、これを典拠としていたとは考えにくい。あるいは右脇侍の「虚空蔵」という呼称も、左脇侍と同様、平安時代以降により変えられたものである可能性もあるが、この経緯を伝える史料は見当たらず、今後、さらなる検討を要する。

以上みてきたように、当初の東大寺大仏左脇侍は、石山寺本尊と同じく、施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた像であった。そしてその尊名は、平安時代以降、「観音」から「如意輪観音」へとよび変えられたものと推測される。『大仏殿納物』の時点では「観音」、『七大寺日記』に至って「如意輪」とよばれていることをふまえると、十世紀末から十二世紀の間に如意輪観音と称され始めた可能性が高い。すなわちこの時期の東大寺においても石山寺と同様、何らかの状況の変化があり、尊名変更の契機となったのではないかと考えた。

そのような視点で当時の東大寺の状況に目を向けると、まさに十世紀末にあたる永延三年（九八九）、奄然（九三八）一〇一六）が五十一代別当に就任していた^{（注三五）}。九世紀前半に寺内に設置された東大寺別当は、寺内経営の全般にわたって指導的な役割を果たした寺職である^{（注三六）}。奄然は宋に渡り、いわゆる清涼寺式釈迦像を請来したことも知られる。ここで注目したいのは、奄然が淳祐の正嫡にあたる石山寺の元杲（九一四〜九九五）から法を受けている点である。前述の通り、淳祐は石山寺本尊を如意輪観音と称し始めた可能性の高い僧である。元杲は醍醐寺において出家し、淳祐から伝法灌頂を受けて、醍醐寺の延命院に住したことで知られる

^{（注三七）}。つまり左脇侍が如意輪観音と称され始めたと思定される時期、淳祐の孫弟子にあたる奄然が別当として東大寺の経営に深く関与していたのである。

つづいて奄然のすぐあと、正暦三年（九九二）に第五十二代別当に就任した深覚（九五五〜一〇四三）もまた、石山寺に住して「石山大僧正」と号した真言僧であり、淳祐を祖とする石山流に名を連ねている。深覚はその後、長徳四年（九九九）、長和五年（一〇一六）にも東大寺別当となり、計三度の別当就任を果たしている。注目すべきは、万寿三年（一〇二六）、如意輪の神呪を以て後一条天皇の御悩を祈っており、深覚に如意輪観音信仰との関わりがみとめられることである。

また長元二年（一〇二九）、第六十二代の別当となった仁海（九五一〜一〇四六）は、醍醐寺小野流の祖であるが、やはり元杲から法を受けている^{（注三八）}。

真言宗と東大寺の関わりは深く、弘仁十三年（八二二）に空海が灌頂道場である真言院を大仏殿の南に設置して以降、東大寺の密教化が進んだという^{（注三九）}。さらに醍醐寺を開いた聖宝は東大寺玄栄から華嚴法を受けており、十世紀成立の『醍醐根本僧正略伝』によれば、若き日に東大寺の僧房に住していたという。聖宝が貞観十七年（八七五）に寺内に東



図8 『別尊雑記』石山寺本尊

南院を建立して以後、東南院の院主や醍醐寺座主が東大寺別当を兼務する例が多くなっている^(注四〇)。長元六年(一一〇三三)の第六十三代別当濟慶(九八五〜一〇四七)は東南院の僧であり、次の第六十四代別当深観(一一〇〇一頃〜一〇五〇)は、前述の深覚について出家した真言僧であった。すなわち東大寺大仏左脇侍が、「如意輪観音」とよばれ始めた可能性の高い、十世紀末から十二世紀にかけて、淳祐の法流を継ぐ真言僧たちが、次々と東大寺別当に就任していたことになる。

なお右脇侍の尊名となっている虚空蔵菩薩もまた、淳祐が重視するほけであったことが留意される^(注四一)。右脇侍の尊名と淳祐の関係についても、今後、検討を要するであろう。さらにここで、左脇侍を如意輪観音であると説いた図像集の編者にも注目したい。すでに紹介したように『図像抄』には、東大寺大仏左脇侍や岡寺本尊が、石山寺本尊と同じ形式の二臂如意輪観音像であることが述べられる。『図像抄』は保延五年(一一三九)から翌年にかけて、真言僧恵什によって編纂されたことが知られているが^(注四二)、重要なものは、恵

什もまた石山流を継承する僧であった点である。

この特異な二臂如意輪観音像に関する『図像抄』の記事は、以後、十二世紀後半の『別尊雑記』および十三世紀の『覚禅抄』に引用される(図8)^(注四三)。この『別尊雑記』の編纂に関わったとされる守覚^(注四四)、および『覚禅抄』を編んだ覚禅もまた、石山流に名を連ねる真言僧であったことが判明した。

そこで、『図像抄』、『別尊雑記』、『覚禅抄』の如意輪観音の項に目を向けると、

さらに興味深い事実が浮かび上がってくる。『別尊雜記』はその画像の約三分の一を『画像抄』から引用している(注四五)。また『覚禅抄』は、先行する『画像抄』と『別尊雜記』の説をふまえながらも、原則としてこれらの画像集に載せる画像を省略し、新たな画像を収集する意図のあったことが明らかにされている(注四六)。

それぞれの如意輪観音の項に、『画像抄』は計六図、『別尊雜記』は計十図、『覚禅抄』は計九図の如意輪観音画像を収録する。注目すべきは、施無畏印・与願印を結び、左足を踏み下げた石山寺本尊の画像のみ、三つの画像集全てに収録されているのである。

特に、『画像抄』や『別尊雜記』に既に収録された画像を、原則として省略する『覚禅抄』までもが、石山寺本尊の画像を載せている点は重要だと考える。これは、石山流を継ぐ守覚や覚禅が、石山寺本尊およびこれと同じ形式の特異な二臂如意輪観音像を特別に重視していたことを示唆しているのではないだろうか。

『画像抄』、『別尊雜記』、『覚禅抄』は院政期を代表する画像集として知られるが、従来、その編者については小野流や広沢流との関わりばかりが論じられ、石山流との関係についてはほとんど注目されてこなかった。平安時代末期の石山寺

は、観祐(一一一〇頃〜一一七五頃)や朗澄(一一三一〜一二〇八)をはじめ、画像の研究に熱心な僧を輩出している(注四七)。今後、これらの画像集の展開と石山流の関わりに留意してゆきたい。

四 如意輪観音信仰をめぐる石山寺・東大寺・醍醐寺のネットワーク

以上、東大寺大仏左脇侍が如意輪観音と称され始めた時期、淳祐と関わりの深い真言僧たちが、東大寺の経営に深く関与していたことが判明した。加えて『画像抄』をはじめ、左脇侍を如意輪観音とする画像集もまた、淳祐の流れをくむ僧によつて編纂されたことが明らかとなった。すなわち左脇侍が如意輪観音と称された背景にも、石山寺本尊と同様、淳祐の如意輪観音信仰が密接に関わっていた可能性が高い。

なお、十世紀末以降に成立した説話類からも、東大寺、石山寺、醍醐寺の密接な関係が窺える。石山寺の造営については正倉院文書に詳細な記録が残り、福山敏男氏によつて、造東大寺司下の造石山寺所のもとで行われたことが明らかにされている(注四八)が、その開基の理由や発願者は不明である。しかし十世紀の『三宝絵』以降、東大寺大仏の造立と強く結

びついた開基伝承が形成されてゆく^(注四九)。

前述の通り『三宝絵』は石山寺本尊と如意輪観音を結びつけたもつとも早い史料であるが、下巻「東大寺千花会」条に、次のような伝えを載せる。すなわち東大寺大仏に塗金するための金を金峰山の金剛蔵王菩薩に願ったところ、現在の石山寺の地にあたる近江国瀬田川の河畔を示現された。そこでその場の石の上に如意輪観音を据えて祈請すると、陸奥国などから金が発見された。よってこの地に石山寺が建立されたという。

この開基伝承の形成と展開を論じた徳竹由明氏は、金峰山の金剛蔵王菩薩が重要な役割を担っていることにも注目した^(注五〇)。醍醐寺の開祖聖宝は金峰山を修行の地とし、如意輪観音像とともに金剛蔵王菩薩像を造立するなど、金峰山に深く関与したことで知られる^(注五一)。つまり石山寺の開基伝承に東大寺大仏や金峰山が結びつけられた背景にも、醍醐寺僧が関与していた可能性を指摘している。

さらに十二世紀後半の醍醐寺僧、慶延の編纂した『醍醐雜事記』には、

如意輪堂一字 奉安置如意輪像一軀 高五尺(略)此堂御明油自石山寺為毎年々貢送進之直料米六石八斗二升

也。奉進之由来、石山如意輪示現云我者常通而在上醍醐如意輪堂也云々

とあり、石山寺の本尊如意輪観音像が、常に上醍醐の如意輪堂に通っていたと伝える。これにより毎年、石山寺から醍醐寺へ御明油が送られることになったという^(注五二)。

すなわち『三宝絵』では東大寺と石山寺が、『醍醐雜事記』では石山寺と醍醐寺が、それぞれ如意輪観音を介して結び付けられている。これらの説話は、十世紀末から十二世紀にかけて、東大寺、石山寺、醍醐寺が如意輪観音信仰を軸とした密接な関わりをもっていたことを示唆しているのではないだろうか。

五 日本独自の二臂如意輪観音像の成立と醍醐寺

なお、聖宝が醍醐寺の本尊として祀った如意輪観音像はすでに失われているが、江戸時代成立の『醍醐寺新要録』には、文安六年(一四五〇)に秘仏本尊の帳の中を拝見したところ、二臂の如意輪観音像であったと記されている^(注五三)。また六臂如意輪観音像の坐勢は、通例、片膝を立てて両足の裏を合わせた輪王坐とするが、醍醐寺に伝来する十世紀の如意輪観



図9 醍醐寺六臂如意輪觀音像

したことにより、顕密兼修が必要とされ、南都諸大寺も密教化をせまられていた（注五四）。当時の仏教界を取り巻くこのような状況の中で、東大寺や石山寺の意図と醍醐寺側の意図が一致し、特異な二臂如意輪觀音像の成立に至ったのではないだろうか。そして、これらの像の「如意輪觀音」という呼称が後世まで踏襲されたのは、醍醐寺の如意輪觀音に対する信仰が、石山寺および東大寺に浸透したことの表れであるといえよう。

音像（図9）は、片足を踏み下げた半跏の姿をとる。醍醐寺の本尊如意輪觀音像が二臂であったという記事、そして、片足を踏み下げた特異な六臂如意輪觀音像が伝わることから、石山寺や東大寺において片足を踏み下げた二臂像が「如意輪觀音」と称された背景に、醍醐寺僧の如意輪觀音信仰が密接に関わっていたことが推察される。

以上のことをふまえると、醍醐寺と関わりの深い僧が石山

寺や東大寺に進出する際、本尊もしくはその脇侍といった重要な位置を占める仏像を、「如意輪觀音」と称した可能性が高い。平安時代から鎌倉時代にかけての石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍に関する史料は乏しく、具体的なことは不明であるが、その背景に如意輪觀音に対する特別な信仰があったことは確かであろう。

さらにとりわけ九世紀以降、天皇や貴族が密教修法を重視

むすび

本章では、石山寺で特異な二臂如意輪観音像が成立した問題にあらためて注目し、これが特に東大寺に伝播した経緯について検討を行った。その結果、東大寺大仏左脇侍が如意輪観音と称され始めた時期、醍醐寺の法流、とりわけ醍醐寺僧淳祐と密接に関わる真言僧が、相次いで東大寺別当に就任していることを見出した。

醍醐寺は如意輪観音を本尊として特別に信仰する寺院であり、淳祐は石山寺本尊を如意輪観音と称することに関わったと考えられてきた人物である。さらに、石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍を如意輪観音であると記す凶像集の編者たちもまた、淳祐を祖とする石山流を継承する真言僧であったことが判明した。すなわち石山寺本尊タイプの如意輪観音像が成立した背景には、醍醐寺の如意輪観音信仰が深く関わっていたものと考えられる。そして石山寺と醍醐寺、そして東大寺が、如意輪観音信仰を軸とした密接な関係にあったことが窺えよう。

なお中宮寺本尊をはじめ、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像の中にも、如意輪観音と称されるものがある。しかし半跏思惟像を如意輪観音であると説く経典は見当たらず、日本以外に

確実な作例を見出すことができない。よってこれらの像も、日本において成立した特異な二臂如意輪観音像として注目されてきた。つづく第二章ではこの問題について検討を行いたい。

(注一) 『大正新脩大藏經』卷二〇、一九三中。

(注二) 『大正藏』七八―二一上。なお『勝語集』には、「鎮西觀世音寺如意輪像」もまた同じ形式であるとする。大宰府の觀世音寺を指すものと思われるが、実際にこのような二臂如意輪觀音像があったかは不明である。

(注三) 猪川和子「岡寺如意輪觀音像」(『MUSEUM』三二〇、一九七七年)。

(注四) 猪川氏前掲注3論文。

(注五) 田辺三郎助「江戸時代再興の東大寺大仏脇侍像について」(『仏教芸術』一三一、一九八〇年)。

(注六) 田村寛康「奈良時代東大寺盧舎那仏の両脇侍像について」(『仏教芸術』一二〇、一九七八年)。

(注七) 井上一稔『日本の美術 三二二 如意輪觀音像・馬頭觀音像』(至文堂、一九九二年)。なお『白宝抄』(「如意輪觀音法雜集」上)の「名字事」には、如意輪觀音の名の由来として、「大慈大悲にして衆生の諸願を円満し、また衆生の苦を破砕する」という、宝珠と輪宝の功德を表すような表現がみえる(『大正新脩大藏經』圖像部十一八四七下)。

(注八) 『大正新脩大藏經』二〇、一九三頁中。

(注九) 『大正新脩大藏經』一九、三四三頁中。

(注一〇) 『大正新脩大藏經』圖像部四、四九五頁上中。

(注一一) 『大正新脩大藏經』圖像部三、二二三下。

(注一二) 猪川和子「石山寺本尊觀音菩薩像」(『美術研究』二七二、一

九七一年)。福山敏男「石山寺の創立」(『寺院建築の研究 中』、中央公論美術出版、一九八二年)。井上一稔「奈良時代の如意輪觀音信仰とその造像―石山寺像を中心に」(『美術研究』三三三、一九九二年)。岩田茂樹「石山寺の彫像―本尊二臂丈六觀音像を中心に―」(『觀音のみてら 石山寺』奈良国立博物館、二〇〇二年)。徳竹由明「石山寺開基伝承の形成」(『日本文学』五二―三、二〇〇三年)。

(注一三) 井上氏前掲注一二論文。なお氏は、従来奈良時代の如意輪觀音信仰と考えられてきたものが、觀音に付属する如意宝珠やその陀羅尼の威力への信仰であったことを明らかにした。また正倉院文書中に、石山寺本尊の胎内に舍利を奉納したとみえることに注目し、大智度論等の舍利と如意宝珠を同体とみる説をふまえ、如意宝珠の力をもつ觀音を表現した像であったとした。すなわち石山寺本尊は造立当初は觀音であったが、後に密教の伝来によって、如意宝珠の力を代表する觀音が如意輪觀音であるということが定着した段階で、如意宝珠と関わりの深いこの像も、如意輪觀音と称されるに至ったとする。なお奈良時代の如意輪觀音信仰の唯一の例外として、『南天竺波羅門僧正碑并序』にみえる、菩提遷那による「如意輪菩薩像」の造像を挙げている。

(注一四) 岩田氏、徳竹氏前掲論文。なお、『石山寺縁起』は聖宝と觀賢も石山寺座主として同寺に止住したと伝えるが、徳竹氏はそれ以前の史料で両者を石山寺と結びつける史料が見当たらないことから、信憑性に欠けるとする。

(注一五) 高井觀海「十八道の研究」(『智山学報』新九、一九三六年)。

なお井上氏は、四度加行の成立は平安末から鎌倉初期といわれるため、淳祐がこの次第を四度加行のひとつとして作ったかは疑問であるとしている（井上一稔「新出・石山寺木造如意輪観音坐像をめぐる」『博物館学年報』三五、二〇〇三年）。

〔注二六〕 『秘藏金宝抄』九（『大正新脩大藏經』七八―三七二中）

如意輪観音六臂。当六観音并六道事。右第一思惟手是即聖観音也。修無垢三昧能救濟地獄受苦衆生第二如意宝珠手是即千手観音。修心樂三昧。雨宝能救餓鬼道飢饉苦第三念珠手馬頭観音也。修不退三昧。能度畜生道鞭撻苦左第一光明山手是十一面観音也。修歡喜三昧。能度阿修羅鬪諍苦第二蓮花手是即准胝観音也。修日光等四種三昧教化人道第三金剛手是即如意輪観音也。

〔注二七〕 本尊准胝観音像について、平安時代成立の醍醐寺所蔵『醍醐寺縁起』には「奉為御願、尊師造宮准胝堂」とあり、聖宝が皇子誕生を願って造立したことが記される。同縁起によれば、この准胝観音像を安置した准胝堂において求児法としての准胝法が修され、聖宝の寂後も観賢らの勤修により朱雀・村上両帝が誕生したという。しかし管見の限り、醍醐寺僧の周辺で、准胝観音への信仰が既存の仏像の尊名に影響を与えた例は見いだせない。平安時代後期、准胝堂が西国三十三所観音霊場の第十一番札所となつて、一般の参詣を集めた一方で、如意輪観音像を安置した如意輪堂が寺僧の儀礼の場になつたという。寺僧が如意輪観音により高い注目を向けた背景には、このような堂としての機能の差も関係していたかもしれない。この問題については、さらなる検討を要する。

〔注二八〕 『醍醐寺新要録』卷一「延命院篇」（醍醐寺文化財研究所編

『醍醐寺新要録 上巻』法蔵館、一九九一年）。

〔注一九〕 『醍醐雜事記』卷一（中島俊司編『醍醐雜事記』醍醐寺、一九三一年）。佐和隆研「醍醐寺の仏教と歴史」（『密教大系第六巻』法蔵館、一九九五年）。

〔注二〇〕 佐和隆研「聖宝僧正とその造像について」（『南都仏教』一、一九五四年）。西川新次「聖宝・会理とその周辺」（『國華』八四八、一九六二年）。永井清一「上醍醐―聖宝・重源を中心に―」（『古美術』二三号、一九七一年）。

〔注二一〕 徳竹氏前掲論文。

〔注二二〕 井上氏前掲注一五論文。

〔注二三〕 福山氏前掲注一二論文。

〔注二四〕 宮本忠雄「仏像と絵画の莊嚴」（『石山寺の信仰と歴史』鷺尾遍隆監修・綾村宏編集、思文閣出版、二〇〇八年）。

〔注二五〕 近藤謙「石山寺兜跋毘沙門天像に関する一試論」（『仏教大学大学院紀要』三二、二〇〇四年）

〔注二六〕 『続群書類従』釈家部、二十八輯上。ただし速水侑氏はこの巡礼記は前後となんの脈絡もなく行尊伝に挿入された観があるとして、行尊真撰とする積極的根拠はないとする（速水侑「観音霊場信仰の成立と展開」『観音信仰』塙書房、一九七〇年）。

〔注二七〕 田村氏前掲論文。

〔注二八〕 田村氏前掲論文。

〔注二九〕 井上氏前掲注一二論文。

〔注三〇〕 田村氏前掲論文。

〔注三一〕 紺野敏文「虚空蔵菩薩像の成立（下）―東大寺大仏殿脇侍像と講堂像をめぐる―」（『仏教芸術』二三三、一九九七年）。泉

武夫『日本の美術二八〇 虚空蔵菩薩像』(至文堂、一九九八年)。ただし、虚空蔵求聞持法の本尊は左手に宝珠を載せた蓮華を執るが、右脇侍の左手の印相や持物を明確に伝える史料がないため、はっきりとしたことはわからない。なお、『七大寺巡礼私記』に右脇侍の「頂」に「有三十五化仏」と記され、『観虚空蔵菩薩経』の「此天冠中、有三十五化像現」という記述と一致することが注目されている。

(注三二) 小野玄妙「東大寺盧舎那仏の右脇侍虚空蔵菩薩私考」(『考古学雑誌』六一四、一九一五年)。

(注三三) 田村氏前掲論文、泉氏前掲書。

(注三四) なお親通は、興福寺東金堂後戸の釈迦像の両脇にも、観音と虚空蔵が配されていたと記している。

(注三五) 『東大寺別当次第』(『東大寺要録』別当章)

(注三六) 永村眞「真言宗」と東大寺―鎌倉後期の本末相論を通して―
―『中世寺院史の研究』下、中世寺院史研究会編、法蔵館、一九八八年)。

(注三七) 『本朝高僧伝』九、『伝灯広録』中。

(注三八) 『野沢血脈集』。

(注三九) 平岡定海「平安初期における真言密教の南都進出について」(『結城教授頌寿記念 仏教思想史論集』大蔵出版、一九六四年)。堀池春峰「弘法大師と南都仏教」(『南都仏教史の研究 上 東大寺編』法蔵館、一九八〇年)。永村眞「真言宗」別当の受容」(『中世東大寺の組織と経営』塙書房、一九八九年)。
(注四〇) 平岡定海「東大寺の寺院構造について」(『日本寺院史の研究』吉川弘文館、一九八一年)。

(注四一) 淳祐の著作『要尊道場観』中の「虚空蔵菩薩道場観」(『大正新脩大蔵経』卷七八、五一下)には左手に如意宝珠、右手を与願印とする虚空蔵菩薩が説かれ、以後、これが真言宗内で継承されてゆく(泉氏前掲書)。

(注四二) 建久四年(一一九三)頃の醍醐寺本卷一の奥書に「保延五年秋此奉為 上皇草集之 前少僧都 永嚴」とあることから、編者を永嚴とする説もあるが、同じく鎌倉初期の常楽院本卷二には「真実二ハ恵什阿闍梨集之」とあり、当時からすでに諸説あったことが知られる。この問題について詳細な検討を行った田村隆照氏は、恵什が永嚴の命を受けて編纂したとの結論を述べている(『画像抄―成立と内容に関する問題』『仏教芸術』七〇、一九六九年)。

(注四三) 『別尊雑記』卷第一八「如意輪」(『大正新脩大蔵経』画像卷三、二二〇下)。「覚禅抄」卷第四九「如意輪下」(『大正新脩大蔵経』画像卷四、八八一中)。

(注四四) 『別尊雑記』の編者は心覚であるが、阿部泰郎氏は守覚と心覚の密接な関係や当時の状況をふまえ、守覚もまた編纂に関わっていたことを指摘した(阿部泰郎「守覚法親王における文献学」『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』勉誠社、一九九八年)。

(注四五) 真鍋俊照「心覚と別尊雑記について 伝記および画像「私加之」の諸問題」(『仏教芸術』七〇、一九六九年)。錦織亮介「別尊雑記の研究 その成立問題を中心にして」(『仏教芸術』八二、一九七一年)。

(注四六) 清水善三「覚禅抄における各巻の構成とその成立過程」(『仏

教芸術』七〇、一九六九年)。

(注四七) 中野玄三「石山寺観祐と密教図像」(『続日本仏教美術史研究』思文閣出版、二〇〇六年)。

(注四八) 福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造営」(『日本建築史の研究』桑名文星堂、一九四三年)。

(注四九) 『三宝絵』に載せる開基伝承は、以後、『扶桑略記』、『今昔物語集』、『東大寺要録』、『七大寺巡礼私記』等、諸書に少しずつ変容しながら採録されてゆくという(徳竹氏前掲論文、藤巻和宏「寺社縁起とお伽草子―東大寺縁起・石山寺縁起をめぐって―」、『三宝絵を読む』小島孝之・小林真由美・小峯和明編、吉川弘文館、二〇〇八年)。

(注五〇) 徳竹氏前掲論文。

(注五一) 『醍醐寺根本僧正略伝』(『群書類従』卷八下)。

(注五二) 『醍醐雑事記』卷一(中島俊司編『醍醐雑事記』醍醐寺、一九三一年)。

(注五三) 『醍醐寺新要録』上「如意輪堂編」。

(注五四) 菌田香融「平安仏教の成立」(『密教体系 六 日本密教Ⅲ』法蔵館、一九九五年)。



図1 観心寺本尊



はじめに

日本や中国において如意輪観音といえ、観心寺の秘仏本尊のような、如意宝珠と輪宝を持つ六臂の姿が通例である(図1)。すなわち「如意輪」の名は、すべての願いを叶えてくれるという「如意宝珠」と、煩惱を破碎し法を広める「輪宝」を意味す

るもので、如意輪観音はこれら二つの持物の力を合わせもつたほとけであると考えられている(注二)。

ところが石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍は、施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた二臂像であり、如意宝珠や輪宝をもたないにもかかわらず、如意輪観音と称されている。第一章では、このような特異な如意輪観音像が成立した背景に、醍醐寺の如意輪観音信仰が密接に関わっていた可能性を論じた。

なお如意輪観音像の形式に関わる日本独自の展開として、もうひとつ注目すべき問題がある。中宮寺の本尊は左足を踏み下げて右手の指先を頬に近づける、いわゆる半跏思惟像であるが、

寺伝によれば如意輪観音であるという(図2)。広隆寺の桂宮院や法隆寺の聖霊院には広袖の衣を纏った特異な半跏思惟像が伝わり、これらもまた如意輪観音と呼ばれている(図3・4)。しかるに半跏思惟の姿をした如意輪観音像は經典に説かれず、日本以外に確実な作例を見出すことができない(注二)。

これら如意輪観音と称される半跏思惟像は、いずれも聖徳太子と関わりの深い寺院に安置されてきたものである。後述するように、平安時代後期以降の日本には、太子の本地を如意輪観音とする信仰が存在していた。先行研究では、この本地の影響によって、太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称されるようになったものと考えられてきた。

しかしそもそも、なぜ平安時代後期に至って、太子は如意輪観音と結びつけられたのか。そして各像は、具体的にいつ



頃、どのような経緯で如意輪観音と称されるようになったのか。こうした根本的な問題については、従来十分な考察が行われぬまま現在に至っている。本章は、半跏思惟形の如意輪観音像の成立をめぐるこれらの問題についてあらためて検討を加えるものである。あわせて、石山寺本尊タイプの如意輪観音像との影響関係についても考察を行いたい。

一 半跏思惟形の如意輪観音像と聖徳太子信仰

冒頭で述べた通り、日本や中国における如意輪観音の作例は六臂の像容が一般的であるが、經典には二臂の姿も説かれている(注三)。たとえば唐の景龍三年(七〇九)に漢訳された『如意輪陀羅尼經』には、「如意輪聖觀自在菩薩」の像容

が次のように記される(注四)。

内院当心画三十二葉
開敷蓮花。於花台上
画如意輪聖觀自在菩
薩。面西結跏趺坐。



図4 法隆寺聖霊院

顔貌熙怡身金色相。首戴宝冠冠有化仏。菩薩左手執開蓮花。当其台上画如意宝珠。右手作説法相。

すなわち頭に化仏を付けた宝冠を戴いて、左手に如意宝珠を載せた蓮華を執り、右手で説法印を結んで、結跏趺坐する二臂像である。

また、唐の貞元十二年（七九六年）に漢訳された『大聖妙吉祥菩薩説除際教令法輪』にも、二臂の像容が説かれる^{（注五）}。

次明観自在。亦号如意輪。左掌摩尼珠。慧舒施願印。身皆白紅色。住大蓮華中。

ここでは、左手の掌の上に「摩尼珠」すなわち如意宝珠を載せ、右手は掌を外に向けて下に垂らす施願印とする。

さらに、『覚禅鈔』巻第四十九「如意輪下」には、『金輪呪王経』に基づく図像として、左手に如意宝珠を載せた蓮華を持ち、さらに右の掌の上に如意宝珠を載せ、結跏趺坐する二臂像が描かれている^{（注六）}。ただし『金輪呪王経』は今に伝わらないため、その実態は不明である。



このように経典には様々な二臂如意輪観音像が説かれるが、一方で、中宮寺本尊のような半跏思惟形の如意輪観音像は見当たらない。半跏思惟像が如意輪観音と呼ばれるようになった理由について、望月信成氏や源豊宗氏は、半跏思惟像と六臂如意輪観音像の像容の類似点に着目した^{（注七）}。すなわち六臂如意輪観音像の、右手第一手を思惟相とし、右の片膝を立てて両足の裏を合わせる形式（図1）が、半跏思惟像の、右手を右頬に当てて思惟し、左足を踏み下げる姿と近似していることから、半跏思惟像と如意輪観音が混同されるに至ったというのである。

これに対し、内藤藤一郎氏の説はさらに一步進んで、聖徳太子信仰の影響を重視するものであった^{（注八）}。十世紀の『聖徳太子伝暦』には太子が救世観音の応化身であるとの記述がある^{（注九）}。ここで内藤氏は特に、法隆寺の夢殿秘仏（図5）

に注目した。この像が「太子等身」と伝えられることから、『聖徳太子伝暦』以降、救世観音と称されるようになり、さらに如意輪観音の三昧耶形であ

る如意宝珠を捧げ持つことから、如意輪観音とも結びついたという。すなわちまず夢殿秘仏において救世観音と如意輪観音が結びつき、加えて、法隆寺と地理的に近い中宮寺の本尊も太子等身の像であるとの伝承を持つ^(注一〇)ことから、同じく如意輪観音と称されるようになったものと推測した。ただし、なぜこの時期に至って俄かに太子等身としての夢殿秘仏が注目され、これが如意輪観音と結びつけられたか、という問題については言及されていない。

この太子と如意輪観音の結びつきについて、さらに具体的に考証したのは井上一稔氏であった^(注一一)。井上氏は十二世紀成立の『東大寺要録』に、醍醐寺の開祖である聖宝が太子の後身と記される^(注一二)こと、また、真言僧守覚(一一五〇〜一二〇二)の著作『御記』において聖宝が「如意輪の化誕」とされている^(注一三)ことに注目した。聖宝が太子と如意輪観音のいずれとも結びつけられていることから、おおよそ十二世紀には太子・如意輪観音同体説が存在していたという。また十二世紀末の『水鏡』平城天皇条には、空海が太子の再誕であり、その本地が六臂の如意輪観音であると記される^(注一四)。このことから井上氏は、十二世紀末には確実に太子・如意輪観音同体説があったと指摘している。そして鎌倉時代以降、元久二年(一二〇五)に太子を主題とした『如意輪講

式』が作られ^(注一五)、真言律宗の開祖である叡尊(一二〇一〜一二九〇)が正嘉二年(一二五八)、大阪・磯長の太子廟で如意輪根本大呪を唱える^(注一六)など、太子と如意輪観音の結びつきが明確に表れてくる。したがって従来これらの史料をふまえ、太子・如意輪観音同体説の影響によって、太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と呼ばれるようになったものと考えられてきた^(注一七)。

しかしこれまで、十二世紀後半に至って、太子・如意輪観音同体説が生み出された事情については論じられてこなかったようである。この時期、にわかには論じられてこなかったようであれば、太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音とよばれるようになったとすれば、その背後には、何らかの意図のもとにこれを積極的に推し進めた人々の存在が想定できるのではないだろうか。

そこで注目されるのは、上述の太子・如意輪同体説が、空海や聖宝をはじめ、真言宗と関わりをもちながら記述されている点である。さらに聖宝は醍醐寺の開祖であり、後述するように、守覚と叡尊はともに醍醐寺の法流と密接な関係にあった。すなわち太子と如意輪観音が結びつけられた背景に、真言宗、とりわけ醍醐寺が深く関わっていたのではないかと推測した。

二 『別尊雜記』の四天王寺救世觀音像

それでは、太子ゆかりの半跏思惟像は、いかなる経緯で如意輪觀音と結びつけられたのであろうか。

そこでも、もつとも早く如意輪觀音と称された可能性の高い半跏思惟像として、大阪・四天王寺の金堂本尊に注目した。この像は現存しないが、十二世紀後半に真言僧心覚（一一六〇—一一八〇）が編纂した密教図像集『別尊雜記』にその姿をとどめている（図6）。巻第十八「如意輪」には様々な如意輪觀音の図像が集められ、そのひとつとして四天王寺



金堂本尊（以下、四天王寺像）の図像が収録される。右手を屈臂して掌を頬に近づけ、左足を踏み下げた半跏像であり、菩薩像ながら上半身を裸形とせず、広袖の衣を通肩に纏う。さらに頭には、高さのある特異な宝冠を戴いている。

四天王寺像の右上には「四天王寺救世觀音像」と記されており、そのすぐ下に「聖如意輪云々、仍私加之」との割り注が見える。すなわちこの像は「救世觀音」と呼ばれる一方で、「如意輪」とも称されるため、編者である心覚が「私に」、つまり個人的に如意輪觀音の巻に加えたものと解されてきた（注一八）。

なお従来、この像については、右手をどのように解釈するかが問題とされてきた。掌をわずかに頬に近づけていることから、思惟の様を表すと考えるのか、あるいは法隆寺献納宝物一五五号の金銅仏（図7）のように、掌を前方に向ける施無畏印とみるのか、意見が分かれてきたのである（注一九）。

京都の三千院や廬山寺には四天王寺像の模刻とみなされる半跏思惟像が伝わるが（注二〇）、いずれも掌を内側に向けて頬に近づけ、思惟の形を示している（図8）。

さらに十三世紀に成立した『聖徳太子伝私記』の裏

書にも、四天王寺像が思惟の形式をとっていたことを示唆する記事が見える(注二)。

但太子所造救世観音像者坐蓮華座二、以左手ヲ請御顔、以右手ヲ押右膝、此形像金堂数躰在之、如天王寺金堂之像也。

すなわち太子の造願した救世観音像は蓮華座に坐し、左手で顔を受け、右手で右膝を押えており、四天王寺金堂の像のような姿であるという。この「左手を以て御顔を請け、右手を以て右膝を押さふ」という記述は、半跏思惟の形式を表すものと解されてきた(注三)。

これらのことから、四天王寺像の右手はやはり思惟相であったか、少なくとも当時の人びとは思惟相と解していた可能



性が高い。よってここでは、この像を半跏思惟像として扱うこととしたい。

四天王寺は、用明天皇二年(五八七)の物部氏討伐に際して、聖徳太子がその戦勝を四天王に祈願し、寺塔の建立を誓ったことに端を発して創建されたと伝えられている(注三)。寛弘四年(一〇〇七)、金堂に安置する六重金塔のうちから同寺の縁起資財帳が発見され、その奥書に「乙卯歳正月八日皇太子仏子勝鬘」と記されていた(注四)。すなわちこれは、乙卯歳(推古三年「五九五」)に「皇太子仏師勝鬘」つまり聖徳太子が作成したものであるという。さらに各所に太子のものともみられる手印が捺されていたため、『御手印縁起』と通称されている。

『御手印縁起』は四天王寺像の存在を伝える最も古い史料であり、その金堂条に「金銅救世観音像一體」と記されてい



る(注五)。
像容につ
いては触
れられて
いない
が、造像

の動機について、次のように記述している。

金堂内安置金銅救世観音像、百済国王、吾入滅後、恋慕
渴仰、所造顕之像也。

これによれば四天王寺像は、太子の入滅後、百済の国王が太子を仰ぎ慕って造像したものであるという。田村圓澄氏は、この像が太子を思慕する感情から造立されたと伝えられることに注目し、「四天王寺が聖徳太子の追善のための寺であるとするれば、その金堂の半跏像に生前の太子の姿を見、思慕をささげたと考えられる」と述べている^(注二六)。つまり四天王寺像は、太子ゆかりの四天王寺に安置されていただけでなく、太子その人のイメージが重ねられた半跏思惟像であったといえよう。

『御手印縁起』に「救世観音」と記された四天王寺像が、十二世紀後半の『別尊雜記』に至って「如意輪」の巻に収録され、「如意輪」と注記された。ここで重要なのは、『別尊雜記』以前の史料には、半跏思惟像を如意輪観音と称する記事がまったく見当たらないということである。さらに『別尊雜記』が半跏思惟形の如意輪観音像として、あえて四天王寺像の図像を収録していることを考慮すると、この四天王寺像こ

そ、最も早く如意輪観音と称された半跏思惟像である可能性が高い。

加えて、十三世紀前半の『聖徳太子伝私記』には次のような記事が見える^(注二七)。

天王寺之金堂ノ自百済国所奉送之金銅救世観音御足下、
是如意輪也銘文在之云々。依之所知伝歟。救世観音如意
輪云事。以此尊所知歟。

四天王寺金堂の救世観音像の足下には「如意輪也」との銘文があり、この像によつて、救世観音と如意輪観音が同体であることが知られるという。すなわちこの記事もまた、太子と如意輪観音が、まさに四天王寺金堂本尊において結びついたことを示唆するものではないだろうか。

なお『別尊雜記』の成立時期について、仁和寺本所蔵の原本に収録された請雨経法の裏書に承安二年（一一七一）の年紀が見え、さらに東寺金剛蔵所蔵の写本の巻六に応保二年（一一六二）と記されることから、この頃に編纂が進められたものと考えられている^(注二八)。『別尊雜記』は全体が心覚の師の著作や口伝の引用によつて構成されており、とりわけ保延五年（一一三九）から翌年にかけて成立した密教図像集

『図像抄』の影響を強く受けている^(注二九)。錦織亮介氏は、『別尊雑記』に収録される図像の約三分の一が『図像抄』から引かれていることを明らかにした^(注三〇)。しかし、十二世紀前半の『図像抄』に、半跏思惟形の如意輪観音像は収録されていない。すなわち四天王寺金堂本尊が如意輪観音と称されるようになったのは、『別尊雑記』が撰述された十二世紀後半頃であったと推測される。

さらにここで、『別尊雑記』の四天王寺像に「私加之」と記されていることにも留意したい。これは『別尊雑記』の編者、心覚による注記と推定されている^(注三一)が、心覚がこの半跏思惟像を「私に」如意輪観音の項に加えたのだとすれば、四天王寺像はまさに心覚の周辺において、如意輪観音と称されはじめたのではないだろうか。

また、阿部泰郎氏によれば、『別尊雑記』の編纂は心覚一人のためでなく、彼の付法の弟子である守覚(一一五〇～一二〇二)の事業の一環であった可能性が高いという^(注三二)。守覚は後白河院の第二子にあたり、真言宗の広沢流の中核に位置する仁和寺御流を継承し、膨大な聖教の著述・編述を行ったことで知られている。『別尊雑記』の原本は仁和寺に伝わっているが、大村西崖氏はその理由の一つとして、守覚が仁和寺に住していたことを挙げている^(注三三)。すなわち『別

尊雑記』の編纂に関わった守覚もまた、四天王寺像を如意輪観音と称することに関係していた可能性がある。

これらのことから、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称された背景には、『別尊雑記』を編纂した心覚や守覚が関わっており、四天王寺像およびこれを安置した四天王寺という場が、何らかの重要な役割を果たしたことが想定されよう。そこで次に、『別尊雑記』の成立した十二世紀後半の四天王寺に目を向けてみたい。

三 十二世紀後半の四天王寺と醍醐寺

寛弘二年に『御手印縁起』が発見されたことにより、四天王寺は太子信仰の中心寺院としての地位を確立し、天皇や貴族の参詣が頻繁になったという。十二世紀後半も「太子信仰のメッカ」として繁栄を誇っていた^(注三四)。

また、四天王寺別当の座は康保元年(九六四)以降、天台僧に独占されており、十二世紀後半も依然として天台宗の支配のもとにあった^(注三五)。四天王寺の別当職は、中世を通じて天台宗の山門・寺門の両派が天台座主の座とともに、激しく争奪し合ったことでも知られている^(注三六)。長寛二年(一一六四)一月、この抗争が激化したため、緩和のための一手

段として、真言僧である覚性が第四十六代別当に補任された(注三七)。注目したいのは、この覚性が、『別尊雑記』と関わりの深い守覚の師であったことである。

覚性(一一二九〜一一六九)は鳥羽天皇の第五子であり、保延六年(一一四〇)に仁和寺で出家した。その後、師である覚法の入滅により仁和寺門跡となり、仁安二(一一六七)年には総法務となつて、仁和寺の興隆に尽くした(注三八)。覚性は後白河院の同母兄、つまり後白河院の子である守覚にとつては伯父にあたり、守覚が出家する際の戒師を務め、伝法灌頂を授けている。

重要なのは、覚性が四天王寺別当を務めた時期(一一六四〜一一六六)が、『別尊雑記』の成立期(一一六二〜一一七



一の前後)とほぼ重なる点である。すなわち覚性が四天王寺別当に就任したのとほぼ同じ頃、覚性の弟子にあたる守覚らが編纂した『別尊雑記』において、四天王寺金堂本尊が如意輪観音と称されたことになる。

さらにこの時期、同じく太子ゆかりの寺院である広隆寺においても、半跏思惟像が如意輪観音と称されていた。広隆寺は秦河勝が聖徳太子より授けられた仏像を安置するために建立されたと伝えられ、『上宮聖徳法皇帝説』をはじめとする太子伝において、太子建立寺院の一つとされてきた(注三九)。現在も「太秦の太子さん」と呼ばれ、太子信仰の寺院として名高い。

広隆寺には、「泣き弥勒」あるいは「宝髻弥勒」と通称される半跏思惟像が伝わっており(図9)、七世紀後半の作と推定されている(注四〇)。寛平二年(八九〇)の『広隆寺資財交替実録帳』には、金堂に二軀の「金色弥勒菩薩像」が安置されていたとの記事が見え、泣き弥勒はこのうちの一軀にあたると思われる。

一方、明応八年(一四九九)の『山城州葛野郡楓野大堰郷広隆寺来由記』(以下、『来由記』と記す)には、「安置広隆寺三尊記事」として「金銅弥勒菩薩像坐像高二尺八寸」「金銅救世

観音像 坐像高二尺二寸
立像高三尺「檀像薬師如来」の三尊が記される
臂如意輪也

(注四二)。藪田嘉一郎氏はそれぞれの法量に基づいて、「弥勒菩薩像」を宝冠弥勒に、「救世観音像」を泣き弥勒に比定した(注四三)。「救世観音像」には「二臂如意輪也」との注記があり、すなわち泣き弥勒は二臂如意輪観音であるという。

さらに注目したいのは、『来由記』の後半に引用される、永万元年(一一六五)の供養願文である。ここには金堂の安置仏として「本尊薬師如来像一体」、「金剛(ママ)弥勒菩薩像一体」、「金銅如意輪像一体」、「八尺十一面観音不空縹索等像各一体」が記されている(注四三)。薬師、弥勒、如意輪の三尊は『来由記』の記述と一致しており、この願文中の「金銅如意輪像」は『来由記』の「金銅救世観音像」、すなわち泣き弥勒にあたりと考えられている。これを引用する『来由記』自体の成立が室町まで下ることに注意が必要であるが、永万元年の願文をそのまま収録しているとすれば、覚性が四天王寺別当に着任した翌年に、泣き弥勒は「如意輪」と称されていたことになる。

永万元年の広隆寺別当は仁和寺僧寛敏であったが(注四四)、重要なのは、当時の仁和寺門跡を他ならぬ、覚性がつとめていたことである。よってその頃の広隆寺が覚性の影響を受け

ていた可能性は高い。

つまり十二世紀後半、太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称された四天王寺と広隆寺は、共に覚性の影響下にあった。そして、四天王寺像を最も早く「如意輪」と称する『別尊雑記』を編纂したのは、覚性の弟子の守覚らであった。すなわち太子ゆかりの半跏思惟像が、真言僧覚性の周辺の人物たちによって、如意輪観音と称されはじめたことが推測される。

そこで四天王寺および広隆寺に関わる覚性、そして『別尊雑記』に関わる守覚、心覚の経歴を辿ってゆくと、ひとつの重要な共通点が浮かび上がってくる。それは、彼らがいずれも醍醐寺の法流と深く関わっていたことである。

覚性の師にあたる覚法(一〇九二〜一一五三)は白河天皇の第四子であり、広沢流の中核となる仁和寺門跡となった一方で、醍醐寺の開祖聖宝を祖とする小野流を相承したことも知られる(注四五)。

守覚もまた高野山において、醍醐寺の勝賢(一一三八〜一九九六)から、小野流の一派である醍醐寺三宝院流を受けている(注四六)。この守覚の受法の目的は、覚法が果たし得なかった小野の秘法を受けることにあつたとみられている。守覚は真言宗の二大流派である広沢流と小野流を統合し、仁和寺

御流とよばれる独自の法流を創始したことで名高い。さらに心覚は守覚に先立って、勝賢から醍醐寺三宝院流の諸尊法を受法し、守覚への伝授に関わったという^(注四七)。

また覚性が守覚に伝法灌頂を受けた際、勝賢が誦経導師を勤めており^(注四八)、覚性と勝賢の交流も窺える。覚性自身が直接小野流を受法した記録はみあたらないが、師である覚法をはじめ、守覚や勝賢を通じて醍醐寺の法流と深く関わっていたことは十分に想定できる。

このように、半跏思惟形の如意輪観音像と関わりの深い覚性、守覚、心覚が、いずれも醍醐寺と密接な関係にあったことに注目したい。第一章で述べた通り、醍醐寺は如意輪観音を本尊として特別に信仰する寺院である。また前述のように、守覚がその著作『御記』において、醍醐寺の開祖聖宝を如意輪の化誕と記していることから、如意輪観音を重視していたことが窺える^(注四九)。よって、醍醐寺の法流と深く関わる覚性、心覚、守覚の三人にとって、如意輪観音は特別な位置づけにあった可能性が高い。『水鏡』や『御記』をはじめ、十二世紀の太子・如意輪観音同体説が、真言宗、とりわけ醍醐寺との関わりの中で記述されていることから、醍醐寺の如意輪観音信仰との密接な関係が窺えよう。

なおこれまであまり注目されてこなかった史料として、真

言僧道範(一一七八〜一二五二)の著作『初心頓覚抄』上にも次のような記述がみえる^(注五〇)。

日本国仏法始。聖徳太子御故也。彼太子申救世観音也。救世観音者聖如意輪観音也。其後聖武天皇東大寺立。廬遮那仏崇給シモ。聖如意輪化身御座也。次醍醐尊師聖宝僧正如意輪垂跡カヤ。サレハ醍醐流十八道本尊聖如意輪也。

ここに聖徳太子は救世観音すなわち如意輪観音であり、聖宝もまた如意輪の垂跡であると述べられている。聖徳太子と如意輪観音、聖宝、さらには醍醐寺を結びつける史料として重要であると考ええる。注目したいのはこれを記した道範が、守覚より広沢流を受法し、守覚の『秘抄』をもとに『中院流三十三尊法』を著すなど、守覚と深く関わる僧であったことである。

やはり太子・如意輪観音同体説が、醍醐寺の如意輪観音信仰を背景として成立し、守覚らを中心に流伝していたことが窺える。

それでは、彼らの周辺で聖徳太子ゆかりの半跏思惟像と如意輪観音が結びつけられたとすれば、その背景にはいかなる

意図があつたのであろうか。現時点では史料が乏しいため、結論を急ぐことは慎まねばならないが、ここでひとつの可能性を提示しておきたい。

最澄以来、太子信仰の盛んであつた天台宗に対し、真言宗においては平安時代を通じて明確な太子信仰が見られないという^(注五二)。その一方ですでに述べたように、十二世紀後半、天台宗は四天王寺を拠点とする太子信仰によって隆盛を誇つていた^(注五三)。このような状況の中で真言側も、覚性の別当補任を契機として四天王寺への進出をはかり、太子と如意輪観音を結びつけるという独自の太子信仰を生み出したのではないだろうか。



そして、太子と如意輪観音が結びつけられた背景には、望月信成氏らが指摘したように、半跏思惟像と六臂如意輪観音像の像容が似通っていることも影響していたものと推測される。すなわち如意輪観音を特別に信仰する僧が、両者の形式の類似点に着目した可能性は高い。特に、第一章で紹介した通り、醍醐寺の本尊如意輪観音像が二臂であつたという『醍醐寺新要録』の記述や、醍醐寺に片足を踏み下げた特異な形式の六臂如意輪観音像(図10)が伝わる点も注目されよう。

さらに、やや時代の下る天台側の史料であるが、十四世紀の『溪嵐拾葉集』巻第八九に、次のような記事がみえる^(注五三)。

一 四天王寺救世観音像 又号都卒内院 聖徳太子即天

照太神再誕也。未来記云。我末世。応世次第者。聖武天皇弘法大師聖宝僧正云々。依之小野方聖法流故。以如意輪以十八道本尊。聖法即大日習故也。此救世観音諸義軌中、総以不見処也知。六観音総体救世観音。其六観音中、如意輪為本。聖徳太子六臂如意輪造給時。思惟二臂秘仏作也。

第四章で後述するように、平安時代後期以降、太子が未来の予言者として信仰されるようになり、太子に仮託した未来記が数多く著される。この記事もまた、太子の未来記に典拠を求める形式をとっている。また『東大寺要録』巻第二には、聖徳太子が「我三度誕生日本国。其名諱共有聖字。即聖徳太子。聖武天皇。聖宝僧正也。」と述べたとの記述がみえるが、この『溪嵐拾葉集』の記事でも同様に、聖宝が聖徳太子の後身とされている。この記事の詳細な意味については今後さらなる検討を要するが、「依之小野方聖法流故。以如意輪以十八道本尊」の部分は、聖宝が聖徳太子の後身であるゆえに、聖宝を祖とする小野流は十八道加行の本尊を如意輪観音とするのだ、と解釈できる。その前提として、太子・如意輪観音同体説を意識していることが窺える。

ここで特に注目したいのは、これがまさに「四天王寺救世観音」の項に記されていること、そして聖徳太子が「思惟二臂秘仏」を造ったと述べている点である。すなわちこの記事もまた、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像と如意輪観音が結びつけられた背景で、四天王寺金堂本尊救世観音像および醍醐寺小野流の僧たちが重要な役割を果たしたことを示唆しているのではないだろうか。

四 石山寺本尊タイプの二臂如意輪観音像との影響関係

なお石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍は、施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた二臂像であり、本来の尊名は観音であつたが、ある時期から如意輪観音とよび変えられたことが注目されてきた。第一章では石山寺において、経典に説く姿と異なる如意輪観音像が成立し、さらにこれが東大寺へと伝播した経緯について検討した。従来、十世紀に石山寺に進出した醍醐寺僧、淳祐の如意輪観音信仰の影響が指摘されてきたが、東大寺大仏左脇侍が如意輪観音と称された十世紀末から十二世紀にかけて、醍醐寺の法流や淳祐と関わりの深い僧が続々と東大寺別当に就任していたことが判明した。すなわち石山寺本尊タイプの如意輪観音像は、十世紀から十二世紀にかけて、醍醐寺の如意輪観音信仰との関わりの中で成立した可能性が高い。

すでに述べた通り、半跏思惟形の如意輪観音像があらわれたのは十二世紀後半であり、石山寺本尊タイプの後を受けて成立したことになる。両者は共に片足を踏み下げた半跏の坐勢をとり、また、半跏思惟像が右手で思惟し左手で膝を押さえる姿は、石山寺本尊タイプが右手を施無畏印、左手を与願印とする形式と似通っている。このような像容の類似点から

も、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像と如意輪観音を結びつけるという発想の源に、石山寺本尊タイプの如意輪観音像があったことは十分に想定できる。

さらにここで注目したいのは、『別尊雜記』の編纂に関わった守覚が、淳祐を祖とする醍醐寺流の一派、石山流を継承している点である^(注五四)。守覚の周辺で半跏思惟の姿をした特異な二臂如意輪観音像が創案されたとすれば、そのイメージの根源には、やはり石山寺本尊「如意輪観音」像があったのではないだろうか。

なお十世紀以降、石山寺は靈験あらたかな観音を祀る寺院として、皇族や貴族の間で「石山詣で」が流行した^(注五五)。これが、本尊が如意輪観音と称された時期と重なることも注目されよう。また寛弘元年(一〇〇四)に中宮彰子のための増益法が修され、翌年にも敦康親王のために観音法が実修されるなど、石山寺は公的修法の場ともなった^(注五六)。十一世紀以降は西国三十三所観音霊場の第十三番札所ともなり、さらに多くの参詣を集めてゆく。すなわちこのような状況をふまえると、本尊の尊名および変えを伴った醍醐寺僧の石山寺への進出は、成功したとみてよいであろう。

覚性らが四天王寺に進出する際、その本尊を如意輪観音とよび変えた背景には、石山寺の成功に倣いたいという思いも

あったかもしれない。

すなわち半跏思惟形の如意輪観音像と石山寺本尊タイプの如意輪観音像は密接な影響関係にあったことが推測されるが、現時点では史料が不足しているため、今後のさらなる課題としたい。

五 半跏思惟形の如意輪観音像と叡尊

なお冒頭で紹介したように、聖徳太子と関わりの深い中宮寺、広隆寺の桂宮院、法隆寺の聖霊院にも如意輪観音と称される半跏思惟像が伝存する。特に広隆寺桂宮院と法隆寺聖霊院の像は広袖の衣を通肩に纏っており、四天王寺金堂本尊の服制と近似している。これらの半跏思惟像は、どのような経緯で如意輪観音と呼ばれるようになったのであろうか。

まずは、太子の離宮跡に建てられたと伝えられる広隆寺桂宮院の本尊についてみてゆきたい^(注五七)。桂宮院の本尊として伝来する半跏思惟像は、その様式から十二世紀頃の制作と推定されている(図3)。この像の尊名を伝える最も古い史料は、建長三年(一二五一)に桂宮院を再興した際の勸進文である^(注五八)。

而築壇場八角円形堂也、本尊者、殊為顯本地靈像、更手尽彫刻之力、而造二臂如意輪也。

ここに桂宮院の本尊は「二臂如意輪」と記されている。この勧進文を作成したのは、東大寺系の三論宗および醍醐寺地藏院流の密教を受け継ぐ澄禅（一二二七～一三〇七）であった（注五九）。彼は建長三年（一二五一）に叡尊から具足戒を受け、同年に桂宮院の復興を行っている。しかし、このとき彼はまだ二十五歳という若さであり、追塩千尋氏は、この復興事業の背後に叡尊を中心とする西大寺流の協力があったものと推測している（注六〇）。

さらに、法隆寺聖霊院にも四天王寺像とよく似た半跏思惟像が伝わっており、現在も如意輪観音と称されている（図4）。十一世紀から十二世紀頃の作と推定されているが、この像の尊名については、管見の限り、十四世紀後半の『法隆寺縁起白拍子』を待たなければならぬ。ここに「救世ノ等身ノ二臂の像」と記され（注六一）、さらに江戸時代の法隆寺の寺誌『古今一陽集』には、「金色二臂如意輪像」「御本地二臂如意輪像」とされている（注六二）。これより遡る史料が見当たらないため、この像がいつから「如意輪」の名で呼ばれていたのかは不明である。

しかしここで、十三世紀後半、『聖徳太子伝私記』の著者である顕真が聖霊院の院主を務めていたことに注目したい。すでに述べたように『聖徳太子伝私記』には、四天王寺金堂本尊が半跏思惟の姿であり、その足下に「如意輪也」との銘文があったことが記されている。さらに顕真は、聖霊院を拠点として太子信仰と真言密教の融合に努めたことでも知られ、建長六年（一二五四）には叡尊と共に、空海を太子の後身とする説に基づいた「聖皇曼荼羅」を制作している（注六三）。さらに正嘉二年（一二五八）、叡尊に聖霊院の六臂如意輪観音像の修理を勧めている（注六四）。これらの事績から、顕真が太子と如意輪観音を同体とみる信仰を有していたことが窺える。この像がいつから聖霊院に安置されていたかは不明であるが、これが如意輪観音と称された背景には、顕真の影響が想定できよう。

つづいて中宮寺の本尊について検討したい。中宮寺は聖徳太子が母、間人皇后の菩提を弔うため、皇后の御所を寺としたことに始まると伝えられ、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』や『上宮聖徳法皇帝説』等において太子建立七寺のひとつとされる（注六五）。しかし、寺院の沿革を語る史料が乏しく、正確なことは不明である。平安時代に著しく荒廃し、鎌倉時代の文永年間（一二六四～七五）に尼信如らによって再興され

たが、相次ぐ火災によって再び衰退してしまふ。

本尊の半跏思惟像(図2)は寺伝では如意輪観音と称されているが、この像の制作事情を窺わせる史料はなく、当初の尊名も不明である。制作年代についても、七世紀の前半から後半までの範囲で意見が分かれている(注六六)。この像の尊名を明記する最も古い史料は、弘安四年(一二八一)の『尼信如願文』である(注六七)。これは中宮寺の復興事業を終えた信如が、落慶供養にのぞんだ際の願文とされる。ここに「三間二階之金堂。安置等身二臂之如意輪。」とあり、すなわち金堂に二臂の如意輪観音を安置したことが記される。よって現存する史料の中では、信如が最も早く中宮寺本尊を如意輪観音と称したことになる。

なお、そもそも中宮寺の復興を志したのは、叡尊の甥にあたる惣持であった。惣持が同寺の金堂に参籠して祈請したところ、夢中に聖徳太子が現れ、尼衆を以て再興せよと告げたという。そこで、惣持の依頼を受けた叡尊が選んだ尼僧こそ、信如であった(注六八)。また、叡尊の自伝『金剛仏子感身学正記』には、まだ在俗の女房であった頃の信如が登場する(注六九)。彼女は、叡尊の弟子の剃髪が正式な作法で行われていることを見て感動し、叡尊の弟子達に自らが見た夢の体験などを語っている。信如が中宮寺復興に関与した背景には、このよう

な叡尊との親しい交流があったのであろう。

以上、中宮寺、広隆寺桂宮院、法隆寺聖霊院に伝わる作例について検討した結果、これらがいずれも、十三世紀以降の史料において、如意輪観音と称されていることが判明した。さらに重要なのは、それぞれの像に深く関わる澄禪、顕真、信如の三人が、みな叡尊と密接なつながりを持っていたということである。

前述の通り、叡尊は太子と如意輪観音を団体とする信仰を有していたことで知られている。正嘉二年(一二五八)、太子の影像を祀る法隆寺聖霊院に安置された六臂如意輪観音を修理し(注七〇)、同年に大阪・磯長の太子廟で天下太平のために如意輪根本大呪を唱えている(注七一)。また、文永五年(一二六八)に叡尊ゆかりの人々によって造立された元興寺極楽房の孝養太子像の胎内には、如意輪陀羅尼を記した願文が納入されていた(注七二)。

すなわち中宮寺像、広隆寺桂宮院像、法隆寺聖霊院像は、いずれも叡尊の影響によって、如意輪観音と称されたのではないだろうか。

叡尊は十七歳の時に醍醐寺で出家した後、十八道加行・金剛界の初行などの基本的な修法を修め、高野山や東大寺で密教の修行を続けた(注七三)。また、叡尊は戒律の復興をめざす

真言律宗の開祖としてのイメージが強いが、そもそも彼が戒律の復興を志したのは、空海の『遺戒』に戒律を犯す者は仏弟子にあらず、とあることに心を打たれたためであるという（注七四）。追塩千尋氏は、このような真言僧としての叡尊の活動にあらためて注目し、叡尊が生涯、醍醐寺で学んだ密教を根本としていたことを指摘している。つまり叡尊もまた、醍醐寺の如意輪観音信仰と深い関わりをもっていたと考えられる。そして十二世紀後半に成立した太子・如意輪観音同体説を継承し、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像と如意輪観音をあらためて強く結びつけたのではないだろうか。

なお、叡尊が活躍した十三世紀後半、石山寺の本尊如意輪観音像について、注目すべき展開があらわれる。弘長三年（一二六三）に石山寺衆徒らによって注進された『石山寺流記』には、石山寺本尊について「或説聖徳太子第二生御本尊云々」と記される（注七五）。



七五。なお中前正志氏は、これが「天皇之御本尊」に対する注記であることから、「聖徳太

子第二生」とは、太子の後身とされる聖武天皇を指すものと指摘している（注七六）。重要なのは、ここで石山寺本尊が聖徳太子と結びつけられている点である。以後、十四世紀成立の『石山寺縁起』においても「聖徳太子二生の御本尊」と記される（注七七）。中前氏によれば、『石山寺流記』以前の史料では太子と石山寺の関わりが確認できないため、十三世紀後半に至って両者が関係づけられた可能性が高いという。

ここで注目したいのは、石山寺本尊と叡尊の関わりである。石山寺本尊は承暦二年（一〇七八）の火災により焼失している（注七八）。その再興については時代の下る史料しか伝わらないが、江戸時代の『石山寺年代記録』や『石山要記』には、「興正菩薩」つまり叡尊が本尊を再興したとある（注七九）。

しかし、現在の石山寺本尊は十一世紀ごろの様式を示していることに加え、『金剛仏子感身学正記』をはじめとする叡尊の伝記類に、石山寺に關与したという記録は見当たらない。よって叡尊が本尊を再興したとするこれらの記事は、信憑性のないものとして、これまで重要視されてこなかった。

その一方で近年、石山寺本尊の胎内から水晶製の五輪塔が発見された（図11）。地輪と火輪の平面が六角形を呈するが、これは叡尊の周辺で多くみられる五輪塔の特徴である（注八〇）。この五輪塔を納めた木製厨子には、寛元三年（一二四五）に

石山寺座主実位が奉安した旨が墨書されている。実位の師は、醍醐寺報恩院流の祖として知られ、醍醐寺座主をつとめた憲深（一一九二～一二六三）である。叡尊と憲深は同時期に活躍した醍醐寺僧であり、実位が叡尊と関わりをもっていたことも想定できる。また、叡尊が復興しその活動の拠点とした西大寺に、石山寺旧本尊の前立（注八二）（図12）とかなり近い形式の二臂如意輪観音像（図13）が伝わることも注目される（注八二）。石山寺本尊と叡尊自身を直接関係づける史料は確認できないが、これらの遺品、および『石山要記』や『石山寺年代記録』の記事は、叡尊と密接な関係にある人物が、十三世紀に石山寺本尊に関わったことを示唆するものとも考えられる。



重要なのは、『石山寺流記』において石山寺本尊と聖徳太子が結びつけられたのも、同じく十三世紀であったことである。すなわちその背景には、太子と如意輪観音を同体とする叡尊の信仰が密接に関わっていたのではないだろうか。この問題について、現時点では史料が乏しいため、今後さらに詳しく追究してゆきたい。

むすび

本章では、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称されるようになった経緯について検討を行った。従来の研究により、平安時代後期に成立した、太子と如意輪観音を同体



とみる信仰の影響が指摘されてきた。そこで関係史料にあらためて目を向けると、

太子・如意輪観音同体説が、真言宗、とりわけ醍醐寺との関わりの中で記述されていることを見出した。

さらに、もつとも早く如意輪観音と称された半跏思惟像として、太子ゆかりの四天王寺金堂本尊に注目した。十二世紀後半の『別尊雑記』には、編者が四天王寺金堂本尊を「私に」如意輪観音とよんだことが記されている。そこでさらに、十二世紀後半の四天王寺に目を向けたところ、『別尊雑記』の編纂に関わった守覚の師にあたる覚性が、まさにこの時期の別当に就任していたことが判明した。覚性、守覚、そして『別尊雑記』の編者心覚は、いずれも如意輪観音信仰の盛んな醍醐寺と密接な関係にあった。すなわち太子ゆかりの半跏思惟像は、彼らの周辺で如意輪観音と結びつけられたものと推測される。

なお第一章で論じたように、半跏思惟形の如意輪観音像に先行して、石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍が、醍醐寺僧淳祐の影響により如意輪観音と称されていた。これら石山寺本尊タイプの如意輪観音像は、半跏思惟像と像容の上で類似点が多く、何らかの影響関係にあったことが想定される。特に守覚が、淳祐を祖として石山寺で成立した醍醐寺流の一派、石山流を継承していたことも留意される。

また、中宮寺、広隆寺桂宮院、法隆寺聖霊院に伝わる作例

についても検討した。その結果、これらがみな、十三世紀後半以降、叡尊の信仰の影響を受けて如意輪観音と呼ばれた可能性を指摘することとなった。叡尊もまた醍醐寺の密教を根本とする僧であり、太子ゆかりの半跏思惟像は、彼によってあらためて如意輪観音と強く結びつけられたものとみられる。

すなわち半跏思惟形の如意輪観音像は、十二世紀後半から十三世紀にかけて、醍醐寺を中心とする人的ネットワークによって生み出された可能性が高い。なお、覚性や守覚、叡尊は如意宝珠を用いた修法、いわゆる宝珠法とも深い関わりをもっていた。如意宝珠が如意輪観音を象徴する重要な持物である点が注目される。つづく第三章では、醍醐寺をめぐる宝珠法の展開と如意輪観音信仰の関わりについて検討したい。

(注一) 岩本裕氏の研究により、如意輪観音の原名は「チャクラヴァルティ・チンターマニ」であり、「どこへでも自由自在に転がっていつて、衆生の願いを何事でも聴き届けてくれる者」の意であることが、ほぼ定説化している。(岩本裕「如意輪観音の原名について」『足利惇氏博士喜寿記念 オリエント学インド学論集』国書刊行会、一九七八年)。すなわち如意輪観音は、如意宝珠の信仰に基づいて成立したほとけと考えられているが、本来「輪のように転がる如意宝珠」の意であった「如意輪」を、漢訳の段階で「如意宝珠と輪宝を持つ者」と解したことから、輪宝が持物に加わったと見られている。(宮治昭「観音菩薩像の成立と展開―インドを中心に―」『シルクロード学研究』十一、シルクロード学研究センター、二〇〇一年。朴亨國「中国の変化観音について」『シルクロード学研究』十一 観音菩薩像の成立と展開―変化観音を中心に―インドから日本まで』シルクロード学研究センター、二〇〇一年。同「如意輪観音像の成立と展開―インド・東南アジア・中国―」『佛教藝術』二六二、二〇〇二年)。よって漢訳経典を受容した日本においても、輪宝を持つ六臂像が通例となっている。

(注二) 宮治氏および朴氏がインド、中国、東南アジアの作例を網羅的に紹介しているが、如意輪観音であることが確実な半跏思惟像は見出せないという(宮治氏、朴氏前掲論文)。

(注三) 経軌や白描図像および現存作例における如意輪観音の臂数は、二臂、四臂、六臂、八臂、十臂、十二臂の六種類がある(朴氏前掲論文)。

(注四) 『大正新脩大蔵経』二〇―一九三中。

(注五) 『大正新脩大蔵経』一九―三四三中。

(注六) 『大正新脩大蔵経』図像部四―四九五上中。

(注七) 望月信成「如意輪観音と弥勒菩薩」(『寧楽』二一、一九二六年)。源豊宗「美術史雑記―中宮寺本尊と我國の半跏思惟像―」(『仏教美術』十八、一九三一年)。なお両氏は半跏思惟像が原則として弥勒菩薩を表すものであるという意見を前提に論を進めている。

(注八) 内藤藤一郎「夢殿秘仏と中宮寺本尊」一―四(『東洋美術』四、五、六、八、一九三〇―一九三一年)。

(注九) 「救世観音」という名称の由来、成立については膨大な先行研究があるが、藤井由紀子氏がこれらを整理し、詳細な検討を行っている。(藤井由紀子「救世観音」の成立について)『日本古代の祭祀と仏教』吉川弘文館、一九九五年)。

(注一〇) 内藤氏は、中宮寺像が太子と等身近世の史料であるが、元治元年『伊河流我中宮尼寺縁起』や「本地二臂如意輪観音等身像」「太子御等身之像」とあり、中宮寺像も太子等身の像と解されていたことを挙げている。

(注一一) 井上一稔『日本の美術』三二二 如意輪観音像・馬頭観音像(至文堂、一九九二年)。

(注一二) 『東大寺要録』巻第二(筒井英俊編『東大寺要録』全国書房、一九四四年)。

我(筆者註)聖徳太子) 三度誕生日本国。其名諱共有聖字。即聖徳太子。聖武天皇。聖宝僧正也。

(注一三) 『御記』(『大正新脩大蔵経』七八―六一六上)醍醐僧正(聖宝：筆者註)如意輪化誕也。

(注一四) 『水鏡』平城天皇条(『国史大系』第二十二巻上 水鏡・大鏡)吉川弘文館、一九六六年)

大方此大師(筆者註)空海)ト申ハ。昔ノ聖徳太子御再誕ニテ御座バ。遠キ御本地ハ両界不二ノ大日如来。近ハ六臂ノ如意輪救世観音ノ垂跡ニテ御座バ。

(注一五) 石田茂作『聖徳太子全集第五巻 太子関係芸術』(龍吟社、一

九四三年)。

(注一六) 『金剛仏子感身学正記』正嘉二年条(奈良国立文化財研究所編『西大寺叡尊伝記集成』一九七七年、法藏館)

六日。太子御廟。一夜不断満如意輪大呪祈誓。

(注一七) 田中重久氏、毛利久氏らも太子如意輪観音説の影響を重視している。(田中重久「日本の円堂と印度の円堂」『日本に遺る印度系文物の研究』東光堂、一九四三年。毛利久「半跏思惟像とその周辺」『半跏思惟像の研究』吉川弘文館、一九八五年)。

(注一八) 真鍋俊照「心覚と別尊雜記について 伝記および凶像「私加之」の諸問題」(『佛教藝術』七〇、一九六九年)。錦織亮介「別尊雜記の研究 その成立問題を中心にして」(『佛教藝術』八二、一九七一年)。錦織亮介氏によれば、「私」という字は当時、一人称の「私」の意味ではほとんど使われず、「個人的に」、「私的に」という意味で使われていたため、「ワタクシ」「ワタクシニ」と読むべきであるとす。

(注一九) 石松日奈子氏は「四天王寺像の形を冷静に判断すれば、右手の掌は少し内側に向け、右臂は右膝上につき、上半身はやや右に傾いており、明らかに施無畏印ではなく思惟相であると思われる。」と具体的な根拠を示し、四天王寺像を半跏思惟像に分類した(「弥勒坐勢研究―施無畏印・倚坐の菩薩像を中心に」『MUSEUM』五〇二、一九九三年)。また稲木吉一氏は、中宮寺像などの既存の半跏思惟像を救世観音信仰に取り込むため、四天王寺像の印相をあえて思惟相としたとの見解を述べている(稲木吉一「聖徳太子と初期仏像観」『造形と文化』雄山閣、二〇〇〇年)。

(注二〇) 半跏思惟形の如意輪観音像の作例として、しばしば広袖の衣を纏った三千院の像が取り上げられるが、この像の胎内納入願文には「救世観世音菩薩」とのみ記され、史料上、これが

如意輪観音と称された形跡はない(佐々木正則「三千院救世観音像内納入願文―願主中臣行範に対する疑義ならびに前備中守中原朝臣行範について」『佛教藝術』一四三、一九八二年)。なお廬山寺像も半跏思惟形の如意輪観音像の代表的な作例であるが、史料に乏しく、尊名の変遷については不明である。

(注二一) 荻野三七彦『聖徳太子伝古今目録抄』(名著出版、一九八〇年)。

(注二二) 紺野敏文氏は「左右の手が逆なのは誤写か」としている。「請来」本様の写しと仏師(二)―「太子御形」半跏思惟像とその展開(上)・(下)―『佛教藝術』二五六、二五八、二〇〇一年)

(注二三) 福山敏男「四天王寺の建立年代に関する研究」(『東洋美術』二一、一九三五年)。村田治郎「四天王寺創立史の諸問題」(『聖徳太子研究』二、一九六六年)。田村圓澄「四天王寺草創考」(『奥田慈応先生喜寿記念 仏教思想論集』奥田慈応先生喜寿記念論文集刊行会、一九七六年)。大橋一章「四天王寺の発願と造営について」(『風土と文化』一、二〇〇〇年)。

(注二四) 『御手印縁起』は、本文中に十世紀の『聖徳太子伝暦』からの引用があること、全体が擬古的な文章で書かれていることから、七世紀以来の諸史料を基礎として、金堂から発見される直前に偽作されたものと考えられている(赤松俊秀「南北朝内乱と未来記について―四天王寺御手印縁起・慈鎮和尚夢想記―」『鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九五七年)。

(注二五) 『御手印縁起』金堂条(出口常順・平岡定海編『聖徳太子・南都仏教集』玉川大学出版部、一九七二年)。

金堂一宇。一重。瓦葺。

金堂救世観音像一体。

四大天王像四体。

金塗六重宝塔位置基。

(注二六) 田村圓澄「半跏思惟像と聖徳太子信仰」『古代朝鮮と日本仏教』講談社、一九八五年。中国における半跏思惟像は、その多くが釈迦の成道前の姿、すなわち悉達太子として造像されたものである(水野清一「半跏思惟像について」『東洋史研究』五―四、一九四〇年)。なお聖徳太子の伝記が釈迦の生涯になぞらえられていることは、しばしば指摘されている(石田茂作「太子信仰の変遷―聖徳太子奉讃会編『聖徳太子と日本文化』一九五一年、平楽寺書店)。田村氏によれば、悉達太子と聖徳太子はともに「太子」であり仏法を広めた人物であるから、太子関係寺院に安置された半跏思惟像は、まさに悉達太子になぞらえた聖徳太子のイメージを重ねたものであったという。また、紺野敏文氏は聖徳太子とその一族の主導する造像が半跏思惟像と深く関わっていたとし、太子に関わる半跏思惟像の様式の変遷について論じた(「請求「本様」の写しと仏師(二)―「太子御形」半跏思惟像とその展開(上)・(下)―」『佛教藝術』二五六、二五八、二〇〇一年)。

(注二七) 荻野三七彦『聖徳太子伝古今目録抄』(名著出版、一九八〇年)。
(注二八) 真鍋氏前掲論文。
(注二九) 真鍋氏、錦織氏前掲論文。
田村隆照「凶像抄 成立と内容に関する問題」『佛教藝術』七〇、一九六九年)。
(注三〇) 錦織氏前掲論文。

(注三一) 真鍋氏、錦織氏前掲論文。
(注三二) 阿部泰郎「守覚法親王における文献学」『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』平成九年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」助成出版、一九九八年)。

(注三三) 大村西崖「別尊雜記及び作者心覚阿闍梨に就て」『仏教学雑誌』二一六、一九二一年)。
(注三四) 井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、一九五六年、二五七―二六七頁)。川岸宏教「四天王寺別当としての慈円―御手印縁起信仰の展開―」『四天王寺学園女子短期大学研究紀要』六、一九六四年。林幹彌『太子信仰 その発生と発展』(評論社、一九七二年、五一―七四頁)。名畑崇「太子観の展開とその構造」『仏教史学研究』一八―二、一九七六年)。

(注三五) 『天王寺別当次第』に記された四天王寺別当と中世の四天王寺の状況については、川岸宏教氏の一連の論考に詳しい(「四天王寺別当としての慈円―御手印縁起信仰の展開―」『四天王寺学園女子短期大学研究紀要』六、一九六四年。「叡尊と四天王寺―御手印縁起信仰の展開―」『四天王寺学園女子短期大学研究紀要』七、一九六五年。「釈迦如来転法輪所・当極楽土東門中心」『日本仏教学会年報』四二、一九七七年、平楽寺書店。「中世初期の四天王寺」『IBU四天王寺国際仏教大学紀要』文学部三一、短期大学部四〇、一九九九年)。
(注三六) 川岸宏教「四天王寺別当としての慈円―御手印縁起信仰の展開―」(前掲注三五)。
(注三七) 「天王寺別当次第」『僧官補任』、川岸宏教「年編 四天王寺史稿(八)―『聖徳太子研究』八、一九七四年)。
覚性法親王 長寛二正十四任。鳥羽院御時被付園城寺了。可有辞退之由被仰。仍辞退。

(注三八) 阿部氏前掲論文。
(注三九) 清滝淑夫「広隆寺の成立に就いて」『南都仏教』一四、一九六三年)。林南壽「広隆寺の創立と移転」『日本歴史』六一、

費補助金「研究成果公開促進費」助成出版、一九九八年)。

一九九九年)。同「太子信仰の寺への変貌」(『廣隆寺史の研究』中央公論美術出版、二〇〇三年)。

(注四〇) 林南壽「蜂岡寺と秦寺の本尊」(『廣隆寺史の研究』中央公論美術出版、二〇〇三年)。

(注四一) 『群書類従』第二十四輯 釈家部。

(注四二) 藪田嘉一郎「太秦広隆寺蔵二軀半跏思惟形像の中世における伝来と信仰(上)」(『佛教史学』四、一九五〇年)。

(注四三) 『群書類従』第二十四輯 釈家部。

(注四四) 追塩千尋氏の紹介する大谷大学蔵『広隆寺別当補任次第』により、保元三年(一一五八)から十四年間に任じたことが知られる(追塩千尋「平安・鎌倉期広隆寺の諸相」『日本古代の祭祀と仏教』吉川弘文館、一九九五年)。

(注四五) 範俊から覚法への受法については小島裕子「院政期における愛染王御修法の展開」(『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』平成九年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」助成出版、一九九八年)に詳しい。

(注四六) 小島氏前掲論文。

(注四七) 勝賢から心覚への伝授については、土谷恵「中世初頭の仁和寺御流と三宝山院流」(『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』平成九年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」助成出版、平成十年)に詳しい。

(注四八) 『野沢大血脈』

(注四九) 『御記』(『大正新脩大蔵経』七八―六一六上)

(注五〇) 醍醐僧正(『聖宝』筆者註)如意輪化誕也。

(注五一) 『真言宗全書』第二十二(真言宗全書刊行会、一九三四年)。

(注五二) 木村博「中世における密教文化―所謂「密教化」の問題と「法隆寺」―」(『歴史教育』一五―八、一九六七年)。林幹彌氏前掲書。

(注五三) 井上光貞氏によれば、四天王寺への信仰は、①四天王寺に詣

でて念仏百万遍を満たすことは往生行として甚だ功德があるとす思想、②四天王寺金堂の舍利を供養して瑞相にあい、往生の安心を得るとする思想、③極楽の東門たる四天王寺に参詣して往生者と結縁し、ここに小堂を建てて日想觀を行じ、さらには西日のさす難波の海、すなわち極楽の東門に入水することによって往生を遂げるという思想、という主に三つの浄土信仰に関わる思想を背景として行われていたという(『日本古代の国家と仏教』岩波書店、一九七一年)。の追塩千尋氏は、いち早く太子信仰を取り入れた天台宗が、真言宗に先んじて、天台別院や国分寺を拠点として教団としての発展を遂げていることにも注目している(追塩千尋「古代・中世における太子信仰の性格」『史流』一四、一九七三年)。

(注五四) 『大正新脩大蔵経』七六―七八九中下。

(注五五) 『石山流人師方付法血脈』。

(注五六) 速水侑「観音靈場信仰の成立と展開」(『観音信仰』塙書房、一九七〇年)。頼富本宏「観音信仰と巡礼の寺」(『石山寺の信仰と歴史』鷺尾遍隆監修・綾村宏編集、思文閣出版、二〇〇八年)。

(注五七) 速水氏前掲論文。

(注五八) 追塩千尋「平安・鎌倉期広隆寺の諸相」『日本古代の祭祀と仏教』佐伯有清先生古稀記念会編、吉川弘文館、一九九五年。

(注五九) 田中重久氏が初めてこの勧進文の全文を紹介した(『日本の圓堂と印度の圓堂』『日本に遺る印度系文物の研究』、東光堂、一九四三年)。

(注六〇) 澄禅の人物像については、追塩氏前掲論文に詳しい。

(注六一) 追塩氏前掲論文。

(注六二) 石田茂作『聖徳太子全集』五(臨川書店、一九四三年)。

(注六三) 『古今一陽集 影印本』(ワコー美術出版、一九八三年)。

(注六三) 高田良信「聖徳太子信仰の展開―特に法隆寺を中心として―」
『聖徳太子研究』七、一九七三年。高田良信『法隆寺教学
の研究』(法隆寺、一九九八年)。

(注六四) 「台座下框裏墨書」(奈良六大寺大観 第四卷 法隆寺四)
岩波書店、一九七一年)。

此像者調子丸相伝之本尊也。去正嘉二年 戊午

九月十六日参聖靈院之次。依頭真大法師 調子丸 廿八代孫 之勸。

不日奉迎。同十一月下旬始脩。(下略)

(注六五) 大橋一章「中宮寺考」(『美術史研究』一一、一九七四年)。同
「中宮寺の創立について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀
要第三分冊』四六、二〇〇〇年)。

(注六六) 制作年代については、明治以来、飛鳥時代の推古朝から白鳳
時代の天武・持統朝まで、すなわち七世紀の前半から後半の
間で意見が分かれている(井上正「中宮寺半跏思惟像につい
て」『國華』八一、一九六〇年。稲次保夫「中宮寺半跏思惟
像の様式に関する一考察」『愛媛大学教育学部紀要 第二部 人
文・社会科学』二四、一九九二年)。

(注六七) 町田甲一編『大和古寺大観』一(岩波書店、一九七七年)。な
お建治元年(一二七五)の『太子曼荼羅講式』には「天王中
宮両寺之本尊」としてこの像の存在が記されるが、尊名につ
いては触れていない。

(注六八) 醍醐寺本『聖徳太子伝記』(『大和古寺大観』一所収)。細川涼
一「鎌倉時代の尼と尼寺―中宮寺・法華寺・道明寺」(『中世
の律宗寺院と民衆』吉川弘文館、一九八七年)。

(注六九) 『金剛仏子感身学正記』寛元三年(一二四三) 秋条。

(注七〇) 『金剛仏子感身学正記』正嘉二年条

九月。白月布薩以後。参法隆寺。為奉修補調子丸氏父相具如

意輪観音像。

(注七一) 『金剛仏子感身学正記』正嘉二年条。

六日。太子御廟。一夜不断満如意輪大呪祈誓。

(注七二) 杉山二郎「元興寺極楽坊聖徳太子孝養立像の修理」(『大和文
化研究』五一四、一九六〇年)。「聖徳太子立像 孝養太子像」
『大和古寺大観』三(岩波書店、一九七七年)。

(注七三) 叡尊と醍醐寺の関係については、追塩千尋「初期叡尊の宗教
的環境」(『中世の南都仏教』吉川弘文館、一九九五年)に詳
しい。また、頭真の師である隆詮は、荻野三七彦氏によれば、
寺伝によると、醍醐寺報恩院で修行し、醍醐寺地藏流の系譜
を引く人物であったという。法隆寺の真言化を進めた頭真も
また、醍醐寺の密教の系譜にある僧であったということにな
る。よって頭真の如意輪信仰については、叡尊の影響ではな
く、隆詮から受け継いだ可能性もある。隆詮と頭真の関係に
ついては、荻野三七彦『聖徳太子伝古今目録抄の基礎的研究』
名著出版、一九八〇年、高田良信「聖徳太子信仰の展開―特
に法隆寺を中心として―」(『聖徳太子研究』七、一九七三年)
に詳しい。

(注七四) 追塩氏前掲論文。

(注七五) 『伏見宮家九条家旧蔵諸寺縁起集』(宮内庁書陵部、一九七〇
年)。

(注七六) 中前正志「石山寺縁起と六角堂縁起」(『日本文藝研究』五二
(三)、二〇〇〇年)。

(注七七) 『日本絵巻大成 一八 石山寺縁起』(中央公論社、一九七八
年)。なお同縁起中には、九条道家による寛喜二年(一二三九)
の願文三か条(中宮御願成就、我一流繁昌事、順次往生事)
があげられている。この願文によると、石山寺本尊の胎内に
太子像が籠めてあるのは、皇子降誕・太子策立の表相である
という。もしこの願文の内容が事実であれば、寛喜二年には

すでに聖徳太子との結びつきがあらわれていたとみられる。

(注七八) 石山寺本尊の被災については、猪川和子「石山寺本尊如意輪観音菩薩像」(『美術研究』二七二、一九七〇年)に詳しい。

(注七九) 再興の年代について、『石山寺年代記録』には寛元三年、『石山要記』には弘安五年、弘安八年とあり、複数の説がみえる。

(注八〇) 石山寺本尊の像内納入品および厨子の銘文については、岩田茂樹「新発見の銅造仏像(四軀)と納入厨子銘文」(『石山寺本尊如意輪観音像内納入品』奈良国立博物館、二〇〇二年)に詳しい。

(注八一) 石山寺本尊の旧前立として伝来するもので、十〜十一世紀ごろの作とみられている。承暦二年の火災後に再興された現本尊をさかのぼる製作であるため、失われた旧本尊の姿を復元的に考えるための遺品として重要視されている。ただし両手先は欠失しており、近年の後補である(図版解説「1 如意輪観音半跏像」『観音のみてら 石山寺』奈良国立博物館、二〇〇二年、一一〇頁)。

(注八二) この像が如意輪観音と称された経緯は不明である。『奈良六大寺大観』では十〜十一世紀頃の製作とされるが、井上一稔氏は十二世紀の作とする(『奈良六大寺大観 一四 西大寺』岩波書店、一九七三年。井上氏前掲書)。こちらも石山寺本尊旧前立と同様、両手先が失われている。なお『奈良六大寺大観』は、叡尊の事跡に散見される如意輪観音信仰をふまえ、「本像も叡尊となんらかの関係を有するものかもしれない」と述べている。



図1 東京国立博物館蔵・
密観宝珠形舍利容器

はじめに

院政期以降、醍醐寺を中心とする真言宗小野流において、天皇や法皇のために宝珠を用いた修法（以下、宝珠法）がさかんに行われた。近年、院政期の宝珠信仰、およびその本尊として制作されたと考えられる、宝珠をあらわした舍利容器

や厨子への注目が高まっている（図1）（注二）。

第一章・第二章で述べてきた通り、宝珠は如意輪観音の重要な持物であり、醍醐寺は如意輪観音を本尊として特別に信仰する寺院である。本章では、醍醐寺をめぐる宝珠法の展開とその関係作例に目を向け、特に如意輪観音信仰との関わりについて検討を行いたい。

一 醍醐寺と宝珠信仰

醍醐寺と宝珠の関わりについて、従来、宝珠と舍利を同体とみなす信仰が注目されてきた。この問題については内藤栄氏が詳細な検討を行っており、まずは氏の研究にもとづいて関係史料をみてゆきたい。

空海が弟子たちへの遺戒として著したとされる二十五箇条の『御遺告』のうち「東寺座主阿闍梨耶可護持如意宝珠縁起第二十四」には、次のような記述がある（注二）。

但大唐大師阿闍梨耶所被付属能作性如意宝珠載頂。渡大

日本国勞籠名山勝地既畢。彼勝地者所謂精進峯土心水師修行之岫東嶺而已。努力努力勿令後人彼処。是以蜜教

劫榮末徒博延復東寺大經藏佛舍利大阿闍梨須如守惜傳法印契蜜語。勿令一粒他散。是即如意寶珠。是即護道。以

何言之。彼能作玉心本之故。

すなわち空海は唐において、師の恵果から能作性如意宝珠、つまり阿闍梨自らが舍利や香木を用いて作った宝珠を授けられた。これを帰国後に、土心水師（堅恵）の修行の地である室生山に埋納したという。そして注の部分に、空海が請来して東寺の大経蔵に納めた仏舍利は、恵果から仏法の印契蜜語として与えられたもので、「是即如意宝珠」と説かれている（注三）。なおこの『御遺告』は、実際には空海の没後にあたる十世紀頃、空海に仮託して作られたものと考えられている（注四）。

内藤氏はこの『御遺告』の成立に、東寺長者であり、高野山および醍醐寺の座主をつとめた観賢が関わったと指摘されていることに着目した。観賢は、空海請来の舍利を本尊とする後七日御修法において、室生山を観念すべしと説いたと伝えられる（注五）。

また、醍醐寺座主実運（一一〇五〜一一六〇）の口決集『諸尊要抄』巻十五には

如意宝珠法対東 異本云。本即彼増益 主。是南主種子。

如意宝珠。

（中略）駄都变成

とある（注六）。駄都は舎利の異称であり、舎利が宝珠に变成すると述べられている。また実運の弟子にあたり醍醐寺座主をつとめた勝賢も、守覚法親王に三宝院流の諸尊法を伝授する際、「舎利与宝珠同体也」と説いている（注七）。

すなわち十世紀以降、観賢・勝賢・実運ら醍醐寺僧を中心とする醍醐三流（三宝院流、理性院流、金剛王院流）において、このような舎利と宝珠を同体とみる信仰が行われ、宝珠への注目が高まっていたという。

なお北涼・曇無讖（三八五〜四三三）訳『悲華経』巻七に

「舍利變為意相琉璃宝珠」、つまり舍利が宝珠に姿を変えるとの記述があり^(注八)、舍利・宝珠同体説はこの經典の記述に基づくものと考えられている^(注九)。

醍醐寺周辺の真言寺院で構成される小野流は、醍醐三流と小野三流（勸修寺流、随心院流、安祥寺流）からなり、いずれも醍醐寺を開いた聖宝を祖とする。しかし舍利・宝珠同体説を提唱した醍醐三流に対し、小野三流では一字金輪の種字ボロンを舍利と同体であるとみなしていた^(注一〇)。内藤氏は、両派が舍利解釈をめぐり強いライバル意識を有していたことを指摘している。つまりボロン・舍利同体説を提唱する小野三流に対し、醍醐寺は宝珠信仰にもとづいた舍利解釈によって独自性を主張していたのである。

さらに醍醐寺と宝珠の密接な関係は、ほとけの凶像にもあらわれている。例えば愛染明王の形像を説く『瑜祇経』には、左第三手について「持彼」としか記されていないため、「彼の解釈の違いによって様々な持物のバリエーションが生み出されてきた^(注一一)。守覚の著作『追記』には「開持彼手安三弁宝珠了。醍醐秘説。」とあり、なかでも左手第三手に三弁宝珠をもたせるのは、醍醐寺の秘説にもとづくものであると説かれる。

また後述するように、醍醐寺には醍醐寺三宝院流の祖勝覚

が鎮守として勧請した清滝権現を祀る宮があり、その本地は如意輪観音と准胝観音とされている。勝覚が夢中で感得した清滝権現は「其御正体如吉祥天女、捧如意宝珠於左手矣^(注一二)」、すなわち吉祥天のごとく宝珠を手にした姿であったという^(注一三)。

加えて准胝観音は本来宝珠を持物とはしないが、醍醐寺所蔵清滝本地画像においては左第三手に宝珠を執る。真鍋俊照氏や佐々木守俊氏は、このように宝珠を持つ女神や准胝観音の凶像が、醍醐寺において特別に重視されていたことを論じている^(注一四)。

さらに院政期以降、上述の醍醐三流および小野三流において、宝珠を用いた修法（以下、宝珠法）が盛んに実修されるようになる。記録上もつとも早く宝珠法を修したのは、小野流の一派、勸修寺流の範俊（一〇三八〜一一二二）であった。範俊は小野曼荼羅寺（現在の随心院）の成尊から灌頂を受け、金剛界・胎藏界の両部の秘法を学んでいる。なお第二章で述べた通り、仁和寺御流の祖である覚法は、正統な広沢流の法流を相承する一方で、小野流を継承した^(注一五)、覚法に小野流の法を授けたのは、ほかならぬ範俊であった。

平安末から鎌倉期の宝珠法を記録した四天王寺所蔵『如意

宝珠御修法日記』よれば、範俊は承暦四年（一〇八〇）に如法愛染王法を、天仁二年（一一一九）に如法尊勝法を行ったという（注一六）。詳細は不明であるが、いずれの実修においても、宝珠を籠めた小塔を用いたことが記されている。

さらに守覚の『追記』には「於如法者。鳥羽僧正為根本法匠之事勿認弛。」とあり（注一七）、この範俊こそが「如法」すなわち如意宝珠を用いた修法の「根本法匠」であったという。範俊はまた、宝珠および宝珠の師資相伝を記した『御遺告』を白河院に献上するなど、宝珠への積極的な関与がみとめられる（注一八）。上川通夫氏はこれらの史料をふまえ、宝珠法が範俊によって創作された可能性を指摘した（注一九）。範俊以後、小野流や広沢流の諸流派において、宝珠に関する様々な異説が生み出されてゆく。松本郁代氏はこうした状況をふまえ、宝珠説造作の競合が真言宗法流内で行われていたことを論じている（注二〇）。

さらに、すでに述べたように僧自身が舍利や香木を材料として宝珠を造る場合があり、これを能作性宝珠と称する。『秘抄問答』第十三には、

日本国宝珠造人。大師・範俊・勝賢僧正^{已上}
三人。

とあり（注二一）、日本で宝珠を造作した代表的な三人として、空海と範俊、そして冒頭で舍利・宝珠同体説を唱えた醍醐寺僧として紹介した、勝賢の名が挙げられている。こうした史料からも、醍醐寺の法流と宝珠法の関わりが深さが窺える。

宝珠法にはさまざまな種類があり、前述の能作性宝珠を本尊とするもの（如意宝珠法）のほか、愛染明王（如法愛染王法）や如意輪観音（如意輪宝珠法）、尊勝仏頂（如法尊勝法）といった特定のほとけを本尊とするものもある（注二二）。そして、その修法の目的についても、厄除けや出産のための祈祷、怨敵調伏など多様であった。

以上みてきたように、先行研究により、十世紀以降の醍醐寺を中心に宝珠への信仰が高まり、とりわけ院政期以降、多様な宝珠法として発展を遂げたことが明らかにされてきた。しかし従来、そもそも、なぜ院政期の前後に宝珠への注目が高まったのか、そして、なぜこれを主導したのが数ある寺院の中でも醍醐寺であったのか、という根本的な問題についてはほとんど論じられてこなかった。よって以下、特に醍醐寺と宝珠信仰の結びつきについて考察を行いたい。

二 宝珠法と如意輪観音信仰

『覚禅抄』卷四十八「如意輪上」の「如意輪宝珠法 亮恵」の項には「口伝云。宝珠法付如意輪法。相承秘事也。」とある(注三)。すなわち相承の秘事として、宝珠法に如意輪法が付属することが記されている。亮恵は醍醐寺僧聖賢の弟子であり、『覚禅抄』の編者覚禅は醍醐寺僧勝賢の弟子にあたる。すなわちこれもまた、醍醐寺周辺で伝えられてきたものである。さらに鎌倉後期の『白宝口抄』卷六四「如意輪法下」にも「凡宝珠法付如意輪法習之」と同様の伝えを載せている(注四)。

さらに、先に紹介した『如意宝珠御修法日記』のうち、宝珠の相伝などについて記す部分に、次のような記述がみえる(注五)。

或記云、勝賢僧正宝珠法(略)義範僧都授勝覚口決、秘事也。如意輪大事習事、義範僧都授勝覚秘事也。已上二伝、共三宝院御伝也。

ここになぜか突如、如意輪の大事を習うこと、との文言があらわれるのである。

また興然(一一二一〜一二〇四)が小野流の諸尊法や諸作法を類聚した『四卷』第二には、宝珠法の一種である避蛇法という修法について、

一 宝珠法 安祥寺宗 (中略) 避蛇法。是避蛇法者。
意律師傳

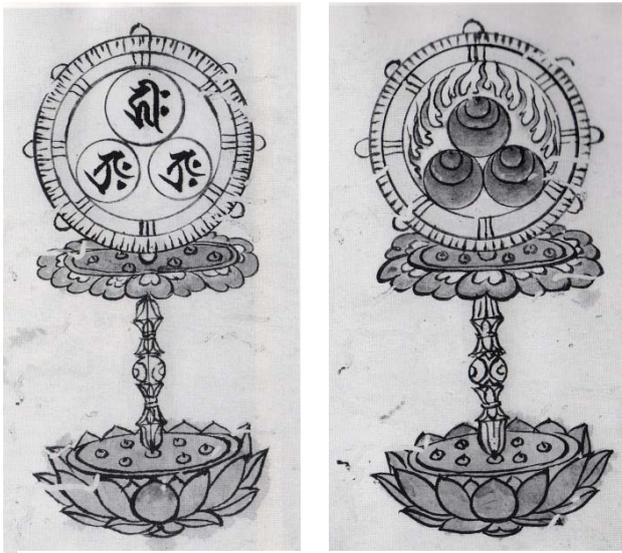
如意輪法也。 **宝珠法** 如意輪法也。

とあり(注六)、小野流の一派、安祥寺流の祖である宗意の伝として、これが如意輪法であることを明記している。

すなわち醍醐寺周辺の宝珠法に関する史料の中に、如意輪観音との関わりを示す記述が散見される。ここで注目したいのは、宝珠法を主導した醍醐寺が、如意輪観音を本尊として特別に信仰していたこと、そして如意輪観音が宝珠を象徴する観音という点である。

三 醍醐寺の如意輪観音信仰と宝珠

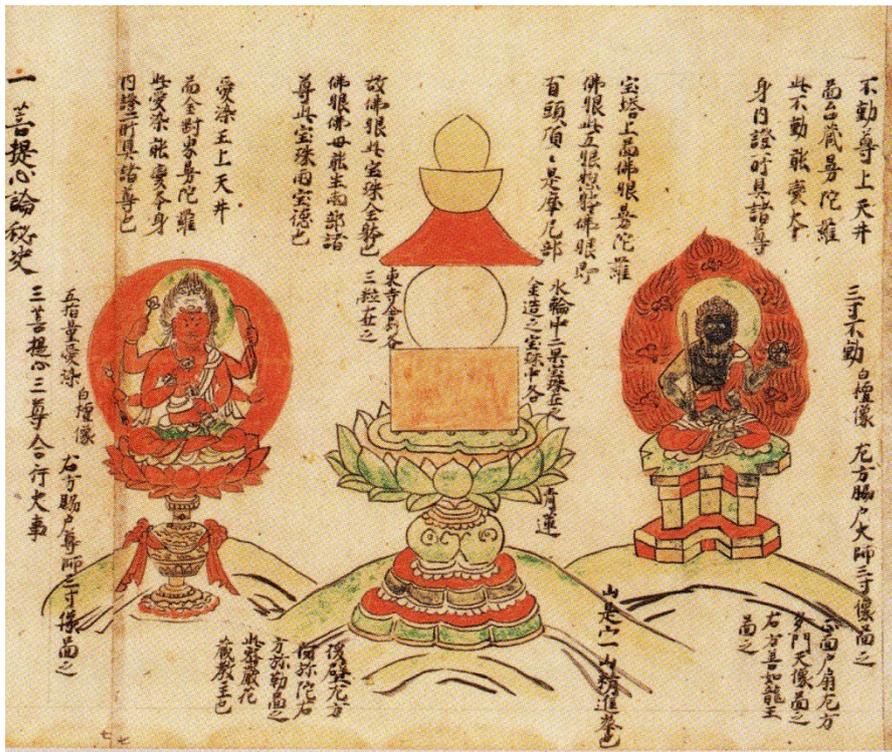
第一章・第二章において述べてきた通り、如意輪観音は宝珠と輪宝の力をあわせもった観音であると考えられている(注二七)。岩本裕氏により、如意輪観音の原名が「チャクラヴァルテイ・チンターマニ(どこへでも自由自在に転がって行つて、衆生の願いをなんでもきいてくれる者)」であることが明らかにされ(注二八)、もともと宝珠をイメージした観音であったことが指摘されている(注二九)。



た『伝受記』には、如意輪の意義に関する「相承秘口伝」として「**【真陀摩尼】**尊事、宗之大事也。**【摩尼】**尊者、如意輪也(【一】内は原文では梵字)」と述べている(注三〇)。「真陀摩尼」つまり宝珠は、如意輪観音であるという。そして勝賢の弟子にあたる醍醐寺僧成賢(一一六二〜一二三二)の『遍口鈔』にも「如意輪法祕密事」として「塔婆中有三弁宝珠。此塔变成如意輪尊」、すなわち宝珠が如意輪観音に変成すると記される(注三一)。

さらに醍醐寺三宝院流の祖であり、勝賢の師でもあった勝寛(一一〇五七〜一一二九)が永久三年(一一一一五)に著した『内藤氏如意輪観音の多様な三昧耶形を網羅的に紹介されているが、いずれも共通して宝珠が表されている(注三二)。なお奈良・円成寺の聖徳太子二歳像(延慶二年・一三〇九)の胎内には、宝珠を表した二つの図像が納められている(図2)。蓮華座上に立てた独鈷杵に蓮華座を重ね、さらにその上に輪宝を立てており、ひとつはその輪宝の中央に三弁火焰宝珠を、もう一方は如意輪観音の種字、キリク・タラク・タラクを表している。後述するように、蓮華座上に立てた金剛杵に蓮華座を重ね、その上に宝珠をのせた形式は、小野流において如意輪観音の象徴となっていたことが明らかにされている。加えて第二章で述べた通り、十二世紀後半以降、聖徳太子と如意輪観音を同体とみる信仰が盛行していたことを考えると、太子の胎内に納められたこの宝珠の図像も

また、如意輪観音を象徴するものとして注目されよう。
 以上みてきたように、醍醐寺をめぐる宝珠の図像や宝珠法
 が、如意輪観音と密接に結び付けられていたことがわかる。
 ここで特に注目したいのは、宝珠法と関わりの深い僧として



上述した、醍醐寺僧勝賢と如意輪観音信仰との関わりである。
 近年、文学や歴史、美術史の分野において、東寺長者が代々
 相承すべき秘伝を記した『東長大事』が注目されている。こ
 れは空海の『御遺告』の注釈という形をとっているため、『御
 遺告大事』という名でも真言密教関係の寺院に伝来している
 (注三三)。

この『東長大事』の中に、勝賢の「三仏如意輪法」という
 ものがみえる(注三四)。

三尊合行次第、是御遺告最極甚深ノ大事。嫡弟一人授之
 (略)即如意輪観音為本尊、常不動愛染像左右安之。祖
 師勝賢僧正以此習北院御室奉授之。此号三仏如意輪法甚
 秘リリ。

如意輪観音を本尊として左右に不動明王と愛染明王を安置
 したことが記され、これを「北院御室」つまり守覚に授けた
 という。さらにこの三仏如意輪法のもととなるものとして、
 醍醐寺三宝院流の祖である勝覚の「三尊帳」が図入りで紹介
 されている(図3)。

勝覚建立此三尊以授代々嫡弟。即中尊安五輪塔婆、水輪

納二果宝珠。右方愛染六臂像。左辺不動左持輪。此号三尊帳。中尊五輪、此如意輪三形也。

三仏如意輪法と同様、左右に愛染明王と不動明王を配するが、本尊となる如意輪観音に対応する位置には五輪塔が置かれている。注目したいのは、この如意輪観音を象徴する五輪塔の水輪（球形の部分）に宝珠をおさめたと記される点である。先に紹介した通り、勝覚は『伝受記』において「摩陀摩尼尊、宗之大事也。摩尼尊者、如意輪也」との「相承秘口伝」を述べているが、この三尊帳においても、如意輪観音と宝珠が密接に結び付けられている。

三尊帳は以後、勝賢をはじめ三宝院流の代々の嫡弟に継承されたという。なお勝覚は聖宝以来の真言密教の正統を継承したため、以後、三宝院は密教正統を継承する院家となった^(注三五)。同院には醍醐寺座主が住持し、政所が置かれた。そのような醍醐寺経営の中核となる三宝院において、如意輪観音と宝珠の結びつきが重要な役割を果たしていたことがわかる。

なおこの三尊の組み合わせについては、舍利厨子の作例や『東長大事』をはじめ、十三世紀以降の史料しか確認されていないため、阿部泰郎氏は、勝覚や勝賢に仮託して作られた

説であるとする。しかし、あえて勝覚や勝賢に仮託したということは、彼らの時代にこの三尊の源流があつた可能性もある。

さらに『覚禅抄』巻第四十九「如意輪下」の裏書に、勝覚の弟子にあたる醍醐寺僧聖賢（一〇八三〜一一四七）が如意輪宝珠法を行ったとの記録があり、またすでに紹介した通り、同じく『覚禅抄』巻第四十八「如意輪上」には、聖賢の弟子の亮恵の伝として「宝珠法付如意輪法」と記す。内藤栄氏は、これが三尊帳をもとにした修法であつたことを論じている^(注三六)。聖賢による如意輪宝珠法の実修をふまえると、やはり十二世紀にはすでに三尊帳、あるいはその源となる如意輪観音と宝珠の結びつきが存在していた可能性が高いといえる。

如意輪宝珠法は三宝院流の秘法であつたが、鎌倉時代の叡尊が如意宝輪華法として、寺院の年中行事に発展させたことも知られる。内藤氏は、立てた金剛杵の上に宝珠をのせた舍利容器（1）の形式が、如意輪観音の三昧耶形にもとづくことを指摘し、如意輪宝珠法の本尊として制作されたことを明らかにした^(注三七)。このいわゆる「密観宝珠型舍利容器」もまた、如意輪観音を宝珠であらわした作例として注目されるよう。

なお、勝賢から三仏如意輪法を継承した守覚は、第二章で述べた通り、『別尊雜記』の編纂に関与し、半跏思惟形の如意輪觀音像に関わったと推測される人物である。さらに、勝賢と守覚は、宝珠法を頻繁に行った僧としても知られている(注三八)。すなわち彼らは、如意輪觀音信仰と宝珠信仰のいずれとも深い関わりをもっていた可能性が高い。如意輪觀音信仰と宝珠信仰の密接な結びつきを考える上で、このことにも留意したい。

以上みてきたように、十世紀以降、醍醐寺の周辺で宝珠への注目が高まり、とりわけ十二世紀以降の醍醐寺において、如意輪觀音と宝珠の結びつきが重要な役割を果たしていた。さらにこの時期、醍醐寺をめぐる如意輪觀音信仰に、次々と新たな展開があらわれたことに注目したい。

四 院政期の醍醐寺をめぐる如意輪觀音信仰の展開

第一章で紹介した通り、十世紀に活躍した醍醐寺僧淳祐(八九〇〜九五三)によって『聖如意輪念誦次第』が著された。これにより以後、小野流においては現在に至るまで、伝法灌頂の際に行う十八道加行の本尊を如意輪觀音としている。さらに勝賢の師にあたる醍醐寺実運の『秘藏金宝抄』九

には、同じく淳祐の説として、

如意輪觀音六臂。当六觀音并六道事。右第一思惟手是即聖觀音也。修無垢三昧能救濟地獄受苦衆生第二如意宝珠手是即千手觀音。修心樂三昧。雨宝能救餓鬼道飢饉苦第三念珠手馬頭觀音也。修不退三昧。能度畜生道鞭撻苦左第一光明山手是十一面觀音也。修歡喜三昧。能度阿修羅鬪諍苦第二蓮花手是即準胝觀音也。修日光等四種三昧教化人道第三金剛手是即如意輪觀音也。

つまり如意輪觀音の六臂がそれぞれ、六道を輪廻する衆生を救う六觀音に相当することが記される(注三九)。淳祐自身の著作『要尊道場觀』にも「六臂廣博体能遊於六道。以大悲方便断諸有情苦。(注四〇)」とあり、如意輪觀音の六臂が六道有情の苦を断ずると説かれている。第一章で述べた通り、淳祐は石山寺に入り、石山寺本尊を如意輪觀音とよび変えた可能性の高い僧である。その後、東大寺大仏左脇侍も十世紀末から十二世紀にかけて、淳祐および醍醐寺と関わりの深い僧たちによって、如意輪觀音と称されるようになる。すなわち十世紀以降の醍醐寺僧の周辺で、如意輪觀音が十八道加行や六道思想、さらには石山寺本尊タイプの像と結びつけられるとい

う、新たな展開が次々に生み出されていたことがわかる。また前述の『東長大事』において、勝賢の三仏如意輪法について記す部分に、

如意輪観音是蓮花部之宝部四種悉地相兼、究竟甚秘尊也。此即弘法本身、天照太神本地也。

とあり、勝賢は如意輪観音を「弘法本身」、すなわち空海と同体とみなしていたという。また守覚の『御記』には、

醍醐僧正如意輪化誕也。小野流最初受法用如意輪事。有因縁者也。

と述べられ^(注四二)、醍醐寺の祖である聖宝もまた如意輪観音と同体視されている。

さらに第二章で論じた通り、聖徳太子が如意輪観音と結びつけられたのも、十二世紀後半であった。聖徳太子と如意輪観音が同体であるとする特殊な信仰があらわれ、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称されるようになる。

また十二世紀末の『水鏡』平城天皇条には、

大方此大師（筆者註＝空海）ト申ハ。昔ノ聖徳太子御再誕ニテ御座バ。遠キ御本地ハ両界不二ノ大日如来。近ハ六臂ノ如意輪救世観音ノ垂跡ニテ御座バ（後略）

とあり、空海が太子の再誕であり、その本地は六臂の如意輪観音であるという^(注四三)。

また第二章で紹介した通り、守覚から広沢流を継承した道範（一一七八～一二五二）の『初心頓覚抄』にも、「醍醐尊師聖宝僧正如意輪垂跡カヤ。サレハ醍醐流十八道本尊聖如意輪也。」と記され、聖宝と太子、そして如意輪観音が結びつけられている。

つまり、十世紀から十二世紀後半の醍醐寺を中心に、如意輪観音への注目が高まり、如意輪観音信仰の新たな展開が次々と生み出されていたことがわかる。第一章・第二章でみてきた通り、当時、醍醐寺と関わりの深い僧が石山寺や東大寺、聖徳太子関係寺院をはじめ、既存の寺院への進出を果たしていた。そうした状況の中で、醍醐寺僧が特別に信仰する如意輪観音にあらためて目が向けられ、本尊のよび変えや聖徳太子・如意輪観音同体説といった独自の信仰が創出された、

ということも想定できる。

重要なのは、これが醍醐寺の周辺で宝珠信仰が盛行し、宝珠法が成立した時期と重なる点である。すなわち醍醐寺を中心として如意輪観音への注目が高まる中で、如意輪観音の象徴である宝珠への信仰も高まり、舍利・宝珠同体説や多様な宝珠法など、宝珠信仰をめぐる新たな展開が生み出されたのではないだろうか。

なお、院政期前後の展開としてさらに注目したいのは、如意輪観音と宝珠がともに王権と密接に結びついてゆくことである。院政期において宝珠は法皇の管理のもとに置かれ、法皇の求めによって持ち出され、修法に用いられていた。阿部泰郎氏はこのような状況に着目し、宝珠が「帝王の玉体安穩と皇胤存続をもたらす宝物」であり、「中世的王権の生命力の源泉」であったことを論じた^(注四三)。

一方、平安後期以降、如意輪観音もまた、天皇の即位礼や護持僧が行う修法の本尊となり、天皇や法皇の信仰と強く結びついてゆく。加えて如意輪観音は十二世紀に至って聖徳太子と同体視されるが、この時期、聖徳太子が王権の象徴として機能していたことも留意される。こうした如意輪観音と王権の関わりについては、第五章において論じたい。

五 摩尼宝珠曼荼羅と如意輪観音信仰

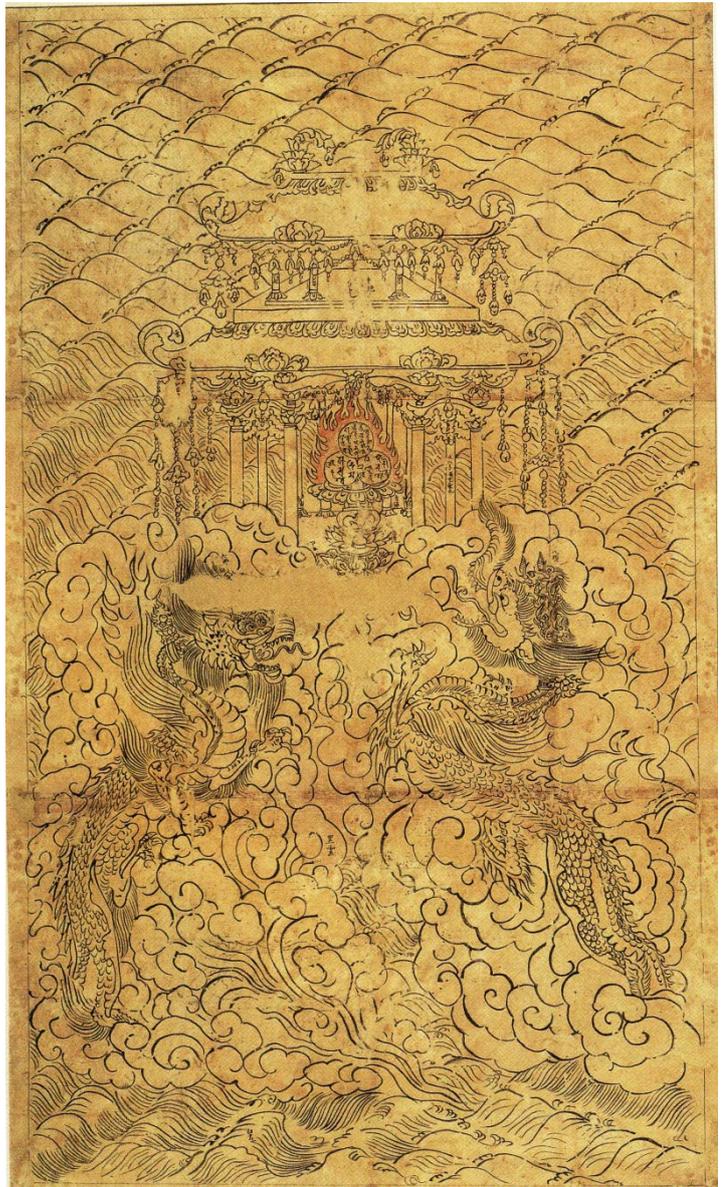
宝珠と如意輪観音の結びつきを示すものとして、本章の最後に、摩尼宝珠曼荼羅と通称される作例に目を向けたい。仁和寺には図4のような十三世紀の白描図像が伝来し、波間に浮かんだ楼閣の中に、二つの宝珠を重ねた三弁宝珠が安置されている。その下方に二頭の龍が描かれ、いずれも頭上に小さな龍の頭をのせている。なお龍をとりまく雲中には「黒雲」という墨書がみえる(図5)。仁和寺本は、現在確認されている摩尼宝珠曼荼羅のうち最古の作例であるが、おそらくこうした図像をもとに描かれたと思われる絵画作品が、東京国立博物館や室生寺、三室戸寺などに伝わっている(図6)。

この曼荼羅については、松下隆章氏により、鎌倉時代の偽経『如意宝珠転輪秘密現身成仏金輪呪王経』を典拠とすることが明らかにされた^(注四四)。同経の「大曼荼羅品第四」^(注四五)には

画像曼荼羅法。先画大海。其大海中亦画二階大宝宮殿。無量珍宝而為莊嚴。於其殿中画七宝壇。宝蓮華上画如意宝珠王。即令放火光。(中略)其宮殿外。右方海中画難陀龍王。頂具九頭乘黒雲。左手持宝珠、守護如意珠王。



左方海中画跋難陀龍
王。頂有七頭乘黒
雲。右手執摩尼、
護持摩尼宝王像。
とあり、海中に宝珠
を安置した二階建て



の楼閣を描くことや、頭上に
龍頭をのせた二頭の龍が宝珠
を護持することが説かれ、す
なわち摩尼宝珠曼荼羅の図像
と一致する。

また仁和寺本の宝珠には梵
字真言が書かれているが、こ
れが榮然（一一七二〜一二五
九）撰『師口』第二如意宝珠
法の項の「本尊宝珠ニハ法身
偈ヲカキテ（注四六）」との記述に
該当するものと考えられ、宝
珠法に関わる曼荼羅であるこ

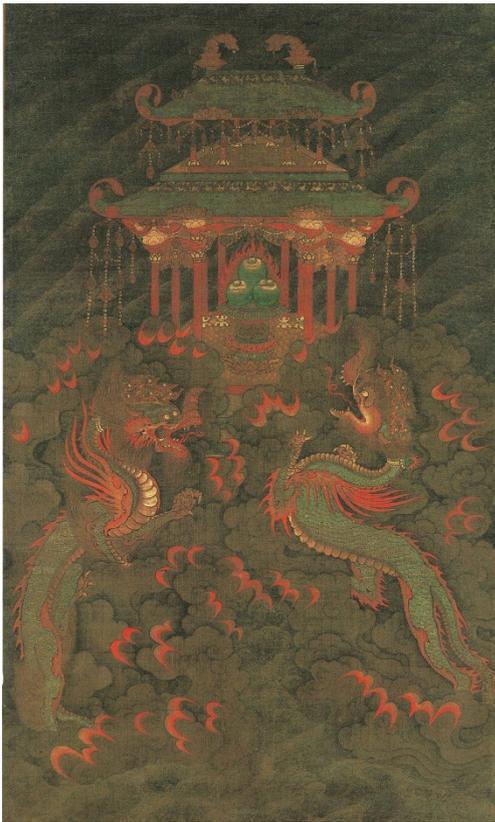
とが指摘されてきた（注四七）。なお真鍋俊照氏により、仁和寺
本中の宝珠の梵字が空海請来の法身偈（「縁起生偈」と一致
することが明らかにされている（注四八）。

さらに、摩尼宝珠曼荼羅の楼閣および二龍王という要素が、
祈雨のために修する請雨經法の曼荼羅（図7）と一致するこ
とが注目されてきた。請雨經曼荼羅は不空訳『大雲經祈雨壇
法』を典拠とするもので、同經に

於壇中画七宝水池。池中画海龍王宮。於龍宮中有釈迦牟尼如来経説法相。仏右画観自在菩薩。仏左画金剛手菩薩等侍衛。於仏前右画三千大千世界主輪蓋龍王。仏前左画難陀跋難陀二龍王。

との記述がみえる(注四九)。これに基づき、二階建ての楼閣の内部に釈迦如来および観自在菩薩、金剛手菩薩とみられる三尊を配し、その前方に難陀竜王と跋難陀竜王に該当すると思われる蛇形の人物の姿が描かれている。

楼閣内に宝珠を表す摩尼宝珠曼荼羅とは異なるが、全体的な構成は近似している。なお『秘抄問答』巻第六に引く醍醐寺理性院流宗命(一一一九〜一一七二)の「理性院記」



には、請雨経法の五日目に難陀と跋難陀の二龍王供を行うべきことが記される(注五〇)。摩尼宝珠曼荼羅中にこの二龍王、および雨のイメージを想起させる黒雲が描かれることから、祈雨法との関連が窺えよう。

以上、これまでの研究の成果をふまえると、摩尼宝珠曼荼羅が宝珠法および祈雨と密接に関わるものであったことが推測される。

ここで注目したいのは、摩尼宝珠曼荼羅中の双龍と宝珠の組み合わせが、前述の『東長大事』にみえることである。空海の頭上に、宝珠に向かって昇らんとする二頭の龍があらわされている(図8)。宝珠のすぐ下には「空海」と墨書されており、つまり宝珠と空海が対応するものであることが窺える。



重要なのは先に紹介した通り、『東長大事』の中に



「如意輪観音は弘法の本身」と記されていることである。すなわち宝珠は空海に対応し、空海は如意輪観音と団体であるという。これらのことを考え合わせると、図中の宝珠は、空海を介して如意輪観音と結びつけられていることになる。つまり、これと同様の宝珠および双龍の図像が描かれた摩尼宝珠曼荼羅もまた、如意輪観音信仰と何らかの関わりをもつものではないかと推察した。

また同じく『東長大事』中に、双龍と宝珠を組み合わせた別の図像がみえる(図9)。ここでは蓮台にのせた宝珠を、立てた三鈷杵の上に重ねている点が注目される。先に紹介した通り、このように立てた金剛杵の上に宝珠をのせた「密観

宝珠型舍利容器」が散見される。近年、内藤栄氏の研究により、これが如意輪観音の三昧耶形にもとづく形式であり、小野流の如意輪宝珠法の本尊として制作されたことが明らかとなった(注五)。よって、この密観宝珠と双龍の図像もまた、摩尼宝珠曼荼羅中の宝珠と二頭の龍が、如意輪観音信仰に関わることを示唆するものとして留意したい。なお、奈良・般若寺の所蔵する十三世紀の舍利厨子など、この図像に基づくと考えられる作例も見受けられる(図10)。

そこでさらに、摩尼宝珠曼荼羅と如意輪観音信仰の関係を探るひとつの手がかりとして、祈雨との関わりに着目した。すでに述べた通り、摩尼宝珠曼荼羅は請雨経曼荼羅と図像的

に近似し、画中の難陀龍王・跋難陀龍王は祈雨法と密接に関わっている（注五二）。

そのような視点で如意輪観音関係の史料に目を向けると、『覚禅抄』卷四八「如意輪下」に、如意輪観音の功德として、

降雨事

又云。若天亢旱以白芥子和蘇。三日三夜如法護摩則降甘雨文。



とあり（注五三）、「降雨」が挙げられている。

如意輪観音関係の經典に降雨の功德を説くものはなく、『覚禅抄』以前に如意輪観音と雨を結びつける史料は見いだせない。すなわち編者覚禅の活躍した十二世紀後半頃、如意輪観音の功德に降雨が加わった可能性が高い。

なお上述の通り、覚禅は、宝珠信仰と関わりの深い勝賢の弟子にあたる。そしてまさにこの時期、勝賢の行った祈雨法の中に注目すべき記録がある。『建久二年祈雨日記』には、建久二年（一一九二）に勝賢が醍醐寺の清滝権現に降雨を祈ったことが記されている（注五四）。

清滝権現は先に紹介した通り、三宝院流の祖である勝賢が醍醐寺の鎮守として勧請した神であるが、その本地を如意輪観音と准胝観音とする。醍醐寺に伝来する平安時代の如意輪観音像は、もともと清滝宮の本地仏として安置されていたものと伝えられている（図11）。なお清滝権現は祈雨と関わり深いことでも知られるが、藪元晶氏の研究により、清滝宮で最初に祈雨法を行ったのは、乗海や勝賢ら、十二世紀後半の三宝院流の僧であったことが明らかにされている（注五五）。

このことから勝賢の祈雨法と如意輪観音信仰の関わりが窺えるが、さらに注目したいのは「仏舍利一粒奉入五輪塔、安置宝殿内畢」、すなわち舍利を納めた五輪塔を用いたと記



されている点である。これは、先に紹介した勝覚の三尊帳のうち、如意輪観音の象徴として描かれた五輪塔を想起させる。三

尊帳の五輪塔には宝珠を納めたと記されているが、三宝院流において宝珠と舍利が同体視されていたことをふまえると、勝賢が用いた五輪塔と一致することになる。

また、やや時代の下る作例であるが、西大寺の所蔵する室町時代の舍利厨子は、水輪の内部に舍利を納めた金銅製五輪塔を正面の板に嵌装し、観音開きの扉の左右に不動明王と愛染明王を描いている(図12)。さらに正面の板は慳貪式にな



た奥壁があらわれる。また同じく室町時代の制作であるが、室生寺に伝わる宝篋印塔形の舍利厨子も、内部に水晶製の五輪塔を納め、その左右の扉に不動明王と愛染明王が描かれている(図13)。これらは三宝院流の如意輪・不動・愛染の組み合わせにもとづくもので、舍利を納めた五輪塔が如意輪観音の象徴として機能していたことを示す作例として注目されよう。

このように、清滝権現の本地が如意輪観音であったこと、そして舍利

(宝珠)を納めた五輪塔を用いたこと、さらに弟子の覚禅が如意輪観音の功德として「降雨」を挙げたことなどを考慮すると、勝賢の祈雨法の背景には、如意輪観音信仰が深く関わっていたことが推測される。すなわち十二世紀後半、勝賢ら醍醐寺三宝院流の僧の周辺で、如意輪観音信仰と宝珠、清滝権現の結びつきを背景とした、独自の祈雨法が成立していた可能性が高い。

なお、勝賢が描いたとされる清滝権現の図が伝わっており、五輪塔と龍に似た二頭の動物が組み合わされている(図14)。三宝院流において五輪塔が如意輪観音の象徴であったことをふまえると、同じく如意輪観音の象徴である宝珠と二頭の



龍を描いた、摩尼宝珠曼荼羅を彷彿とさせる。やや時代の下の作例であるが、三室戸寺に伝来する十五世紀制作の摩尼宝珠曼荼羅(図15)において、宝珠の上に五輪塔が描かれていることにも注意したい。五輪塔と双龍という組み合わせは、勝賢の描いた清滝権現の図と近似している。

上述の通り、摩尼宝珠曼荼羅は従来、その図像的特徴から、宝珠信仰および祈雨法との関わりが指摘されてきた。ここでは特に、画中にみえる宝珠と双龍の組み合わせに注目し、この図像が『東長大事』において如意輪観音と密接に結びついており、勝賢の描いた清滝権現の図とも近似することを見出した。さらに勝賢をはじめ、十二世紀後半頃の醍醐寺三宝院



流の僧が、如意輪観音・宝珠・清滝権現の結びつきを背景とした独自の祈雨法を行っていた可能性を論じた。

これら
のことを
考え合わ
せると、摩
尼宝珠曼
荼羅は、上
記のよう



むすび

本章では、とりわけ十世紀から十二世紀後半の醍醐寺周辺で、宝珠への信仰が高まり、多様な宝珠法が生み出された問題に注目した。この時期、醍醐寺を中心として、如意輪観音が宝珠と強

な醍醐寺三宝院流の祈雨法を背景に制作されたのではないだろうか。なお先に述べた通り、従来、請雨経曼荼羅との類似性が注目されてきたが、勝覚や勝賢がしばしば請雨経法を行っていたことにも留意したい^(注五六)。すなわち三宝院流の周辺で祈雨の宝珠法に関わる新たな曼荼羅を創作する際、請雨経曼荼羅を参考としたことも推測される。この問題について現時点では史料が乏しいため、今後の課題としてさらに詳しく追究してゆきたい。

く結びつけられていた。そして醍醐寺僧の寺院や宮中への進出を背景として、如意輪観音への注目が高まっていたことを見出した。すなわち醍醐寺をめぐる宝珠法の展開の背景には、如意輪観音信仰が密接に関わっていた可能性が高い。

さらに宝珠法との関わりが指摘されてきた摩尼宝珠曼荼羅に目を向け、これが十二世紀後半頃の醍醐寺三宝院流の祈雨法を背景に制作された可能性を論じた。醍醐寺の如意輪観音信仰と宝珠の緊密な結びつきが、院政期において新たな発展を遂げた結果、生み出された作例とみることもできる。

なお従来、宝珠法と関わりの深い為政者として、後白河院

が注目されてきた。第四章では、宝珠法を含め、後白河院と如意輪観音信仰との関わりについて検討したい。

注

(注一) 内藤栄氏が、平安時代から鎌倉時代にかけての真言宗を中心とした舍利莊嚴美術に関する一連の研究成果を『舍利莊嚴美術の研究』(青史出版、二〇一〇年)として刊行した。従来、釈迦信仰との関わりを中心に論じられてきた舍利莊嚴美術について、平安時代以降の真言密教における舍利・宝珠同体信仰をふまえた詳細な検討が行われている。

また近年、特に歴史学や文学の分野において、宝珠への注目が高まっている。院政期における宝珠と王権の密接な関係に着目した阿部泰郎氏の「宝珠と王権―中世王権と密教儀礼」(『岩波講座 東洋思想 十六 日本思想 二』岩波書店、一九八九年)や、『覚禪抄』の記述をもとに院政期における宝珠法の成立を論じた上川通夫氏の「如意宝珠法の成立」(『日本中世仏教史料論』吉川弘文館、二〇〇八年)、院政期の小野流における宝珠法の展開を院権力との関わりの中で考察した松本郁代「鳥羽勝光明院宝蔵の『御遺告』と宝珠―院政期小野流の真言密教―」(『覚禪抄の研究』覚禪抄研究会編、親王院堯榮文庫、二〇〇四年)、そして寺社縁起類の精査により、小野流における宝珠信仰の展開を論じた藤巻和宏氏の「一連の研究(『一山と如意宝珠法をめぐる東密系口伝の展開―三宝院流三尊合行法を中心として―』『むろまち』五、二〇〇一年)。「如意宝珠をめぐる東密系口伝の展開と『一山縁起類』の生成」(『一山秘密記』を中心として)『国語国文』七一―一、二〇〇二年)。「宝珠をめぐる秘説の顕現―随心院蔵『一山秘記』の紹介によせて」『古典遺産』五三、二〇〇三年)など、画期的な論考が続々と発表されている。

(注二) 『大正新脩大蔵経』七七―四一三下。

(注三) 「是即護道。以何言之。彼能作玉心本之故。」の意について、内藤栄氏は「これが仏法を良く守るのは室生山の能作性宝珠が

この心本（本体の意か）であることによると見える。」と解釈している（内藤氏前掲書所収「後七日御修法にみる空海の舍利観について」）。また氏は室生山に龍神の棲むとされる龍穴があることに注目し、龍が中国において舍利を守ると考えられていることから、東寺舍利が室生山と結びつくことは自然な流れであったという。

なお西田長男氏は、室生山に所在する室生寺・仏隆寺を興福寺から奪取すべく、東密側で天台僧賢恵は空海の弟子であるとの主張がなされ、そうした動きの中でこのような室生寺と空海を結びつける思想が形成されたと指摘している（「室生窟穴神社および室生寺の草創―東寺観智院本『一山分度者奏上』の紹介によせて―」『日本神道史研究 四 中世編（上）』講談社、一九七八年）。これら東密における室生山と宝珠をめぐる口伝や縁起類の展開については、藤巻和宏氏の一連の研究に詳しい（前掲注一論文）。なお、室生寺本堂（灌頂堂）の本尊として、十一世紀頃の作と推定される木造の六臂如意輪観音像が安置される。灌頂堂の供養がなされた延慶元年（一三〇八）以前の所在は不明であるが、真言密教における宝珠と如意輪観音信仰の関わりを考える上で留意したい。

〔注四〕武内孝善「御遺告の成立過程について」『印度学仏教学研究』八六、一九九四年）、苦米地誠「空海撰述の「祖典」化をめぐる―空海第三地菩薩説と『御遺告』の成立―」（阿部泰郎編『中世文学と隣接諸学 二 中世文学と寺院資料・聖教』竹林舎、二〇一〇年）など。

〔注五〕『秘抄』卷第三（『大正新脩大藏經』七八―四九九上）。

〔注六〕『大正新脩大藏經』七八―三三八上。

〔注七〕『秘抄』卷第十四（『大正新脩大藏經』七八―五五九上）。なおこれを記した『秘抄』は、勝賢が守覚法親王に醍醐寺三寶院流の諸尊法を伝授した際の折紙を類聚したものである。第二

章において守覚が半跏思惟形の如意輪観音像の成立に関わった可能性を論じたが、守覚が勝賢から三寶院流の宝珠信仰を継承していることに留意したい。

〔注八〕『大正新脩大藏經』三二―二二一下。

〔注九〕内藤氏前掲書所収「真言宗小野流の舍利法と宝珠法」。なお醍醐寺僧叡尊の肖像として弘安三年（一一八〇）に制作された、西大寺所蔵興正菩薩坐像の胎内に『悲華經』が納められていた。このことから、醍醐寺において同経が重視されていたと考えられている。

〔注一〇〕内藤氏前掲書所収「真言宗小野流の舍利法と宝珠法」。

〔注一一〕根立研介『日本の美術 三七六 愛染明王像』（至文堂、一九九七年）。小島裕子「院政期における愛染王御修法の展開―仁和寺守覚法親王相伝『紅薄様』を起点として―」（阿部泰郎、山崎誠編『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』勉誠社、一九九八年）。泉武夫「愛染王法と千体画卷」（『仏画の尊容表現』中央公論美術出版、二〇一〇年）。

〔注一二〕『醍醐雜事記』（中島俊司編、醍醐寺、一九三二年）。

〔注一三〕醍醐寺に伝来し、現在は畠山記念館に所蔵される弘長二年（一二六二）制作の清滝権現像は、宝珠を手に執る姿（ただし左手ではなく右手）で描かれている。

〔注一四〕真鍋俊照氏は「女神像の図像展開と三弁宝珠」（『密教学研究』二八、一九九六年）。佐々木守俊「三寶院定海の吉祥天造像」（河野元昭先生退官記念論文編集委員会編『美術史家、大いに笑う―河野元昭先生のための日本美術史論集』ブリュッケ、二〇〇六年）。

〔注一五〕範俊から覚法への授法については、小島裕子「院政期における愛染王御修法の展開」（『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』平成九年度文部省科学研究費補助金「研究成果公開促進費」助成出版、一九九八年）に詳しい。

(注一六) 杉橋隆夫「四天王寺所蔵「如意宝珠御修法日記」・「同」紙背(富樫氏関係) 文書について」『史林』五三―三、一九七〇年)。

(注一七) 『大正新脩大藏經』七八―六一八上。

(注一八) 『小野類秘抄』「鼻」。範俊による白河院への宝珠献上については、松本氏前掲論文に詳しい。

(注一九) 上川通夫「如意宝珠法の成立」『日本中世仏教史料論』(吉川弘文館、二〇〇八年)。

(注二〇) 松本氏前掲論文。

(注二一) 『大正新脩大藏經』七九―五二〇中。

(注二二) 内藤栄「真言宗小野流の舎利法と宝珠法」

(注二三) 『大正新脩大藏經』図像部四―四七五上。

(注二四) 『大正新脩大藏經』図像部六―三四〇上。

(注二五) 杉橋氏前掲論文。

(注二六) 『大正新脩大藏經』七八―八〇二中。

(注二七) 井上一稔『日本の美術 三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』(至文堂、一九九二年)。

(注二八) 岩本裕「如意輪観音の原名について」(日本オリエント学会編『足利惇氏博士喜寿記念 オリエント学インド学論集』国書刊行会、一九七八年)。

(注二九) 宮治昭「観音菩薩像の成立と展開―インドを中心に―」(『シルクロード学研究』十一、シルクロード学研究センター、二〇〇一年)。

(注三〇) 随心院聖教類綜合調査団編『随心院聖教類の研究』(汲古書院、一九九五年)。

(注三一) 『大正新脩大藏經』七八―六九一中。

(注三二) 内藤氏前掲書所収「密観宝珠形舎利容器について」。

(注三三) 真鍋俊照「虚空蔵求聞持法画像と儀軌の東国進出 上」(『金

沢文庫研究』二九四、一九九五年)。牧野和夫・藤巻和宏「実践女子大学附属図書館山岸文庫蔵『御遺告大事』一軸解題・影印」(『実践女子大学文学部紀要』四四、二〇〇二年)。

(注三四) 以下、『東長大事』本文は内藤氏前掲書所収「密観宝珠型舎利容器について」所載の翻刻による。

(注三五) 永村眞「古代・中世における密教寺院の組織と教学―おもに醍醐寺を素材として―」(国立歴史民俗博物館編『中世寺院の姿とくらし―密教・禅僧・湯屋』山川出版社、二〇〇四年)。

(注三六) 内藤栄「密観宝珠形舎利容器について」(『鹿園雑集』創刊号、一九九九年)。

(注三七) 内藤氏前掲書所収「密観宝珠形舎利容器について」。

(注三八) 松本氏前掲論文。

(注三九) 『大正新脩大藏經』七八―三七二中。

(注四〇) 『大正新脩大藏經』七八―五〇上。

(注四一) 『大正新脩大藏經』七八―六一六上。

(注四二) 『国史大系 第二十二巻上 水鏡・大鏡』吉川弘文館、一九六六年。

(注四三) 阿部氏前掲論文。

(注四四) 松下隆章「摩尼宝珠曼荼羅に就いて」(『美術研究』一三一、一九四三年)。

(注四五) 『大正新脩大藏經』一九―三三三上。

(注四六) 『大正新脩大藏經』七八―八六〇中下。

(注四七) 松下氏前掲論文。

(注四八) 真鍋俊照「空海請来梵字法身偈と摩尼宝珠曼荼羅」(『仏教芸術』一二二、一九七九年)。

(注四九) 『大正新脩大藏經』一九―四九二下〜四九三上。

(注五〇) 『大正新脩大藏經』七九―三九六下。

(注五一) 内藤氏前掲書所収「密観宝珠形舎利容器について」。

(注五二) なお『秘抄問答』巻第六に引く醍醐寺理性院流の宗命(一一

一九〇一（一七一）の「理性院記」には、請雨経法の五日目に難陀と跋難陀の二龍王供を行うべきことが記されている。また弘仁九年（八一八）以来、室生山の龍穴神社において雨乞いがさかんに行われていた（藪元晶「国家的祈雨の展開―平安時代の祈雨」『雨乞儀礼の成立と展開』岩田書院、二〇〇二年）。一方前述の通り、『御遺告』以降、空海が室生山に宝珠を埋納したと伝えられる。やや時代の下る作例であるが、室生寺にも室町時代の摩尼宝珠曼荼羅が伝来しており、祈雨と宝珠の結びつきについて、龍穴への信仰との関わりが留意される。

（注五三）『大正新脩大藏経』圖像部四―四八〇上中。

（注五四）『建久二年祈雨日記』五月二十一日条（『続群書類従』二五下、釈家部）。

（注五五）藪元氏前掲書所収「請雨経法と醍醐寺」。

（注五六）勝覚をはじめとする醍醐寺僧と請雨経法の関わりについては、藪氏前掲書所収「請雨経法と醍醐寺」に詳しい。

はじめに

第二章において、四天王寺金堂本尊や中宮寺本尊など、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称された問題に着目した。半跏思惟の姿をした如意輪観音像は経典に説かれず、他国にも確実な作例は見当たらない。そこで、これらの像を如意輪観音と結びつけた主体を探った結果、十二世紀後半から十三世紀にかけて活躍した、醍醐寺僧を中心とする人的ネットワークが浮かび上がった。真言宗の二大流派のひとつ、小野流の拠点として名高い醍醐寺は、開創以来、如意輪観音を本尊として特別に重んじてきた寺院である。

本章ではさらに一歩踏み込んで、半跏思惟形の如意輪観音像のあらわれた十二世紀後半が、後白河院政期にあたることに注目したい。後白河院はとりわけ観音信仰の篤かったことで知られるが、如意輪観音信仰との関わりを示す史料も散見

される。また院はしばしば醍醐寺僧に命じて、宝珠を用いた修法を行わせているが、第三章で論じたように、宝珠は如意輪観音を象徴する重要な持物であり、醍醐寺の如意輪観音信仰との密接な関連が想定される。加えて、半跏思惟形の如意輪観音像に関わる寺院および人的ネットワークに、院が深く関与していたことも判明した。

本章は、これらの視点にもとづき、十二世紀後半における日本独自の如意輪観音像の展開と、後白河院の関係について検討を行うものである。

一 半跏思惟形の如意輪観音像をめぐる人的ネットワーク と後白河院

聖徳太子ゆかりの半跏思惟像と如意輪観音の結びつきを考察するにあたって、第二章では特に、密教図像集『別尊雜



図1 『別尊雑記』四天王寺金堂本尊

記』の巻第十八「如意輪」に収録される、四天王寺金堂本尊の記事に注目した(図1)。右の掌を頬に近づけ左足を踏み下げた像の横に「四天王寺救世観音像」と記され、そのすぐ下に「聖如意輪云々、仍私加之」との注記が見える。すなわちこの像は「救世観音」とよばれる一方で「如意輪」とも称されるため、編者である心覚が「私に」、つまり私的に如意輪観音の巻に加えたものと解されてきた(注1)

四天王寺は、聖徳太子が四天王に物部氏討伐の戦勝を祈願したことにより創建されたと伝えられる。金堂本尊は現存しないが、十一世紀初めに発見された縁起資財帳(通称『御手印縁起』に「救世観音像」としてみえ、太子を思慕する百済の国王が造像したものと記される。

『御手印縁起』に「救世観音」の名で記された四天王寺金堂本尊(以下、四天王寺像)が、『別尊雑記』では「如意輪」巻に収録され、「如意輪」と注記された。重要なのは、『別尊雑記』以前の史料には、太子と如意輪観音を結びつける、あるいは半跏思惟像を如意輪観音と称する記事がまったく見当たらないことである。また『別尊雑記』が半跏思惟形の如意輪観音像として、あえて四天王寺像の図像を収録していることをふまえると、この四天王寺像こそ、最も早く如意輪観音と称された半跏思惟像である可能性が高い。

『別尊雑記』は、原本とされる仁和寺本に承安二年(一一七二)の年紀が見え、東寺金剛藏所蔵の写本に応保二年(一一六二)と記されることから、この頃を中心にして

編纂が進められたと考えられている(注2)。また当時すでに成立していた図像集、特に十二世紀前半の『図像抄』をもとに編纂されたことが明らかとなっているが、『図像抄』の如意輪観音の項には四天王寺像が収録されていない。すなわちこの像が如意輪と称されるようになったのは、『別尊雑記』が成立した十二世紀後半頃であったと推測した。

さらにまた、「私加之」という注記にも留意し

た。编者心覚が四天王寺像を「私に」如意輪の項に加えたのだとすれば、この像はまさに心覚の周辺で如意輪観音と称されはじめたものと想定できる。また阿部泰郎氏により、彼の付法の弟子にあたる守覚もまた『別尊雑記』の編纂に関わったことが指摘されている^(注三)。

これらのことから半跏思惟形の如意輪観音像の成立には心覚や守覚が関わっており、太子ゆかりの半跏思惟像がもつとも早く「如意輪」と称された四天王寺という場が、何らかの重要な役割を果たしたことが想定される。そこで十二世紀後半の四天王寺に目を向けたところ、長寛二年(一一六四)、十世紀以来天台僧によって独占されていた別当に、守覚の師である真言僧覚性が補任されたことが判明したのである。加えてこの時期、同じく太子の建立と伝える広隆寺におい



ても、「泣き弥勒」と通称される半跏思惟像(図2)がやはり如意輪観音とよばれていた。泣き弥勒は七世紀後半の作とされ、九世紀の『広隆寺資財交替実録帳』には「弥勒菩薩」と記されるが、永万元年(一一六五)の供養願文では「如意輪」と称されている。永万元年の広隆寺別当は真言宗・仁和寺の僧寛敏であるが、当時の仁和寺門跡は覚性であった。

つまり十二世紀後半、四天王寺と広隆寺は共に覚性の影響下にあり、四天王寺像を最も早く「如意輪」と称する『別尊雑記』を編纂したのは、覚性の弟子の守覚らであった。さらに彼らがいずれも、如意輪観音を本尊として重んじる醍醐寺の法流と密接に関わっていたことが明らかとなり、半跏思惟形の如意輪観音像が醍醐寺の如意輪観音信仰を淵源として成立したことが推察された。

すなわち覚性、心覚、守覚ら、醍醐寺に関わる真言僧を中心とする人的ネットワークによって、太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称されたとの結論に至ったのである。その背景として、当時、天台宗が四天王寺を拠点とする太子信仰によって隆盛をきわめていたことに注目し、四天王寺への進出および太子信仰の取り込みをはかった真言僧が、その手段として、本尊「救世観音」像をあえて「如意輪観音」という新たな名でよびかえ、太子と如意輪観音を結びつけるとい

う独自の信仰を生み出した可能性を指摘した。

以上が第二章の概要であるが、『別尊雑記』が編纂された十二世紀後半は、後白河院政期にあたる。ここで注目したいのは、半跏思惟形の如意輪観音像に関わる人的ネットワークと後白河院の関係である。四天王寺別当となった覚性は院の実弟であり、『別尊雑記』の編纂に関わった守覚は院の第二子にあたる。さらに広隆寺別当寛敏は院の近臣、藤原通憲の子息であることが判明した。つまりいずれも後白河院と密接な関係にあったことになる。よって以下、半跏思惟形の如意輪観音像が成立した背景に、後白河院が関わっていた可能性について検討を試みたい。

二 後白河院と如意輪観音信仰

後白河院は数多くの造寺造仏に関わり、頻繁に寺社を参詣し、また自ら出家して法皇となるなど、熱心な仏教信者として知られる。しかし一方で、その信仰の具体的な様相を伝える史料は乏しく、研究が制約されてきた。よって、如意輪観音信仰との関わりについても明確な史料を欠いているが、ここで院の書写山円教寺の参詣にまつわる記録に注目したい。十四世紀に円教寺僧昌詮が撰した『性空上人伝記遺続集』に

は「後白河法皇当山幸駕事」として、後白河院が承安四年（一一七四）に同寺を訪れた際の記事がみえる（注四）。ここには、

七日御参籠於如意堂、可開如意輪御厨子由勅定、草創已後、雖不開之、依勅命開畢、法皇即本尊御拜見。

とあり、後白河院が円教寺如意堂に七日間参籠したこと、さらには草創以来秘仏とされてきた本尊如意輪観音像を、勅命によって開扉させたことが伝えられている。

また院は那智・熊野への信仰が篤く、保元三年（一一五八）から建久三年（一一九二）にかけて頻繁に参詣を重ねている

（注五）。

重要なのは、熊野権現もまた如意輪観音信仰と密接

に関わっていたことである。藤原宗忠は『中右記』に天仁二年（一一一九）に熊野を詣でた際、那智山熊野権現の礼殿が「如意輪験所」となっていたことを記している（注六）。この堂は現在の青岸渡寺の前身とされ、同寺は今も如意輪観音を本尊としている。さらに天台僧覚忠（一一一八～一一七七）の巡礼記によれば、那智山の三十三所札所一番霊場としての本尊は如意輪観音像であるという（注七）。五代の天皇の護持僧をつとめた覚忠は、天台座主および園城寺長吏に任じられ、後白河院出家の際の戒師をつとめたことでも知られる。覚忠

と院の関係をふまえると、院の熊野参詣もまた如意輪観音信仰と関わるものであった可能性が高い。

後白河院の観音信仰については、蓮華王院千体千手観音堂の造営などの事績によって、従来、千手観音への信仰がクローズアップされてきたが、如意輪観音信仰についてもさらに詳しく追究してゆく必要がある。

なお後白河院と如意輪観音信仰の関わりを考える上で、院の宝珠信仰もまた注目を要する。第三章で述べたように、平安時代以降、醍醐寺を中心として宝珠への信仰が高まり、とりわけ院政期において宝珠を用いた修法（以下、宝珠法）が盛んに行われた。宝珠は如意輪観音を象徴する重要な持物であるが、当時の醍醐寺において、宝珠と如意輪観音の結びつきが重視されていたことが判明した。すなわち醍醐寺の宝珠信仰の背景には、如意輪観音信仰が密接に関わっていた可能性が高い。

後白河院と宝珠信仰の関わりもまた、醍醐寺僧を介したものであった。建久六年（一一九五）八月十四日付の九条兼実置文追記には、

去元暦之比、大夫尉源義顕謀反之時、醍醐座主権僧正勝賢奉法皇 詔、賜件宝珠於本寺、勤仕御祈。

と記され、院は源義経の謀反に際し、醍醐寺僧勝賢に命じて宝珠法を修させたという（注八）。

第三章で紹介した通り、醍醐寺座主を三度務めた勝賢（一一三八―一九六）は、宝珠法を頻繁に修したことで知られる。平安後期から鎌倉初期における宝珠法を記録した、四天王寺所蔵『如意宝珠御修法日記』には、元暦元年（一一八四）から建久三年（一一九二）に至る勝賢の四度の実修が記されている。空海、そして宝珠法の創始者とみられている範俊と共に、「日本国宝珠造人」の一人にも挙げられており（注九）、宝珠信仰との関わりの深さが窺える。

勝賢は後白河院の近臣、藤原通憲の子息であり、母は院の乳母をつとめていた。院とは生まれながらに密接な関係にあり、院の近臣僧として活躍したことで知られる。また現在、醍醐寺三宝院の本尊として、袈裟を通肩にまとい定印を結んだ快慶作の弥勒菩薩像（図3）が安置されている。その像内銘記をもとに、勝賢が建久三年（一一九二）に後白河院の追善のために発願した像であることが判明している（注一〇）。なおこの像はもともと勝賢の住房、上醍醐覚洞院の本尊であり、『醍醐寺新要録』によれば同院には「後白河院御追善護摩堂」があったという。このことから、勝賢と後白河院の近い

関係がみてとれよう。

なお勝賢の継承した醍醐寺三宝院流において、宝珠と如意輪観音の結びつきが特別に重視されていた。特にその流祖勝覚は、如意輪観音の左右に不動明王・愛染明王を配した「三尊帳」を三宝院に安置したと伝えられる。ここでは宝珠を納めた五輪塔を、如意輪観音の象徴としていた。勝覚から灌頂を受けた聖賢が、この三尊帳をもとに、如意輪観音を本尊とする宝珠法（如意輪宝珠法）を実修したことも注目される（注二）。また勝賢自身もこの三尊の組み合わせにもとづいた「三仏如意輪法」を行ったという（注三）。したがって勝賢の宝珠法は、如意輪観音信仰を淵源とするものであったと考えられる。すなわち勝賢を介した後白河院の宝珠信仰もまた、醍醐



寺の如意輪観音信仰と密接に関わっていたのではないだろうか。

またここで注目したいのは、宝珠法の実修者と、半跏思惟形の如意輪観音像をめぐる人的ネットワークの関係である。『如意宝珠御修法日記』の後白河院政期前後の記録にあらためて目を向けると、勝賢のほかには覚性、守覚の二名による宝珠法の実修例が記録されている。覚性は後白河院の実弟、守覚は子息にあたるが、第二章で述べたように、彼らがいずれも半跏思惟形の如意輪観音像の成立に関わる人物であることに留意したい。守覚は四天王寺金堂本尊を如意輪観音と称する『別尊雜記』の編纂に関わり、覚性は当時の四天王寺別当をつとめていた。なお『秘抄』に、勝賢が守覚に三宝院流の諸尊法を伝授した際の折紙が類聚されているが、その中に「舍利与宝珠自体也」との記述をはじめ、宝珠に関わる伝授も散見される（注三）。第四章で述べた通り、勝賢の宝珠法が如意輪観音信仰を淵源とするものであったことをふまえると、守覚の宝珠法にも、如意輪観音信仰が深く関わっていた可能性がある。

なお十三世紀に活躍した叡尊も太子・如意輪観音同体信仰を継承しているが、第三章で述べた通り、叡尊は如意輪観音を本尊とする三宝院流の宝珠法を寺院の年中行事に発展さ

せたことでも知られる。このことも、醍醐寺の宝珠法と如意輪観音信仰の密接な関係を示唆するものであると考える。

さらに注目すべきは、勝賢もまた、半跏思惟形の如意輪観音像をめぐる人的ネットワークと密接な関係にあったことである。広隆寺泣き弥勒が如意輪観音と称された時期、同寺の別当をつとめていた寛敏は藤原通憲の子息であり、つまり勝賢の兄弟にあたる。なお勝賢は、初度の醍醐寺座主就任の折、寺内の争いによって醍醐寺を追われ、応保二年から承安年間（一一七一―一一七四）まで高野山に滞在した。近年、土谷恵氏の研究により、高野山における前半期には『別尊雜記』の編者心覚と、そして後半期には守覚と、修学を目的とした活発な交流が行われたことが判明している（注一四）。また横内裕人氏によって、治承・寿永の乱の際、守覚と勝賢が協力して後白河院政を護持したことが明らかにされた（注一五）。なお覚性が守覚に伝法灌頂を授けた際、勝賢が誦経導師を勤めるなど、覚性と勝賢の交流も窺える。

以上みてきたように、半跏思惟形の如意輪観音像をめぐる人的ネットワークと宝珠法をめぐる人的ネットワークは重なりをもち、いずれも醍醐寺の如意輪観音信仰と密接な関係にあった。そして、両者が共に後白河院と深く関わっていたことが注目される。すなわち後白河院が勝賢、覚性、守覚ら

醍醐寺の法流を受けた真言僧を通じて醍醐寺の如意輪観音信仰に触れ、ひいては半跏思惟形の如意輪観音像の成立に関わったことが想定できるのではないだろうか。

三 後白河院と醍醐寺

なお後白河院は、承安三年（一一七三）三月と元暦元年（一一八四）九月に醍醐寺を訪れたとの記録がある（注一六）。また元暦元年の七月には、醍醐寺において後白河院の無事を感謝した供養法が行われ（注一七）、さらに翌年八月、院のための孔雀経御修法が修されている（注一八）。後白河院と醍醐寺の直接的な関わりを示す史料は決して多くはないが、ここで特に注目したいのが、山科殿の存在である。

醍醐寺は京都市の最東部、山科に位置するが、醍醐寺の法流を継ぐ仁海が付近に醍醐寺小野流の拠点となる小野曼茶羅寺を創建して以後、同じく山科にある安祥寺や勧修寺もまた小野流の寺院として発展を遂げてゆく。

このような地に後白河院が山荘的性格をもつ別業として営んだのが山科殿であった（注一九）。『兵範記』仁安二年（一一六七）七月二〇日条には、後白河が新造の山科殿に行幸したとの記事がみえ、以後、安元元年（一一七五）十二月、治

承二年（一一七八）閏六月、同三年六月三日、同四年五月、そして薨去直前の建久二年（一一九一）十一月と、頻繁にここを訪れた記録が残る（注二〇）。さらに『醍醐寺新要録』巻第二十雑事部の「御幸編」には、

憲深等申文云、後白川法皇たいこ（醍醐）のつき（槻）の木の御所へ御幸なりたりけるなり、故勝賢僧正まいりけるに、こ成賢僧正・範賢僧都・定範法印兄弟三人をひきくして（後略）

との記述がみえる（注二一）。「醍醐の槻の木の御所」がどの御所にあたるのか不明であるが、醍醐寺に近い山科御所を指すものとも推測される。そしてこの御所に、勝賢や成賢ら醍醐寺僧が参上したという。すなわち後白河院が醍醐寺付近の御所において、醍醐寺僧と交流していたことが窺える。

注目したいのは、後白河院が醍醐寺や山科殿を訪れた時期が、『別尊雑記』の成立期、つまり半跏思惟形の如意輪観音像が生み出された時期とほぼ重なる点である。すなわち後白河院がこの時期、山科の地において醍醐寺僧および醍醐寺の如意輪観音信仰と深い関わりをもったことが、半跏思惟形の如意輪観音像の成立に結びついたと考えることもできるの

ではないだろうか。

またすでに述べたように、勝賢が後白河院の追善のために発願した弥勒菩薩像が、醍醐寺に安置されていたことから、醍醐寺と後白河院の密接な関係が窺われる。さらに後白河院は、醍醐寺僧重源の主導する東大寺大仏の再興に積極的に関わり、自ら開眼供養を行ったことでも知られる。ここにも院と醍醐寺僧の交流がみられるが、この時、重源の依頼を受けた勝賢が宝珠を造作し、大仏の胎内に納入したという（注二二）。加えて勝賢の弟子にあたる醍醐寺三寶院流の成賢は、金銅五輪塔に後白河院の遺骨を安置している（注二三）。第三章で述べた通り、三寶院流において宝珠もしくは宝珠と団体とされる舍利を納めた五輪塔が、如意輪観音の象徴とみなされていた。醍醐寺の如意輪観音信仰と後白河院の関わりを考える上で、これら院の周辺にみられる宝珠や五輪塔も留意されよう。

四 後白河院と四天王寺

また十二世紀後半、後白河院は四天王寺にも足繁く参詣を重ねていた（注二四）。十三世紀の唱導書『転法輪抄』は、四天王寺を信仰していた愛孫六条院が安元二年（一一七六）に死去したことがそのきっかけであったと伝える。嘉応元年を端

緒とし、以後建久二年に至る頻繁な行幸が記録されている（注二五）。

なお後白河院は安元三年、御所内に四天王寺念仏堂を模した堂を建立している（注二六）。文治三年（一一八七）には四天王寺内に五智光院を造営し、同年四天王寺において伝法灌頂を受けている（注二七）。そして文治五年、四天王寺に百日参籠し、この間の朝政は寺内で行ったという（注二八）。このような後白河院による四天王寺への積極的な関与が、四天王寺金堂本尊が如意輪観音と称され始めた時期と重なることに注目したい。

なお前述のとおり、長寛二年に院の実弟覚性が四天王寺別当に補任されているが、以後十二世紀後半期の別当職に、院の子息の円恵および定恵が名を連ねたことも留意される（注二九）。またすでに述べたように、永万元年に泣き弥勒が如意輪観音と称された広隆寺についても、院の近臣藤原通憲の子息であり、勝賢の兄弟にあたる寛敏が保元三年より別当をつとめている。さらに、院のそばに仕え、嘉応二年（一一七〇）に東大寺で院に戒を授けた真言僧禎喜、後白河院の子息真禎がその後につづいた（注三〇）。すなわち十二世紀後半以降の四天王寺および広隆寺には、後白河院の関係者が次々に別当として入寺していたことになる。

これらのことから十二世紀後半、後白河院が四天王寺金堂本尊および泣き弥勒とも深い関わりをもったことが推測される。すなわち四天王寺や広隆寺において太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称された背景には、後白河院および院の身近な真言僧たちが何らかの形で関与していたのではないだろうか。

五 日本独自の如意輪観音像の展開と後白河院

後白河院は「年中行事絵巻」をはじめとする絵巻物のパトロンとしても名高く、従来、その「文化創造にみる高度な政治性」が指摘されてきた（注三一）。すなわち既存の仏像の尊名変更という「文化創造」についても、院が何らかの意図のもとに関与した可能性がある。

また根立研介氏は、とりわけ後白河院政期において、古仏が「再使用」されていることを指摘した（注三二）。すなわち仏事や新造の堂宇の本尊として、あえて靈験性の高い古仏を求めめる事例が顕在化しているという。太子ゆかりの半跏思惟像はいずれも古仏であり、この時期にこれらの像があらためて注目され、「如意輪観音」という新たな意味づけがなされたことは、古仏使用の問題と相通するものと考ええる。

それでは後白河院、あるいは院の身近な僧があえて太子ゆかりの半跏思惟像に注目し、これを如意輪観音と称することに関わったとすれば、そこにはいかなる意図があったのであろうか。

天台側の史料ではあるが、十三世紀の『阿娑縛抄』第一三八の四天王法の項に、注目すべき記事がみえる。

一院〔傍注 後白河院〕御祈勤修此法之時、中台画観音。

是別意楽也。其故院聖徳太子後身也云夢想聞之。仍憶念

太子與守屋合戦之往。今乱世御祈故如之畫之云々。

後白河院のために四天王法を修した際、画面の中心に観音を描いたという。これは院が聖徳太子の生まれ変わりであるとの夢告によるもので、物部守屋との合戦のころに思いをさせ、乱世の時代の御祈としてこのような本尊を描いたと記されている。重要なのは、この記事において後白河院と聖徳太子、観音が結びつけられている点である。すなわち太子と如意輪観音が結びつけられたことに、院が何らかの形で関与したことを示唆する史料とみることもできるのではないだろうか。

この記事について松岡久美子氏は、平安時代末期から聖徳太子に関わる言説に物部氏討伐譚が目立つことに注目し、そ

の背景に治承三年（一一七九）の平氏による政変の影響を想定している（注三三）。平安時代後期、王権は仏法に、仏法は正統な王権に支えられて繁栄するという考えのもと、後白河院の王権と権門寺院が強く結びついていた。しかし後白河院政を否定する平氏によって、その提携が分断された。すなわち「王法に背く逆臣」である平氏に対し、「仏法を庇護する為政者」としての後白河は、まさに物部氏を討ち仏教保護政策をとった為政者としての聖徳太子のあり方と重なるという。なおこれに関わる史料として、治承の乱の際に以仁王が下した平氏追討の令旨も注目される。『吾妻鏡』に載せるこの令旨には

天武皇子旧儀、追討王位推取之輩、訪上宮太子古跡、打亡仏法破滅之類矣、唯非憑人力之構、偏所仰天道之扶也
因之如、有帝王三宝神明之冥感、何忽無四岳合力之志

とあり、以仁王が自身を天武天皇や太子になぞらえ、対する平氏を王法・仏法の敵とみなしていることがわかる。すなわち後白河院政期の動乱の中で、太子は王法・仏法の守護者ともみなされていた。

また名畑崇氏によれば、院政期に撰関家および院の四天王

寺参詣が頻繁になった背景には、十七条憲法への注目もあつたという^(注三四)。保元の乱の立役者として知られる藤原頼長は、康治二年(一一四三)から久安六年(一一五〇)にかけて七度も四天王寺に参詣したが、舍利の礼拝供養や念仏を行う傍ら、太子の手印が押された『御手印縁起』や『聖徳太子伝暦』を熟読している。『聖徳太子伝暦』には十七条憲法の前文が掲載され、また『御手印縁起』には、太子が十七条憲法を制定して王法の規模となしたことに加え、王法と仏法が一体であることが説かれる。すなわち仏法崇敬によって王法は保障されるのであり、その道理を示すのが十七条憲法であるとの内容が読み取れるという。

この問題について追塩千尋氏は、頼長が康治二年(一一四三)の太子忌に四天王寺に詣で、自分が撰籙の位に昇れば十七条の憲法に則り揆乱反正の功をたてる、と祈請していることに注目し、これを支配の手段としての憲法崇拜であるとした^(注三五)。また『平家物語』巻二「教訓状」には、後白河院を軟禁しようとする平清盛に対し、子の重盛が十七条憲法の第十条をもつて諫めたことが記される。ここからも、後白河院政期における同憲法への関心の高さが窺える。

すなわち後白河院政期の前後に、物部氏討伐譚や十七条憲法にあらためて目が向けられていた。その背景に、王法と仏

法の守護者としての太子への信仰、そしてその拠点としての四天王寺への信仰の隆盛があつたことに注目したい。保元・平治の乱をはじめ、平氏による幽閉、院政の停止、さらには治承・寿永の乱の勃発など、後白河院は常に王権の危機にさらされていた。四天王寺金堂本尊および泣き弥勒が如意輪観音と称されたのが、保元・平治の乱(一一五六年・一一五九年)から間もない時期であつたことも留意されよう。

加えて院政期には、太子に仮託した未来記が数多く著されていた^(注三六)。寿永二年(一一八三)七月、源義仲の軍が迫る中、後白河院は京都を脱出する。『平家物語』巻八「山門御幸」には、都に院が不在となつた状態を憂えて「開闢よりこのかた、かかる事あるべしともおぼえず。聖徳太子の未来記にも今日の事こそゆかしけれ」と記され、太子の未来記に指針を求めている。追塩氏はこのような未来の予言者としての太子への信仰や、四天王寺が鎮護国家の守護神である四天王を祀つた寺院であつたことをふまえ、為政者の四天王寺参詣の目的が政治・社会の安定と鎮護国家を太子に期待することにあつたと指摘している^(注三七)。

なお詳しくは第五章で述べるが、この時期、如意輪観音もまた王権と強く結びついていた。宮中で天皇の身体安穩を祈る二間観音が如意輪観音であるという説があらわれ、如意輪

観音は理想の帝王である転輪聖王とも重ねられてゆく。

また勝賢の弟子にあたる覚禪が編纂した『覚禪抄』の如意輪観音の項には、「若有悪敵軍陣鬪諍、皆得勝利」、つまり戦における勝利の功德が挙げられている^(注三八)。やや時代は下るが一三世紀、鎌倉政権のために度々如意輪法が修されておるが、これらが兵乱消除のために行われた可能性が指摘されている^(注三九)。寿永の乱の際、醍醐寺僧に宝珠法を行わせた後白河院もまた、勝利を願い、如意輪観音に自らの王権の守護を託したのではないか。

さらに同じく第五章で詳述するように、十一世紀以降、天皇の護持僧が行う長日三壇法として、如意輪観音を本尊とする如意輪法が延暦寺に創設される。数ある観音の中から如意輪観音が選ばれた理由について、名畑氏は『阿娑縛抄』第九十二「如意輪」^(注四〇)に、

聖徳太子者、仏法最初主也、王法又以十七条憲法行之、
而太子即観音後身也、以如意輪尊為七生之本尊。

とあることに注目した。そして、如意輪法が創設されたのは白河天皇即位の年にあたるため、この法は新帝の意を迎えるために設けられたに相違ないと述べている。如意輪観音信仰

と院権力が密接に結びつく過程で、仏法と王法の守護者としての太子への信仰が重要な役割を果たしたことが窺える。太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音とよばれた背景に、後白河院が関与した可能性を検討する上でも重要な史料であると考ええる。

また後白河院は寺社勢力、とりわけ天台宗・延暦寺との対立にも悩まされていた。嘉応元年に延暦寺衆徒が内裏に乱入し、治承二年には延暦寺僧徒の蜂起によって法皇の園城寺御幸が停止されている^(注四一)。院の出家や授戒は天台僧によって行われたが、その一方で天台とは常に緊張関係にあった。そうした状況をふまえると、半跏思惟形の如意輪観音像に関わったのが天台ではなく真言側の僧であったことも注目される。

すなわち十二世紀後半、聖徳太子ゆかりの寺院への進出をはかっていた真言宗の意図と、太子および如意輪観音の功德により王権を護持したいという後白河院の思いが一致し、半跏思惟形の如意輪観音像の成立へと結びついたのではないだろうか。

なお第三章で述べたように、この時期、真言宗は『御遺告』や宝珠をはじめとする様々な「創作」を行い、院権力とのつながりを深めていた。こうした動きの一環として、半跏思惟

形の如意輪観音像という新たな如意輪観音像を生み出したとみることもできよう。

むすび

本章では、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と結びつけられた十二世紀後半が、後白河院政期にあたることに注目した。その結果、第二章で提示した半跏思惟形の如意輪観音像をめぐる人的ネットワークが、後白河院と密接な関係にあったことが明らかとなった。また宝珠信仰を含め、後白河院と醍醐寺の如意輪観音信仰との関わりを示す史料も散見される。加えて太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称された四天王寺や広隆寺に、院が積極的に関与していたことも判明した。

なおこの時期、院は平氏や寺社勢力との対立によって常に危機的状況にさらされていたが、太子信仰および如意輪観音信仰に共通して、王権の守護に関わる功德が期待されていたことが注目される。

すなわち十二世紀後半、聖徳太子と如意輪観音が結びつけられ、太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称された背景に、後白河院が関わっていた可能性を指摘したい。つづく第

五章では、如意輪観音信仰と王権の関わりについて、さらに詳しく追究してゆく。

(注一) 真鍋俊照「心覚と別尊雜記について—伝記および画像「私加之」の諸問題—」(『佛教藝術』七〇、一九六九年)。錦織亮介「別尊雜記の研究—その成立問題を中心にして—」(『佛教藝術』八二、一九七一年)。錦織亮介氏によれば、「私」という字は当時、一人称の「私」の意味ではほとんど使われず、「個人的に」、「私的に」という意味で使われていたという。よって、「ワタクシ」「ワタクシニ」と読むべきであるとする。

(注二) 真鍋氏、錦織氏前掲論文。

(注三) 阿部泰郎「守覚法親王における文献学」(『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究—論文篇』研究成果公開促進費助成出版、一九九八年)。

(注四) 『兵庫県史—史料編—中世四』(兵庫県史編集専門委員会編、兵庫県、一九八九年)。

(注五) 松本公一「後白河院の信仰世界—蓮華王院・熊野・厳島・園城寺をめぐる—」(『文化史学』五〇、一九九四年)。

(注六) 『中右記』天仁二年十月二十七日条。

(注七) 『寺門高僧記』卷六(『統群書類従』)。

(注八) 醍醐寺蔵・報恩院隆勝筆『鳥羽勝光明院宝珠管目録』奥書。

(注九) 『秘抄問答』第十三(『大正新脩大藏經』七九—五二〇中)。

(注一〇) 日本国宝珠造人。大師・範俊・勝賢僧正已上三人。

(注一一) 副島弘道「醍醐寺三宝院本堂の弥勒菩薩坐像」(『醍醐春秋』二一、一九九三年)。海野啓之「醍醐寺三宝院弥勒菩薩坐像についての一解釈—弥勒の画像をてがかりに—」(『美術史』一六三、二〇〇七年)。

(注一二) 『覚禪抄』卷第四九「如意輪下」(『大正新脩大藏經』画像部四—八六四)。

(注一二) 慈眼寺蔵『東長大事』。

(注一三) 『大正新脩大藏經』七八—五五九上。

(注一四) 土谷恵「中世初頭の仁和寺御流と三宝院流」(『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究—論文篇』研究成果公開促進費助成出版、一九九八年)。

(注一五) 横内裕人「密教修法からみた治承・寿永内乱と後白河院の王権—寿永二年法住寺殿転法輪法と蓮華王院百壇大威徳供をめぐって—」(『日本中世の仏教と東アジア』塙書房、二〇〇八年)。

(注一六) 『醍醐雜事記』、棚橋光男「後白河の行動一覽」(『後白河法皇』講談社、二〇〇六年)。

(注一七) 『醍醐雜事記』卷九。

(注一八) 『醍醐雜事記』卷九。

(注一九) 西井芳子「山科御所と御影堂」(財団法人古代学協会編『後白河院』吉川弘文館、一九九三年)。

(注二〇) 西井氏前掲論文。

(注二一) 『醍醐寺新要録』。

(注二二) 伊藤聡「重源と宝珠」(『仏教文学』二六、二〇〇二年)。

(注二三) 嘉禄元年(一二二五)十月二日「僧正成賢置文案」(『醍醐寺文書』二—三〇五)。

(注二四) 渡辺匡一「後白河院と四天王寺—金沢文庫蔵唱導資料「弁曉草」から—」(『仏教文学』二五、二〇〇一年)。

(注二五) 棚橋氏前掲書所収「後白河院行動一覽」。

(注二六) 『玉葉』安元三年条。

(注二七) 『玉葉』文治三年条。

(注二八) 『一代要記』、『吾妻鏡』

(注二九) 『四天王寺別当次第』。

(注三〇) 『広隆寺別当補任次第』。

(注三一) 棚橋氏前掲書。

(注三二) 根立研介「附論 後白河・後鳥羽院政期の古仏の使用をめぐる」『日本中世の仏師と社会』塙書房、二〇〇六年。

(注三三) 松岡久美子「聖徳太子の物部守屋討伐譚と山門の四天王法―四天王寺様四天王の受容をめぐる―」(中野玄三・加須屋誠・上川通夫編『方法としての仏教文化史―ヒト・モノ・イメージの歴史学―』勉誠出版、二〇一〇年)。

(注三四) 名畑崇「太子観の展開とその構造」(田村田澄・川岸宏教編『聖徳太子と飛鳥仏教』吉川弘文館、一九八五年)。

(注三五) 追塩千尋「古代・中世における太子信仰の性格」『日本中世の説話と仏教』和泉書院、一九九九年。

(注三六) 和田英松「聖徳太子未来記の研究」『史学雑誌』三三―三三、一九二一年)。

(注三七) 追塩氏前掲論文。

(注三八) 『大正新脩大蔵経』図像部四―八六六上。

(注三九) 速水侑「鎌倉政権と台密修法―忠快・隆弁を中心として―」『平安仏教と末法思想』吉川弘文館、二〇〇六年)。

(注四〇) 『大正新脩大蔵経』図像部九―一九四中。

(注四一) 安田元久『後白河上皇』(吉川弘文館、一九八六年)。

はじめに

第四章では、院政期における如意輪観音像の展開と後白河院の関係について検討した。その結果、半跏思惟形の如意輪観音像をめぐる人的ネットワークや寺院が、後白河院と密接に結びついていたことが判明した。また後白河院はしばしば醍醐寺僧勝賢に命じて宝珠法を行わせているが、勝賢の宝珠法は如意輪観音信仰と深く関わるものであった。すなわち半跏思惟の姿をした日本独自の如意輪観音像が生み出され、如意輪観音の象徴である宝珠への信仰が多様な展開を遂げる過程で、後白河院やその周辺の真言僧が重要な役割を担った可能性を指摘した。

なお従来、如意輪観音信仰が平安時代後期以降の宮中において重要な位置を占め、天皇や法皇の信仰と強く結びついた

ことが指摘されてきた。真言僧が天皇のために奉仕した仁寿殿観音供や夜居加持もまた、とりわけ十二世紀以降、如意輪観音信仰と結びつけられている。また同じ時期、如意輪観音は、王権の守護や獲得に関わる功德を期待されるようになり、理想の帝王たる転輪聖王とも重ねられてゆく。

よって本章では、如意輪観音信仰と王権の関わりに注目し、これが院政期における如意輪観音像の展開に与えた影響、およびその背景で真言宗、とりわけ醍醐寺の果たした役割について考察したい。

一 如意輪観音信仰の伝来と皇室

院政期の状況について考察を進める前に、まずは如意輪観音信仰が日本に伝来した当初の造像の様相を概観しておく

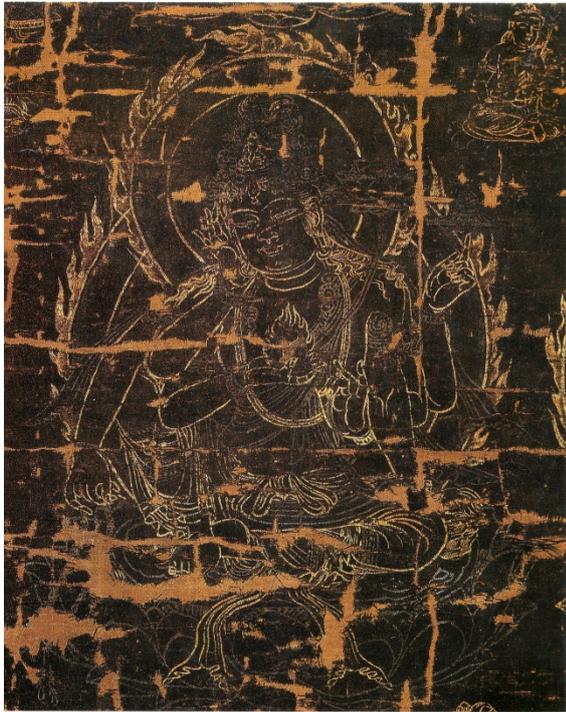


図1 高雄曼荼羅・如意輪観音像



たい。天長年間（八二四〜八三四）の制作とされる神護寺所蔵の高雄曼荼羅は、現存最古の両界曼荼羅であり、空海が唐から請来した現図曼荼羅を写したものと知られる。その観音院の中央に、六臂如意輪観音像が位置している（図1）。右手第一手を思惟相とし、第二手に宝珠を、第三手に念珠をもつ。左手第一手は光明山に触れ、第二手は蓮華を、第三手は輪宝をもっており、すなわち日本や中国でもっとも多くみられる姿である。さらに空海は、『観自在菩薩如意輪瑜伽』および『観自在如意輪観門義注秘決』という不空訳の二本の如意輪観音関係經典ももたらしている。

なお従来、第一章で述べたように、石山寺本尊や東大寺大

仏左脇侍が如意輪観音と称されることから、これらの造像が行われた奈良時代には、すでに如意輪観音信仰が伝来していたものとみられていた。これに対し、井上一稔氏が関係史料を精査し、奈良時代の日本では密教の変化観音としての如意輪観音への意識はまだ芽生えておらず、本格的な如意輪観音信仰が行われていなかったことを明らかにした（注二）。よって現在では井上氏の説にもとづき、如意輪観音信仰の日本への伝来は、空海が正統な密教をもたらした平安時代以降との見方が定説となっている。

以後、平安時代前期において、空海の弟子が如意輪観音の造像を開始した。このうち大阪・観心寺の本尊如意輪観音像（図2）は、平安初期を代表する作例として国宝に指定され

ている。本像は空海の十大弟子の一人である実慧が発願し、その弟子の真紹によって造立されたことが判明している（注三）。なおこの像については、従来、嵯峨院

太皇太后（橘嘉智子）との関わりが注目されてきた。元慶七年（八八三）の『観心寺資財帳』中には、貞観十六年（八七四）七月十九日、淳和院太皇太后（正子内親王）が母橘嘉智子の御願堂修理料として、古市郡の一处を施入したと記される。また、同資財帳の講堂（現在の本堂）安置仏中に「彩色如意輪観音像一軀 高三尺余木造」がみえ、この像が現在の観心寺本尊に該当すると考えられている。御願堂が講堂の前身にあたるとして、その安置仏如意輪観音像の造立にも、御願の本人である橘嘉智子がかかわっていたとみなされてきたのである。

橘嘉智子はその卒伝に、容貌が人を寛和せしめ、手は長く



て膝を過ぎ、髪も地にゆだねるほどであったと描写され、超越的な美しさをもつ女性と伝えられていた（注三）。井上氏はこの像のもつ官能性や豊満さに注目し、「本像は明らかに女性を意識して表現されている。本像の女性性の裏には橘嘉智子が存することに関わりがあるやに思えてくる。このように彼女を理想化する時代にあつて、本像の造形の基本態度は、観音の特性を理想の女性像の中に表そうとするものではなかったかと考えたい」と述べている（注四）。なお大和文華館所蔵の銅像（図3）をはじめ、唐代中国の作例についても女性的な雰囲気を有することから、如意輪観音が早い時期から女性的な表象と強い親和性をもっていたことが指摘されてきた（注五）。

さらに現存しないものの、実慧の付法の弟子慧運の開創した安祥寺にも、皇室の女性と関わりの深い如意輪観音像が安置されていた。貞観九年（八六七）の『安祥寺縁起資財帳』には、文徳帝の女御藤原明子の発願像として白檀の如意輪観音像が記される。また同資財帳には「如意輪曼荼羅老舗」、「如意輪菩薩像一軀」の記載もみえる。

なおやや時代は下るが、十世紀後半頃の作とみられる兵庫・神呪寺の如意輪観音像（図4）も、淳和帝の第四后如意尼と関わる伝承をもつ像として注目されてきた。

『元亨釈書』卷第十八によれば、如意尼が山で光を放つ桜を見つけ、空海に依頼してこれを像に刻んでもらったという。『帝王編年記』では、如意尼にかわり淳和帝の皇后正子内親王があてられている。

また守覚の著作『御記』には、空海の甥にあたる真然が清和天皇（在位八五八〜八七六）のために、毎日如意輪供養法を行い、その供養の度に如意輪観音像一体を造ったことが記される（注六）。

そして真然、および同じく空海の弟子の真雅や益信に師事した聖宝もまた、貞観十八年（八七六）、自ら彫刻した如意輪観音像と准胝観音像を笠取山（醍醐山）上の草



庵に安置した（注七）。これが醍醐寺の始まりといわれるが、聖宝はさらに金峰山にも堂を建て、像高六尺の金色如意輪観音像を造立している（注八）。これらの像は現存しないが、すでに紹介した通り醍醐寺には図5や図6のような六臂如意輪観音像が伝来し、いずれも十世紀前半の作とみられている。特に後者については、津田徹英氏により、聖宝以来醍醐寺座主の住房であつた延命院の本尊「聖宝観賢元杲各造立如意輪三体」（注九）のうち、観賢の造立した像である可能性が指摘されている（注一〇）。

平安時代における醍醐寺の如意輪観音像と皇室の明確な結びつきは見いだせないが、寺内の諸堂の造営には皇室が深く関わっている（注一一）。延喜七年（九〇七）、醍醐天皇によつて薬師堂と五大堂の建立が発願され、御願寺となつた。その諡号も、醍醐寺との深い関わりに由来するという。さらに醍醐天皇は皇子誕生を祈願して笠取山の山麓に釈迦堂を建立し、醍醐寺への帰依の結果、朱雀天皇と村上天皇が誕生したと伝えられる。以後、その造営は朱雀・村上両帝に継承され、聖宝以来の山上伽藍「上醍醐」に対し、「下醍醐」と称される寺院の整備がすすめられた。醍醐天皇や朱雀・村上天皇と如意輪観音信仰の関わりについては不明であるが、醍醐寺の本尊として信仰の対象となっていた可能性は高い。



一方、天台宗においても、その開祖最澄が唐で如意輪壇を授かっていた^(注二二)。また円仁は如意輪經典をもたらし、円珍は福州開元寺より「観世音如意輪菩薩像一卷」図像を請来している^(注二三)。京都・聖護院の智証大師像の胎内には、円珍自筆の「如意輪心中真言観」が納められていた。以後、延暦寺の諸院、兵庫・円教寺、園城寺観音堂など、天台系寺院の本尊として如意輪観音像が安置される。しかし、天台宗において十世紀以前の如意輪観音の作画造像は見いだせないという^(注二四)。よって平安時代中期ごろまでは、真言宗が如意輪観音信仰を主導していたものと推測される。



以上みてきたように、平安時代初期、空海によって本格的な如意輪観音信仰が日本にもたらされ、以後、空海の弟子たちとその造像活動を主導していた。そして如意輪観音像への信仰は皇室、とりわけ女性と密接に結びついたことが注目されてきた。ただし史料が乏しく、伝来初期において、如意輪観音にいかなる功德が期待されていたのかは不明である。

二 御代始三壇法の如意輪法と天台宗

つづいて平安時代後期以降、天皇の即位儀礼の中に如意輪法が導入され、如意輪観音信仰と皇室はより明確に結びつい

てゆく。天皇の即位後、神事では大嘗会を行うのに対し、仏事では御代始三壇法と称される御法が修される。御代始三壇法は近世に至るまで連綿と行われてきたが、美術史の分野からこの行事に着目した鷹巢晃氏によれば、仏教史でもこれを本格的に取り上げた研究はほとんどないという^(注一五)。よつて以下、鷹巢氏の論考に基づいてその内容をみてゆきたい。

御代始三壇法は「三壇不断の御修法」、「長日三壇法」などとも称され、宮中や寺院に壇所を三つ設けて天皇一代の弥栄と安泰と長寿を祈念するものである。鷹巢氏はその始行について、『皇年代略記』や『護持僧次第』に後三条天皇のために三壇法を修した記録がみえ、また『山密往来』に「三壇長日事。後三条院以来事候哉。」とあることなどから、十一世紀半ばの後三条院の御代以降とみている。

重要なのは、ここで修される三壇が、不動法、普賢延命法、そして如意輪法であったことである。これに奉仕するのは、いずれもその時の天皇護持僧で、延暦寺、園城寺、東寺の三寺の高僧(原則としてそれぞれ天台座主、寺門長吏、東寺一長者)であった。当初は延暦寺僧が如意輪法、園城寺僧が不動法、東寺僧が普賢延命法を担当していたが、後には台密主導となったという。『門葉記』巻第五三によれば、延久五年(一〇七三)に天台僧仁覚が初めて長日如意輪法を勤修して

いる。すなわちこの御代始三壇法における如意輪法の創始は、天皇と如意輪観音信仰の結びつきを天台が主導した例として注目されてきた。

なお『阿婆縛抄』巻第二二二所載の「諸法要略抄」には「普賢延命法^{増益}修之」、「如意輪法^{息災}修之」、「不動法^{五壇之時}降伏修之」とあり、

如意輪法については息災の功德が期待されていたという。しかし『白宝抄』および『覚禅抄』第四十八「如意輪上」には「小野伝云。如意輪増益」と記され、不動法や普賢延命法についても息災や増益、降伏の諸説がみえる^(注一六)。すなわち三壇法は息災・増益・降伏を目的としていたようであるが、このうち如意輪法がそれを担っていたかは定かでない。よつて三壇の中に如意輪法が選ばれた理由についても不明である。

三 仁寿殿観音供の本尊と真言宗

なお天台が主導した御代始御修法に対し、真言僧が宮中で奉仕した仏事もまた、如意輪観音信仰と密接に関わっていたことに注目したい。平安時代以降、内裏のほぼ中央に位置する仁寿殿において、毎月十八日に観音像を本尊とする「仁寿

殿観音供」(「十八日観音供」とも)が行われていた。ただし記録があまり残っていないことに加え、後述するように、特に十二世紀以降の仏教書類において、本尊の尊名や供養の場に関する記述が諸説入り乱れている(注二七)。よって毎月の行事であったにもかかわらず、その実態や成立経緯は不明確であった。重要なのは、この観音供の本尊について、聖観音や十一面観音とする説のほか、如意輪観音であったとの伝えがみえる点である。

近年、仁寿殿観音供をめぐる問題に正面から取り組んだ芥木涼子氏により、本尊や場所に関する史料が整理され、その記述に混乱や矛盾が生じた背景が明らかにされた。したがって以下、芥木氏の論考をふまえつつ、特にこの観音供の本尊と如意輪観音が結びついた経緯について検討したい。

仁寿殿観音供は聖宝の弟子の観賢(八五四〜九二五)以降、十世紀後半にかけて定例化されたものと推測されている(注二八)。観賢に対し、仁寿殿での観音像供養を命じた延喜十六年(九一六)の宣旨には、本尊の尊名について「件観音十一面菩薩、脇士梵天帝釈(注一九)」、つまり十一面観音であったと記される。芥木氏によればこの観賢による実修が、現時点で確認できる仁寿殿観音供の初見史料であるという。つづいて『村上天皇御記』の応和二年(九六二)六月十八

日条には本尊について「白銀白檀聖観音像一体」とみえ、白銀と白檀の聖観音像を各々一体ずつ新造し、仁寿殿に安置している。

次に仁寿殿本尊の尊名が確認できるのは、『権記』長保二年(一〇〇〇)十二月二十一日条の「仏師康尚奉造仁寿殿御

仏、正観音、梵尺、三体」であり、仏師康尚が造像したのは「正

観音」、つまり聖観音像であった。しかしその後、長暦四年(一〇四〇)九月に内裏は火災により焼亡し、仁寿殿本尊観音像も焼失したという。小野流の仁海の注進状に、新造された本尊に関する記述がみえ「白檀正観音像一体 高七寸(注二〇)」、すなわち白檀の聖観音像であった。

そして次の『為房卿記』延久四年(一〇七二)正月二十九日条には、興味深い記事がみえる(注二一)。後三条天皇が仁寿殿本尊として「白檀聖観音像一体、高七寸」を新造しようとしたところ、仏師長勢が後一条・後冷泉天皇のときは「白檀十一面観音」だったと上申した。そこで真言院の成尊に確認したところ、師仁海の際は「此仏聖観音」とされていたとい、結果として仁海の先例に倣って聖観音を造像したという。つまり延久四年の時点までは、仁寿殿本尊は聖観音もしくは十一面観音とすることが通例となっていたようである。

その後、承暦四年（一〇八〇）年の内裏の火災により観音供は十六年の間途絶し、永長元年（一〇九六）正月十八日に清涼殿の二間に場所を移して復興されることとなる。二間とは清涼殿の天皇の寢所、夜御殿の東隣に位置する部屋で、文字通り南北の柱間が二間分の空間であり、後述するように護持僧が天皇のための祈祷を行う場でもあった。この二間で観音供を行った際の本尊について、『中右記』の記事には、

又於二間有観音供、醍醐法務定賢勤之。本是於仁寿殿従往古所修来也。年来絶了。今日被復旧規也。本供十一面観音云々。而従本為御本尊、被安置如意輪像也。仍便被供如意輪也。

とあり^{（注三）}、本来は十一面観音を本尊とするところ、もともと二間に安置されていた如意輪観音像を用いたという^{（注三）}。ここで注目したいのは、この永長元年の観音供に勤仕した「醍醐法務」定賢（一〇二四〜一一〇〇）が、第三章で醍醐寺三宝院流の祖として紹介した、勝覚の師にあたる点である。また、この勝覚が永久三年（一一一五）に著した『伝受記』にも定賢の記が引かれている^{（注四）}。

法務記云 定賢、十八日御本尊観音像事。二途相分、多説難決。而愚身長者之時、為修理、被渡本坊。其時親拝見之、聖観音像勿論也。（略）但以此尊、習如意輪云々。凡当流至極秘決、三尊以習一体為最極秘決。一体習之時、如意輪習之也。最秘々々。更莫言云々。

つまり定賢によれば、仁寿殿観音供の本尊については聖観音・十一面観音の二説があり、いずれとも決しがたかった。しかし自分が実見したところ、聖観音であった。そしてこの尊像はこの聖観音を如意輪観音であると習わし、三尊をもつて一体となすことが「当流至極秘訣」であるという。

なお『醍醐雜事記』には、醍醐寺三昧堂に醍醐天皇の本尊と伝えられる「聖観音十一面観音如意輪観音」の三軀が安置されていたといい、このこともふまえると、「三尊」とはこの三種の観音を意味するものであるうか。なお第四章で述べたように、勝覚は如意輪観音を本尊とし、左右に不動明王・愛染明王を配する「三尊帳」を造立したとも伝えられる。しかしこの三尊の組み合わせが十三世紀以降の史料にしか確認できないため、勝覚の時代にはまだ成立していなかったとの指摘もある。しかし師の定賢の時代、このような如意輪観音を本尊として三尊を一体とみる行法がすでに存在してい

たことは、注目に値しよう。

さらに勝覚は同じく『伝受記』に「十八日観音供事」とし

て「御本尊ハ大師御本尊十一面・聖・如意輪十一面ハ大師御作云々。」(注)

三五と記し、ここでも仁寿殿観音供の本尊に如意輪観音が挙げられている。すなわち醍醐寺僧定賢による観音供の復興を契機として、おそらく初めて如意輪観音が本尊とされ、さらにこれが弟子勝覚に継承されたことになる。なお勝覚はこれらの本尊を「大師御本尊」「大師御作」としているが、如意輪観音を本尊とすることの正統性を主張するため、その由緒を空海にまで遡らせたとも推測できよう。

定賢と勝覚がいずれも醍醐寺僧であり、第三章で述べた通り、勝覚以後、三寶院流において「三尊帳」や宝珠法といった如意輪観音信仰に関する新たな展開が生み出されていたことに注目したい。つまりこの観音供と如意輪観音の結合もまた、定賢や勝覚ら十二世紀の醍醐寺僧によって主導されたのではないだろうか。

さらにこれに関連して、真言僧が天皇のために行った「夜居加持」と如意輪観音信仰の関わりにも目を向きたい。前述の通り、清涼殿二間は天皇の護持僧が伺候する場として知られる。天皇は三種の神器のうち宝剣と神璽を枕元に安んじて

就寝するが、その剣と神璽を置いたちようど裏側が二間にあたる。ここで護持僧が毎夜、天皇の身体安穩を祈り、夜居加持と称する修法を行った。この夜居加持がいつから行われていたのかは不明であるが、十一世紀以降は護持僧の役割として史料にみえ、また後一条天皇のときには結番が組まれるなど、制度化されていることがわかる(注六)。

二間の本尊については不明な部分が多いが(注七)、定賢が観音供の本尊として、もともと安置されていた如意輪観音像を転用したとあることから、少なくともこの前後から如意輪観音とされた可能性は高い。また後述するように、十三世紀の慈円もまた二間本尊が如意輪観音であると論じている。すなわち二間で行われた夜居加持が、如意輪観音信仰と密接な関係にあったことが推測されるが、これとは別の視点からも注目すべき史料がある。

醍醐寺を中心とする小野流においてこの夜居加持の作法が、「護持僧作法」として継承されていた。小野流の護持僧作法の基本になったとされる仁海(九五―一〇四六)撰『灌頂御願記』には、

一、殿上護持

僧者、往古作法、真言長者一人、天台座主一人、毎夜二

人相並不断香爐煙、城辺鎮守諸神等毎夜一社勧請之後、
密々祈念令候者也

とあり、東寺長者と天台座主が二間に城辺鎮守諸神等を毎夜一社勧請して祈念すべきことが記されている^(注二八)。以後、先に紹介した勝覚の『伝受記』をはじめ、定海(一〇七四)

一一四九)筆『護持僧作法』(醍醐寺文書九三函三二号二)や、守覚撰『秘抄第十五(作法上)』(随心院聖教一六二箱一九号一五)所収の「護持僧参内次第」にも上記の作法が引用されている。

ここで注目したいのは、勝覚の『伝受記』中の護持僧作法に、宝珠に関わる記述がみえることである。随心院の所蔵する勝覚の『護持僧作法』(随心院聖教第一七箱二号。乾元・嘉元年間(一三〇二〜一三〇六)頃の書写)は、「宮中鎮護」、「諸神鎮座法」、「禁中加持作法」の三部から構成される。このうち「禁中加持作法」に注目したい。

塔變成金剛界九会曼荼羅主法界体性智遍照如来、此尊則威光普照日天子也、此則大日本国本主宮中鎮護靈鏡内侍所此也、当代国主金輪正王也、聖王即日天子御胤子、彼是一体無二、而更無差異、故国主玉体御心中有

万法能生【阿】字、變成威光遍照日輪、々々反成大摩尼宝珠、故普天下雨如意珠、利率土人民、随一々所求与各々悉地 加持等如常

なお以下、「禁中加持作法」について上島氏の紹介を引用する。

護持僧が如来拳印を結び、禁裏を觀想するが、その具体的内容は注目すべきものである。つまり、金剛界曼荼羅主たる「遍照如来」(大日如来)は「威光普照日天子」で、それは「大日本国本主宮中鎮護靈鏡内侍所」、さらには「当代国主金(聖)輪正王」(天皇)と一体無二であり、「聖王」は「日天子」の御胤子である。それゆえ、国主の玉体御心には「万法能生阿字」があり、それは「威光遍照日輪」となり、さらには「大摩尼宝珠」になるという。ゆえに、普く天下に如意珠がふり、率土の人民を利し、求むる所にしたが、悉く成就するという。

すなわちこの作法において、天皇の玉体御心にある「万法能生阿字」が最終的に「大摩尼宝珠」に変じ、さらにこの宝珠

が普く天下にふつて、人民を利するという。第三章において、宝珠が王権の象徴となつていたとする阿部泰郎氏の説^(注二九)を紹介したが、この記述もまた、その証左となるものであるう。

なお上島氏により、天仁二年(一一〇九)正月に範俊から伝授された作法であることが明らかにされた^(注三〇)。これが宝珠法の創始者とみなされている範俊の伝であることも注目されるが、より重要なのは、これを記したのが勝覚であつたという点である。第三章で述べたように、勝覚を祖とする醍醐寺三宝院流では「三尊帳」や如意宝珠法をはじめ、如意輪観音を宝珠によつて象徴する信仰が継承されていた。この三宝院流の宝珠信仰、および二間の本尊が如意輪観音であつたとする説をふまえると、少なくとも勝覚ら三宝院流の僧による禁中加持作法が、如意輪観音信仰と密接な関係にあつた可能性は高いであろう。

以上のことから、仁寿殿観音供および夜居加持という天皇のための重要な儀礼において、定賢や勝覚ら十二世紀の醍醐寺僧が、独自の如意輪観音信仰を導入していたことが窺える。なお仁寿殿観音供は、本来ひっそりで行われた天皇の個人的仏事であり、史料上もほとんど登場することがなかった。斉木氏は十一世紀以降、この観音供が真言僧の主要な勤めと

して注目され、また天皇にとつての重要な仏事として様々な言説が形成されていった背景に、小野流の仁海の働きを想定している^(注三一)。また土谷恵氏によれば、仁海以前から東寺長者らによつて、真言院での活動を中心に真言僧の役割を拡大する動きがあり、仁海もこれを継承していたという^(注三二)。さらにこの時期、天皇の身体を護持する護持僧の重要性が強く意識され始めるが、当時の護持僧は天台僧によつて占められていた。そこで仁海は護持僧に食い込むべく、真言僧の存在を強く主張していたという^(注三三)。

ここで、仁寿殿観音供や二間観音が如意輪観音信仰と結びつけられたのが、まさにこの時期と重なることに注目したい。すでに述べてきたように、如意輪観音信仰の伝来当初は、空海の弟子たちが造像を主導して皇室と密接に結びつき、さらに十一世紀以降は御代始御修法の如意輪法により、天台が天皇の即位礼における重要な位置を占めていた。そして、十二世紀以降、真言宗、とりわけ醍醐寺僧が、宮中の儀礼に独自の如意輪観音信仰を導入していた。これらの状況をふまえると、真言と天台が皇室に接近するひとつの手段として、如意輪観音信仰が重要な役割を担っていたことが窺える。そしてそのために、両者が競いあうように、如意輪観音に関わる修法や儀礼、言説を生み出していたのではないだろうか。天台

側の如意輪観音信仰の実態についてもさらに詳しく追究してゆく必要があるが、御代始御修法の中にあえて如意輪法を導入した背景には、真言側の如意輪観音信仰に対抗する意味もあつたのではないかと考える。

このように平安時代後期以降、宮中の儀礼を通じて天皇が如意輪観音信仰と深く関わっていた。さらにとりわけ十二世紀以降、如意輪観音に対し、王権と関わる功德が期待されていることに注目したい。

四 如意輪観音の功德と王権

鎌倉時代成立の和歌の注釈書『毘沙門堂本古今集注』には、奈良時代に活躍した弓削道鏡が『如意輪経』に書かれた生まれ変わることなしに直ちに王位につけるとの功德に期待し、如意輪法を行ったと記されている^(注三四)。その一方で、如意輪関係経典に、このような文言を見出すことはできない。道鏡と如意輪観音の関わりを示すのは『七大寺年表』や『源平盛衰記』など、いずれも十二世紀以降の史料であり、『毘沙門堂本古今集注』に載せるこの説話の成立も、これを遡るものではないと思われる。すなわち十二世紀以降、このように如意輪観音の功德と王権が明確に結びついていることに注

目したい。

なお第二章で論じた通り、聖徳太子が如意輪観音と団体であるという説があらわれ、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像が如意輪観音と称されるようになったのも十二世紀であつた。ここで重要なのは、第四章で述べたように、この時期、聖徳太子が王法と仏法の守護者として信仰されていたことである。度重なる動乱の中で、物部氏討伐譚や十七条憲法があらためて注目され、また太子に仮託した未来記が数多く著され、未来の予言者としての太子への関心が高まっていた。為政者たちは政治・社会の安定や鎮護国家を願い、公家は政治に関わる地位の獲得を祈って、太子信仰の拠点である四天王寺に参詣を重ねた。このような王権の守護者としての太子と団体とみなされたことも、如意輪観音と王権の結びつきを考える上で顧慮すべきであろう。

また十二世紀末から十三世紀にかけて成立した『覚禅抄』巻第四十九「如意輪下」には如意輪観音の功德が列記され、そのひとつとして「勝軍陳事」が挙げられる^(注三五)。

勝軍陳事

経云 大本 若有軍陣鬪諍訟五更誦此陀羅尼一千八百返得解脱云々

又云。作是法者。於日月中応受秘種々上妙供養。若有惡敵軍陳鬪諍。皆得勝利云々

すなわち悪敵や戦乱、鬪争の際、如意輪観音の功德によって勝利を得ることができるといふ。しかし、如意輪関係經典にこのような記述は確認できない。伝来当初は女性との関わりを中心に信仰されていた如意輪観音に、院政期以降、このような武神的な性格が加わったことは注目を要する。第四章で述べたように、『覚禅抄』の成立は後白河院政期と重なり、保元・平治の乱や治承・寿永の乱など、しばしば院権力を脅かすような大きな戦乱が勃発していた。如意輪観音に「勝軍」の功德が期待された背景には、そのような王権の危機的状況が密接に関わっていた可能性がある。覚禅の師である勝賢が、後白河院の身近な僧であったことにも留意したい。当時の状況をふまえると、戦における勝利という新たな功德が加わったことも、王権との関わりを考慮する必要があると考える。さらに『覚禅抄』の同項には、「国王所愛事」「求児法事」といった功德もみえる。これについて、藤原頼長の石山寺および六角堂との関わりに注目したい。保元の乱の立役者として知られる頼長は、康治二年（一一四三）の太子忌に四天王寺に詣で、自分が撰録の位に昇れば十七条の憲法に則り揆乱

反正の功をたてる、と祈請したという^(注三六)。撰録の地位を得るためには天皇の外戚になるのが要件となるが、頼長もまた、養女多子を近衛天皇の後宮に入内させて立后をはかり、諸社寺に祈願していた。その中に石山寺および六角堂も含まれており、石山寺本尊が十世紀末以降、如意輪観音と称されていたことはすでに述べたが、六角堂もまた如意輪観音を本尊とし、太子創建寺院との伝承によつて参詣を集めていた^(注三七)。

建治元年（一二七五）成立の『阿婆縛抄』卷九十二「如意輪部」には、

六角堂日本最初伽藍也。聖徳太子七生御本尊也。尤可仰崇。件像持蓮、施願印也。石山像同之云々。

とあり^(注三八)、六角堂本尊如意輪観音像が石山寺本尊と同じく左手施願印（与願印）、右手持蓮華印の二臂の如意輪観音像であると記される。これは承暦二年の火災後に再興された現在の石山寺本尊の姿と一致する^(注三九)。

頼長は石山寺には毎年僧供十石をあて、六角堂には七日間参籠し、本尊前で通夜、金泥『如意輪経』三十三巻を供養した^(注四〇)。これについて名畑崇氏は、「石山寺と六角堂の本

尊は二臂如意輪觀音像で太子の本地と信じられていたから、頼長は太子に多子の皇后冊立を祈願していたとみてよい」と述べている。六角堂については十三世紀成立の『六角堂縁起』を遡る史料を欠いているため、これ以前に太子との関わりが語られていたかは不明であるが、第二章で述べた通り、石山寺本尊が聖徳太子信仰と明確に結びつくのは、管見の限り十三世紀後半以降である。頼長の石山寺本尊への祈願は、太子ではなく如意輪觀音に向けたものであった可能性が高い。そしてその背景には、『覺禪抄』に説く「国王所愛事」「求児法事」といった如意輪觀音の功德への期待があったものと推察される。

また同じく『阿娑縛抄』の如意輪觀音の項に引く『慈恵和尚拾遺伝』には、藤原兼家の女詮子とその子懐仁親王が如意輪法を受けたことが記される。そして、その年のうちに円融天皇が花山天皇に讓位して懐仁の立太子となり、さらに花山の出家によって懐仁が一条天皇として即位し、兼家が摂政になったと述べている。この如意輪法の背景にも、頼長と同様の信仰が窺える。

以上みてきたように、十二世紀以降、如意輪觀音に対し、王権の守護や獲得に関わる功德が期待されていた。また特に注目したいのは、これら如意輪觀音と王権の結びつきを示す

記述に、醍醐寺、石山寺、四天王寺、そして勝賢、覺禪、後白河院らとの関わりが窺える点である。これらの寺院や人物については、第一章から第四章において、如意輪觀音像をめぐる日本独自の展開と密接に関わった可能性を指摘してきた。つまり王権の結びつきを含め、院政期に如意輪觀音の信仰と造像をめぐる新たな展開が生み出された背景に、これを主導したネットワークの存在が想定できるのではないだろうか。

なお「勝軍陳」や「国王所愛」の功德が勝賢の弟子、覺禪の『覺禪抄』において俄かに登場したものであることをふまえると、これら新たな功德の創出された背景で、勝賢ら醍醐寺僧が中心的な役割を果たした可能性も指摘できよう。

五 如意輪觀音と轉輪聖王

王権との関わりに関連してさらに注目したいのは、この時期、如意輪觀音が轉輪聖王とも結びつけられてゆくことである。先に六角堂が如意輪觀音の靈場、太子創建寺院として参詣を集めていたことを述べたが、親鸞がここに百日参籠し、如意輪觀音から「行者宿報設女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂」との夢告を得たことも有名であ

る。すなわちたとえ女犯があっても、私が玉女の姿となつて、肉体の交わりを受けようと述べている。これは『覚禪抄』の如意輪観音の項にみえる、次のような功德にもとづくものと解されている（注四一）。

本尊変王玉女事

又云 発邪見心、淫欲熾盛可墮落於世、如意輪我成王玉女、為其人親妻妾共生愛、一期生間莊嚴以福貴、令造無辺善事、西方極樂浄土令成仏道、莫生疑云々。

すなわち、もし女性と関係したいという邪な気持ちが起こつたなら、如意輪観音が玉女となり、その人の親しき妻妾となつて共に愛を生じるといふ。

玉女は古代インドの神話において理想の帝王とされた転輪聖王の七宝のひとつとして知られる。山本ひろ子氏は、玉女について『大般涅槃経』卷十二に「手を以て王衣に触れば即ち王の身の安楽病疾を知り、亦王所縁の処を知る。爾の時頂生此の念を作す。若し女人ありて能く王の心を知れば、即ち是れ女宝なり」とあることから、王の側に侍りその卓抜なる通力でもつて王の身体を護持し、かつブレインとしての働きをも果たす者であったと述べている（注四二）。如意輪観音が

玉女と結びつけられた背景には、その像容がもつ女性的な雰囲気も関係していたと推測されよう。井上一稔氏は観心寺本尊のもつ官能性や豊満さといった女性性に注目し、玉女としての橘嘉智子を重ねていた可能性を指摘している。

なお転輪聖王の原語は「Caaravartin（輪を回転する、世界の主権者）」であり、『中阿含経』によれば身に三十二相をそなえ、即位のときに天から光明輝く輪宝を得て、これを回転させることにより、武力によらず正義によって支配を行うという（注四三）。転輪聖王は玉女のほかに金輪、白象、紺馬、神珠、居士、主兵の七つの宝を有するといひ、しばしば転輪聖王とともにこの七宝が表されている（図7）。なお転じる輪の種類によつて金輪王、銀輪王、銅輪王、鉄輪王の四種に分かれる。

なお『長阿含経』などに、釈迦の誕生に際して転輪聖王になるとの予言があったと伝える。よつてインド・マウリヤ朝のアショーカ王や中国の則天武后をはじめ、仏教に帰依する為政者が、しばしば転輪聖王と重ねられた。稻城正己氏によれば、日本でもつとも早く転輪聖王との関わりが確認できるのは、長谷寺銅版法華説相図銘の「伏惟れば聖帝は、金輪を超へたまひ、逸多に同じ」とある部分で、「聖帝」すなわち天武天皇は、金輪聖王以上の逸多（弥勒菩薩）に等しい人徳

にすぐれている、と解されるという^(注四)。以後、「大仏殿
左右曼荼羅銘文」や『続日本紀』などにも「金輪」の語が散
見されるが、工藤美和子氏は、明確に転輪聖王を取り上げた
のは九世紀の空海が最初であると指摘している^(注四五)。空海
は『秘密曼荼羅十住心論』巻第二において「輪王を明かす」
として、国王の善政について論究している。さらに工藤氏は
法会の際の願文を精査し、村上天皇や一条天皇ら十世紀以降
の天皇が転輪聖王と重ねられていることを明らかにした。



ここでもうひとつ注目したいのは『金輪呪王経』の存在で
ある。十二世紀から十三世紀にかけて成立した『図像抄』
『別尊雜記』および『覚禅抄』には、如意輪観音の経典とし
て「観自在菩薩如意摩尼転輪聖王金輪呪王経」が挙げられ、
ここに二臂、四臂、六臂、八臂、十臂、十二臂の像が説かれ
ていると述べる。しかしこの経典は今に伝わらず、その実態
は不明である。第三章で摩尼宝珠曼荼羅の典拠として紹介し
た『如意宝珠転輪秘密現身成仏金輪呪王経』は鎌倉時代の偽
経であることが判明している^{(注}

四六)が、両者の名称には通じるとこ
ろがあり、『観自在菩薩如意摩尼転
輪聖王金輪呪王経』もまた偽経で
あったか、あるいは実際に存在し
ていたかどうかも定かでない。こ
の問題についてはさらなる検討を
要するが、ここでは十二世紀以降
の図像集において、このような転
輪聖王と如意輪観音を結びつける
ような経典の名が俄かにあらわれ
たことに留意しておきたい。

なお後白河院政期において、転

輪聖王たる阿育王（アシヨーカー王）への信仰が高まっていたことも注目を要する。特に後白河院の周辺で、しばしば阿育王の八万四千塔建立説話に倣ったとみられる小塔供養が行われていた。如意輪観音と転輪聖王の結びつきに関連する問題として、付論において検討を加えたい。

さらに如意輪観音は天皇との関わりにおいて、転輪聖王といつそう明確に結び付けられてゆく。先に真言僧が清涼殿二間において天皇のために行った「夜居加持」と如意輪観音信仰の関わりについて論じた。これに関連する史料として、従来、十三世紀の天台僧慈円（一一五五～一二二五）の『法華別帖』における次の記述が注目されてきた（注四七）。

抑自昔大内二間二十八日観音供、東寺長者毎月勤行有御祈。此観音何観音哉。近日多称十一面云々。是皆慥不伝受師伝之輩。居東寺長者之時。加私案之日。如此僻事多出来也。可悲可悲。慥如意輪也云々。予聞此事思惟云。尤可為如意輪。諸観音之中。国王御本尊必可用輪ノ義也。金輪王之故也。

すなわち仁寿殿観音供の本尊を十一面観音とする説があるが、これは慥かに師伝を伝えざる輩が東寺長者であった時に、私

案を加えた僻事であり、真実の本尊は如意輪観音であるという。そして、如意輪観音を本尊とする理由について、国王は金輪王（転輪聖王）であるから、国王の本尊には「輪の義」を用いるべきであると説いている（注四八）。

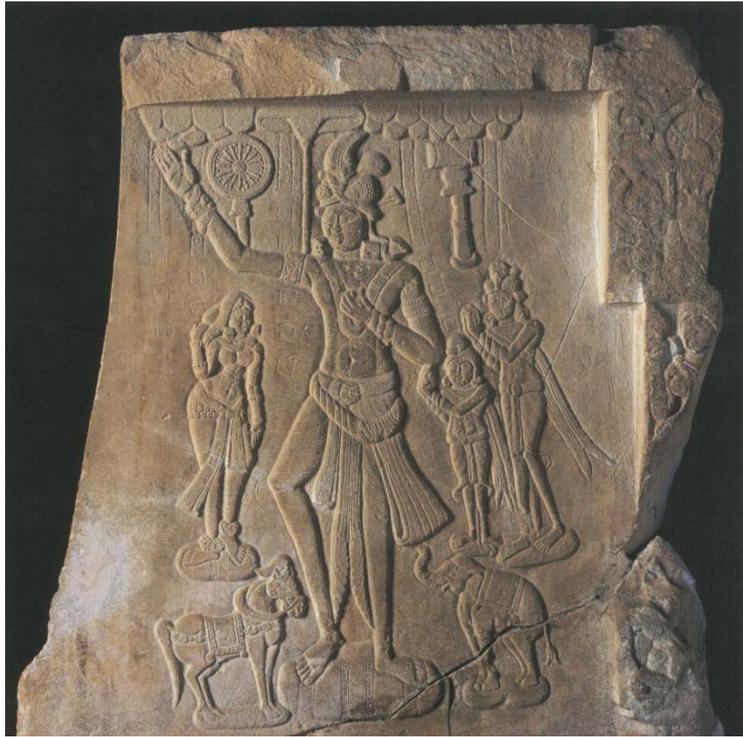
すでに述べたように輪宝は転輪聖王の象徴であり（図8）、おそらく如意輪観音が輪宝を持つことから、転輪聖王たる天皇の本尊にふさわしいとみなされたのであろう。すなわちほとけの持物によってその性格に新たな解釈が加えられたことが窺え、美術史学の観点から特に注目すべき事例であると考える（注四九）。

またやや時代は下るが、十四世紀の天台僧光宗が著した『溪嵐拾葉集』にも、

二間御加持事示云。内裏内侍所奉安置処二間也。（略）其本尊如意輪観音也。最不可口外也。

とあり（注五〇）、同じく二間観音が如意輪観音であったと伝える。

なお伊藤聡氏により、二間観音が如意輪観音であるとする慈円の説の典拠が明らかにされた。慈円の口伝を筆記した『四帖秘決』第三に、『法華別帖』と同様の記述がみえる（注



五二〇。

二間観音供トテ、毎月長者禁中参、修事アンナリ。是弘法大師始令修給。其近代長者等、ツヤツヤト何観音イフ事不習伝シテ、様様推修之。隆聖伝此事。如意輪也云々。聞之、我思様、如意輪イフ輪、主上御本尊被定ニコソアリケレ。三壇長日御修法、如意輪其一也。ナトカハ、日

来如此不心得ケルソ。金輪聖王御本尊観音、如意輪尤相当。熾盛光法八大菩薩中観音も如意輪也。聖徳太子も如意輪観音也。サテ我、自昔為一天下泰平為万民安穩、修法花会。奉為国主如意輪真言。

慈円はここに、「隆聖」から二間観音が如意輪観音であることを聞き、金輪聖王すなわち天皇の本尊には、如意輪観音がもつともふさわしいと悟つたと述べている。以後法華法を修する際、天皇のためには如意輪真言を念誦したという。また三壇長日御修法、すなわち御代始御修法に如意輪法を修するものこのゆえであると説き、さらに聖徳太子も如意輪観音なりと記していることも注目される。

伊藤氏によつて、隆聖なる人物が西行法師の子息であり、十二世紀後半から十三世紀にかけて活躍した真言僧であることが明らかにされた。ここで注目したいのは、『続伝灯広録』巻第八に、勝覚―定海―行朝―寛幸―隆聖という系譜が記されていることで、つまり隆聖は勝覚以来の醍醐寺三宝院流を受法していたという。この史料もまた、二間観音と如意輪観音を結びつけたのが、勝覚ら三宝院流の僧であつたことを裏付けるものといえよう。

さらに注目すべきは、この隆聖および慈円が、後白河院と

も密接な関わりをもっていたことである。慈円の父藤原忠通および兄九条兼実の後白河院の近臣として知られるが、慈円自身もまたたびたび宮中に召され、後白河院のための修法を行っていた^(注五二)。さらに兼実の日記『玉葉』には、建久三年(一一九二)二月六日に後白河院の病氣平癒のための修法が行われた際、慈円が院のための愛染王法を、隆聖が後鳥羽天皇中宮任子のための仏眼法を担当したことも記される。

第四章において、後白河院は半跏思惟形の如意輪観音像や宝珠法といった如意輪観音信仰をめぐる新たな展開に深く関与していた可能性を指摘した。そして、二間観音と如意輪観音を結びつける言説もまた、後白河院の周辺で提唱されていたことになる。慈円は天台僧であることから、従来、真言側の如意輪観音信仰との関係については、ほとんど注目されてこなかった。しかし醍醐寺三宝院流を継承する隆聖、そして後白河院との関係をふまえると、慈円もまた、如意輪観音の信仰と造像をめぐる新たな展開を主導したネットワークの一員であった可能性が高い。

すなわち動乱の時代を迎えた十二世紀以降、如意輪観音と転輪聖王がとりわけ強く結びつけられた背景には、後白河院をはじめ、王権の守護や獲得を願う為政者たちの思いが深く関わっていたのではないだろうか。そうした中で、王権の象

徴としての聖徳太子や宝珠への注目も高まり、半跏思惟形の如意輪観音像や宝珠法の本尊といった日本独自の如意輪観音像の展開が生み出されたものと考ええる。

むすび

本章では、如意輪観音信仰と王権の関わりについて検討した。その結果、真言僧が天皇のために奉仕した仁寿殿観音供や夜居加持が、定賢や勝覚ら十二世紀の醍醐寺三宝院流の僧によって、如意輪観音信仰と結びつけられていることを見出した。この時期、天台宗が天皇の即位礼における如意輪法を独占しており、両宗が独自の如意輪観音信仰をもって、皇室への接近を競っていたことが窺える。

さらにこの時期、如意輪観音は王権の守護者としての聖徳太子と同体とされ、また皇子誕生や戦勝といった、王権の獲得や守護に関わる功德も期待されるようになった。これらの新たな功德もまた、醍醐寺僧を中心として生み出された可能性を指摘した。さらに理想の帝王たる転輪聖王もまた、如意輪観音と明確に結びつけられてゆく。そしてこの説もまた、醍醐寺の口伝を継承したものであることが判明した。

なお上川通夫氏は、院政期の真言密教における聖教の急増

や、門流とよばれる有力派閥の形成といった展開が、院権力との密接な結びつきを背景として成立していることに注目した^(注五三)。そして、そうした発展の過程で、特に後白河院の子息にあたる守覚が中心的な役割を担ったことを明らかにしている。

これまでみてきたように、守覚は半跏思惟形の如意輪観音像の成立や石山寺本尊タイプ如意輪観音像の伝播、宝珠法の展開にも関与していた可能性が高い。そしてその背後には、醍醐寺の如意輪観音信仰が深く関わっていたものと推察される。その一方で、為政者たちもまた、とりわけ権力の守護に関わる如意輪観音の功德に目を向け、如意輪法の実修や関係寺院への参詣を重ねていた。

すなわち院政期における天皇や法皇が如意輪観音の功德に期待し、醍醐寺が独自の如意輪観音信仰の創出によってこれに応えようとする中で、本論で論じてきたような、他国には例のない如意輪観音像の展開が生み出されたのではないだろうか。院政期において真言密教が飛躍的な発展を遂げる過程で、醍醐寺を拠点とする如意輪観音信仰が重要な役割を果たした可能性を指摘し、本論を終えたい。

- (注一) 井上一稔「奈良時代の如意輪観音信仰とその造像―石山寺像を中心」『美術研究』三三三、一九九二年。
- (注二) 西川新次「観心寺如意輪観音像について」『美術史』二二、一九五六年。田中恵「観心寺草創期の造仏と真紹」『岩手大学教育学部研究年報』四一―二、一九八二年。
- (注三) 『文徳天皇実録』嘉祥三年五月五日条。
- (注四) 井上一稔「観心寺如意輪観音像と檀林皇后の夢」(笠井昌昭編『文化史学の挑戦』思文閣出版、二〇〇五年)。
- (注五) 弥永信美「如意輪観音と女性性」『インド哲学仏教学研究』八、二〇〇一年。
- (注六) 『大正新脩大蔵経』七八―六一六上。
- (注七) 『醍醐寺根本僧正略伝』永井清一「上醍醐―聖宝・重源を中心―」『古美術』三三三号、一九七一年。
- (注八) 佐和隆研「聖宝僧正とその造像について」『南都仏教』一、一九五四年。西川新次「聖宝・会理とその周辺」『國華』八四八、一九六二年。
- (注九) 『醍醐寺新要録』五「上諸院部尊師御室」所収『密教血脈惣統記』。
- (注一〇) 津田徹英「醍醐寺如意輪観音像考」『美術史』四一―二、一九九二年。
- (注一一) 佐和隆研『醍醐寺』(講談社、一九六七年)。皿井舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織(上)」『美術研究』三九二、二〇〇七年。同「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織(中)」『美術研究』三九三、二〇〇八年。同「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織(下)」『美術研究』三九八、二〇〇九年。中野玄三「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織―皿井舞氏の論文に答える」『鳳翔学叢』七、二〇一一

- 年)。
- (注一二) 塩入良道・木内堯央編『最澄』(吉川弘文館、一九八二年)。
- (注一三) 佐伯有清「円仁」(吉川弘文館、一九八九年)。同『円珍』(吉川弘文館、一九九〇年)。
- (注一四) 濱田隆「ボストン美術館如意輪観音画像考」『ミュージアム』三八六、一九八三年。
- (注一五) 鷹巢晃「御代始三壇法とその本尊画をめぐる二、三の問題―南北朝・室町初期を中心に―」『古美術』五七、一九八〇年。なお近年、泉武夫氏が特に、御代始三壇法の本尊制作について検討を行っている(「天皇の仏画―門葉記」にみる三壇御修法の本尊制作)『平成十八〜平成二十年度科学研究費補助金研究成果報告書「奉為の造像」研究』、二〇一〇年)。
- (注一六) 普賢延命法については『覚禅抄』卷七十に「増益或息災」、『別尊雜記』卷二七に「増益」「又息災」とある。不動法については、『阿娑縛抄』卷百十六に「息災」や「降伏」が記される。なお実修の場については、仁寿殿の焼亡などによって、清凉殿や真言院に移ることもあった(斎木涼子「仁寿殿観音供と二間御本尊―天皇の私的仏事の変貌―」『史林』九一―二、二〇〇八年)。
- (注一七) 土谷恵「小野僧正仁海像の再検討」『日本古代の政治と文化』青木和夫先生還暦記念会編、吉川弘文館、一九八七年。斎木氏前掲論文。
- (注一八) 『続群書類従』第二十六輯下。
- (注一九) 『醍醐寺文書』四一―六四一。
- (注二〇) 駒沢大学大学院史学会古代史部会編『古記録叢書』翻刻為房卿記』
- (注二一) 『中右記』永長元年正月十八日条。
- (注二二) 斎木涼子氏は「被安置如意輪像」をもともと安置されていた如意輪観音像と解している(斎木氏前掲論文)。

(注二四) 随心院聖教類綜合調査団編『随心院聖教類の研究』(汲古書院、一九九五年)。

(注二五) 随心院聖教類綜合調査団編『随心院聖教類の研究』(汲古書院、一九九五年)。

(注二六) 堀裕「護持僧と天皇」(大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質(古代・中世)』思文閣出版、一九九七年)。

(注二七) 二間本尊が史料にあらわれるのは十一世紀後半以降である。なお齊木氏は、仁寿殿観音供を一時的に二間で修したことから、仁寿殿観音供の本尊と二間本尊が混同され、認識の混乱を招いたと指摘している(齊木氏前掲論文)。

(注二八) 上島享「日本中世の神観念と国土観」(『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版局、二〇一〇年)。ここに新史料である勝覚筆「護持僧作法」の紹介と全文翻刻を所載する。

(注二九) 阿部泰郎「宝珠と王権—中世王権と密教儀礼」(『岩波講座 東洋思想 十六 日本思想 二』、岩波書店、一九八九年)。

(注三〇) 上島氏前掲論文。なお類似的言説は定海筆「護持僧作法」(醍醐寺文書、前掲)にも、「最極秘密口伝云」として記されている。ここにはさらに、宝珠埋納の地と伝えられた室生山と内侍所が同体であることを観念せよとの記述がみえる。宝珠信仰の展開における室生山の位置づけを知る上でも、重要な史料といえよう。

(注三一) 齊木氏前掲論文。

(注三二) 土谷氏前掲論文。

(注三三) 堀氏前掲論文。

(注三四) 片桐洋一編『毘沙門堂本古今集注』(八木書店、一九九八年)。

(注三五) 『大正新脩大藏經』圖像部四—四八〇上。

(注三六) 『台記』康治二年十月二十二日条。

(注三七) 名畑崇「六角堂考—特に如意輪の信仰をめぐる親鸞の六角夢想に及ぶ—」(『大谷史学』十、一九六三年)。橋本正俊「六

角堂縁起の展開と太子伝」(『巡礼記研究』三、二〇〇六年)。

(注三八) 『大正新脩大藏經』圖像部九—一九六上。

(注三九) 現在の六角堂本尊は秘仏であり、二〇〇八年に公開された際に実見したが、通例の六臂像であった。

(注四〇) 『台記』久安六年二月十九—二十五日条。

(注四一) 『大正新脩大藏經』圖像部四—四八〇中。

(注四二) 山本ひろ子「幼主と『玉女』—中世王権の暗闇から—」(『月刊百科』三一—三、一九八八年)。

(注四三) 小泉恵英「ガンダーラの仏伝美術と転輪聖王」(宮治昭編『ガンダーラ美術とバミヤン遺跡展』静岡新聞社・静岡放送事業局、二〇〇七年)。

(注四四) 稲城正己「八—九世紀の経典書写と転輪聖王観」(元興寺文化財研究所・元興寺文化財研究所民俗文化財保存会編『元興寺文化財研究所 創立四十周年記念論文集』クパプロ、二〇〇七年)。

(注四五) 工藤美和子「忠を以て君に事へ、信を以て仏に帰す—一〇—一—世紀の願文と転輪聖王」(『平安期の願文と仏教的世界観』佛敎大学、二〇〇八年)。

(注四六) 松下隆章「摩尼宝珠曼荼羅に就いて」(『美術研究』一三一、一九四三年)。真鍋俊照「空海請来梵字法身偈と摩尼宝珠曼荼羅」(『仏教芸術』一二二、一九七九年)。

(注四七) 天台宗典編纂所編『続天台宗全書 密教三』(春秋社、一九九〇年)。

(注四八) なお慈円は『夢想記』において、国王の三種の神器のうち神璽は玉女であり、また皇后の体であり、王と皇后の行為は清浄な玉女との交わりであるから罪はないと説いている。

(注四九) 如意輪観音と転輪聖王を結びつけるものとして、宝珠もまた、転輪聖王の七宝のひとつであることも留意される。

(注五〇) 『大正新脩大藏經』七六一—五一一下。

(注五二) 天台宗典編纂所編『続天台宗全書 密教三』(春秋社、一九九〇年)。

(注五三) 多賀宗隼『慈円の研究』(吉川弘文館、一九八〇年)。鈴木正道『慈円研究序説』(桜楓社、一九九三年)。

(注五三) 上川通夫「院政と真言密教」(『日本中世仏教形成史論』校倉書房、二〇〇七年)。

はじめに

院政期の日本において、千、万という単位の多数の小塔を制作し、これを供養することが流行した。なかでも後白河院は特に熱心に小塔供養を行ったことで知られ、従来、そこに期待された功德や阿育王の八万四千塔建立説話との関連等について考察がなされてきた。本論は、特に後白河院政期における小塔供養の特徴、および院の人的ネットワークに注目し、あらためて検討を加えるものである。

一 後白河院政期における小塔供養について

養和元年（一一八一）九月、後白河院は九条兼実に対して「任阿育王例、被造八万四千基塔如何」、つまり阿育王の八

万四千塔建立の故事に倣った造塔を行うことについて、意見を求めている（注一）。そして同年十一月、蓮華王院において五寸の小塔八万四千基の供養が実施される運びとなった（注二）。塔の形態は不明であるが、各々の塔には「宝篋印陀羅尼一反」が籠められていたという。

つづいて文治元年（一一八五）にも後白河院を願主とした八万四千塔供養が行われた。この時の供養については、皿井舞氏が『覚禅抄』および中山忠親の日記『山塊記』の記事等をもとに、詳細な検討を行っている（注三）。『覚禅抄』造塔法下には、この八万四千塔供養に際して、五月二十三日に勧修寺にあてた院宣が記され、「五輪塔八万四千基」の造立を命じ、これが「阿育大王発濫觴」、すなわち阿育王に端を発するものと述べている。また塔の高さを九寸とし、中に宝篋印陀羅尼経一卷を籠めるべきことも記される。なお裏書には後白河院が「権僧正勝賢」、すなわち醍醐寺座主勝賢（一一三

八（一一九六）に対して八万四千塔供養を命じた院宣もみえる。ここに「国家安穩天下泰平事、各々凝信心、面々可致祈念、兼又保元以後戰場殞命之輩、同廻業罪之勝因、可救彼亡魂之苦難也者、謹所請如件」との記述がみえることから、従来この供養の目的について、国家の安穩を祈るとともに、保元の乱以後治承・寿永の乱に至る戦乱の中で亡くなった人々の霊を慰めるものであったと考えられてきた^{（注四）}。

また『山塊記』文治元年八月二十三日条にも、この時の八万四千塔の一部と思われる五輪塔一万基が、長講堂（寿永二（一一八三）～三年頃に後白河院が創建）において供養されたとの記事がみえ、その目的が「為滅追罰之間罪障」、つまり罪障の消滅にあったことが記される。

先行研究においては、以上、養和元年および文治元年の二例が、後白河院政期における小塔供養として注目されてきた。

さらに、ここで後白河院政期における小塔供養として注目したいのは、『御室相承記』五「紫金台寺御室」に載せる事例である^{（注五）}。紫金台寺御室、すなわち覚性法親王（一一二九～一一六九）が仁和寺御室であった嘉応元年（一一六九）三月、紫金台寺において「勝憲」が導師となり、八万四千基の泥塔供養が行われたという。この時の願主については不明であるが、嘉応元年は後白河院政期にあたり、覚性は後白河

院の実弟である。また「導師勝憲」は、院の近臣僧であり文治元年の小塔供養に関わった醍醐寺僧勝賢の初名であり、この時の供養にも後白河院が関与していた可能性が指摘できよう。

以上、嘉応元年の例も含め、後白河院政期における計三度の小塔供養にあらためて目を向けると、八万四千という数が強く意識されていることに気づく。史料上、日本における八万四千塔供養の初例は、永延二年（九八八）慈徳寺における供養であるが、その後、十世紀、十一世紀を通じて小塔供養そのものは盛んに行われるものの、いずれも一万、二万、一万五千、十万、三十万といった数の造塔であり、八万四千塔制作の記録はみられない^{（注六）}。ところが前述のように、嘉応元年に至って再び八万四千塔が供養され、後白河院政期を通じて八万四千という数が維持される。以後、十三世紀から十五世紀を通じて八万四千の造塔が主流となってゆく。

また、養和元年および文治元年の八万四千塔供養においては、「任阿育王例」（『玉葉』）、「阿育大王発濫觴」（『覚禅鈔』）のように、阿育王との関わりが強調されている。特に『玉葉』の記事は、日本における小塔供養について、阿育王の故事に倣ったものと明記した初例であるという^{（注七）}。この点からも、後白河院政期の造塔において、阿育王の八万四千塔との

関わりが特に強く意識されていたことが窺えよう。

二 後白河院の阿育王信仰と王権

前述のように、従来の研究では、後白河院政期に戦乱が相次いでいたことから、阿育王が自らの罪を懺悔して造塔を行ったこと(注八)に倣い、罪障消滅や慰霊を目的として八万四千塔の供養を行ったものと考えられてきた(注九)。

ここで後白河院の造塔の意図について、少し視点を変えて検討を加えたい。日本における阿育王関係説話の展開に目を向けると、後白河院政期にあたる十二世紀後半の『今昔物語集』に注目すべき記述があらわれる。巻第四「阿育王、后を殺して八万四千の塔を立てたる語 第三」には「今昔、天竺に仏涅槃に入給て一百年の後、鉄輪聖王出給へり。阿育王と申す。」とあり、阿育王が鉄輪聖王、すなわち古代インドの理想的な帝王である転輪聖王として登場する。

これ以前の『三宝絵』(九八四年成立)、『往生要集』(九八五年成立)、『栄華物語』(十一世紀成立)にも阿育王による僧の弾圧や開悟といった阿育王関係説話を収めるが、阿育王と転輪聖王を重ねるような記述はみられない。つまり十二世

紀後半の日本において、理想的な帝王としての阿育王像が語られるようになり、後白河院自身もまた、そのような阿育王イメージを有していたことが想定できる。

近年、西山美香氏が鎌倉將軍の八万四千塔供養に注目し、これが自らを阿育王になぞらえた王権の象徴であり、王権の護持を目的としたものであったことを指摘した(注一〇)。後白河院政期の造塔において阿育王の八万四千塔が特に強く意識されていること、および同時期の説話の展開をふまえると、度重なる政変の中で常に危機的状況にさらされていた後白河院もまた、自らを理想的な帝王としての阿育王になぞらえ、王権の護持を願って八万四千塔の供養を行ったとみることができのではないだろうか。

なお第五章で論じたように、この時期、如意輪観音もまた理想の帝王たる転輪聖王と結びつけられてゆく。『法華別帖』において、転輪聖王たる国主には如意輪観音がふさわしいと説いた慈円は、後白河院の身近にいた僧であった。同じ時期、聖徳太子もまた王権の守護者として為政者の信仰を集めていたが、第四章で述べた通り、聖徳太子と如意輪観音の結びつきもまた、後白河院の周辺の人物によって主導された可能性が高い。後白河院政期に小塔供養を行った覚性および勝賢が、この聖徳太子・如意輪観音団体信仰や宝珠法と深く関わ

っていたことも注目されよう。そして度重なる政変や戦乱の中で、後白河院は常に王権の危機にさらされていた。

これらのことをふまえると、十二世紀後半に転輪聖王としての阿育王イメージが注目され、阿育王の八万四千塔建立に做った小塔供養が行われた背景には、やはり王権を護持したいという後白河院の願いが関わっていたのではないだろうか。ただし史料が不足しているため、現時点ではこれらの可能性を指摘するにとどめ、今後の課題としたい。

三 後白河院の阿育王信仰と重源

それではなぜこの時期の日本において、新たな阿育王イメージがあらわれたのであろうか。

嘉応元年は、約一八〇年ぶりに八万四千という数の小塔供養が行われた年であるが、そのまさに前年にあたる仁安三年（一一六八）、浙江省寧波の阿育王山参詣を経て帰朝した人物がいる。東大寺復興の中心人物として名高い重源（一一二一～一二〇六）である。仁安二年から翌年にかけて宋に渡った重源は、寧波の阿育王寺を参詣したという^{（注一〇）}。寿永二年（一一八三）正月、重源は九条兼実の邸に招かれ、阿育王寺の阿育王塔および納入された仏舎利の現した神変につい

て語っている^{（注一一）}。また阿育王寺の舍利殿のために周防国の材木を寄進し、その修理のために柱四本と虹梁一支を渡し、あわせて自身の木造の肖像彫刻および肖像画を舍利殿に安置したという^{（注一二）}。

すなわち後白河院政期に至って日本における阿育王関係説話が新たな展開を迎えた背景で、この時期に阿育王寺と深い関わりをもった重源が重要な役割を果たしたことも想定されよう。

なお重源は後白河院と密接な関係にあったことでも知られる。平重衡の焼き討ちによって東大寺が灰燼に帰した際、後白河院は重源に東大寺造営勧進の宣旨を下した。後白河院が自ら大仏開眼を行ったのも重源の勧めによるものであったとの伝えがあり^{（注一四）}、従来、特に東大寺復興における両者の交流が注目されてきた^{（注一五）}。しかるに近年、南宋の『攻媿集』巻一一〇所収「育王山妙智禪師塔銘」に「日本国王」が舍利殿を建立したとの記述がみえること、貿易を介した後白河院の南宋との活発な交渉などをふまえ、前述の重源による阿育王山の舍利殿建立が、東大寺再建に先立つ時期に後白河院の意向、あるいは協力によって実現したとの説が有力となっている^{（注一六）}。もし重源と後白河院の交流の契機が、阿育王山舍利殿建立にあったとすれば、後白河院の熱心な八万

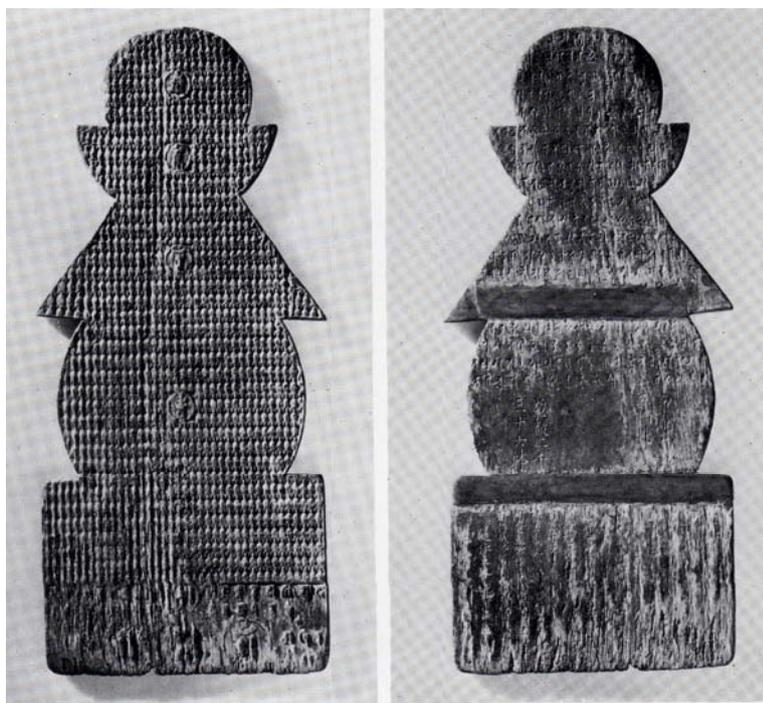


図 板彫五輪塔 (三重・新大仏寺蔵)

四千塔供養が重源の影響によるものであったことが想定できる。

さらに最近、後白河院と平清盛による宋・明州との交流の状況に着目した渡邊誠氏が、舍利殿の建立を嘉応・承安年間（一一六九〜七五）頃とする説を提示しており（注一七）、嘉応元年の小塔供養についても、阿育王山参詣から帰朝したばかりの重源の進言によって、後白河院の周辺で実施された可能性が

高

まる。

またここで特に注目したいのは、文治元年の造塔において五輪塔という形式が採用されている点である。五輪塔とは、万物を構成する五要素である地・水・火・風・空、すなわち五大を表す五つの輪の形象（方形、円形、三角形、半月形、宝珠形）を組み合わせた塔である。五輪塔の起源については不明な点が多いが、日本において平安時代後期以降の作例が確認されている（注一八）。養和元年以前の小塔供養に五輪塔が用いられた形跡はなく、つまり後白河院政期に至って初めて、阿育王塔が五輪塔と結びつけられたのであろう。

重要なのは、重源がとりわけ五輪塔と深い関わりをもっていたことである。重源が奉納した仏舎利の多くが、金銅製または水晶製の五輪塔に納められている（注一九）。重源の五輪塔は火輪（笠部）が三角錐形である点に特徴があるが、「三角五輪」と称されるこの形式は重源関係の遺品以外に例がないことから、重源自身が考案したものとも考えられている（注二〇）。すなわち後白河院周辺において、阿育王を意識した小塔供養と五輪塔が結びつけられた背景には、重源が密接に関与していたのではないだろうか。

なお重源が東大寺の伊賀別所として造営した新大仏寺（三重県）には、板彫の五輪塔が現存し、地輪裏の銘文によって

重源が建仁三年（一一〇三）に造った「印仏印塔」であることが知られる（注二）（図）。杉の一枚から刻みだした五輪塔の表全面に小仏を浮彫にするが、注目したいのは、その裏面に梵字の宝篋印陀羅尼経が刻まれている点である。

宝篋印陀羅尼経は、呉越王銭弘俶が阿育王の故事に倣って金銅製の八万四千塔を造立した際、塔内に納置した經典として知られる。日本へは天曆年間（九四七〜九五七）の入唐僧日延が銭弘俶塔と共に請来して以後、宝篋印陀羅尼経を書写し、あるいはこれを納めた塔や仏像を礼拝、造立することで、罪障を消滅し、死後の苦を免れ、現世で長寿を得ることができるとして、広く信仰を集めた。宝篋印経を納めた銭弘俶塔は日本における阿育王塔イメージの祖形となっている（注三）。また、『覚禅鈔』造塔法下には「木形経云、八万四千基内可造立之、中宝篋印陀羅尼経一卷」とあり、「木形経」なる經典を引いて、八万四千塔に宝篋印陀羅尼経を納めるべきことが記されている。

皿井舞氏はこの板彫五輪塔に注目し、重源が熱心な阿育王塔信仰を有していたこと、そして彼の周辺で宝篋印陀羅尼経が塔と密接に結びついたことを示す遺品とみている（注三）。さらにここで、この作例が五輪塔という形式であったことに留意したい。つまり宝篋印陀羅尼経を介して、阿育王塔が

五輪塔と結ばれていることになる。

すなわち後白河院政期において八万四千塔供養に五輪塔が採用され、五輪塔という新たな「阿育王塔」が生み出された背景に、重源が深く関わっていたことを示唆する作例とみることが出来るのではないだろうか。

なお第三章で述べた通り、五輪塔は醍醐寺三宝院流において、如意輪観音の象徴とされていた。さらに、東大寺大仏復興の際、重源は三宝院流の勝賢に宝珠の造作を依頼し、これを大仏の胎内に納めている。宝珠もまた、三宝院流における如意輪観音の象徴として重要な機能を担っていた。重源もまた醍醐寺で出家した僧であり、これらの五輪塔や宝珠と如意輪観音信仰の関わりに、あらためて目を向ける必要があると考える。

むすび

本論では、後白河院政期における小塔供養にあらためて注目し、八万四千という数、および阿育王との関わりが特に強調されていることを見出した。また、後白河院政期に小塔供養を行った覚性および勝賢が、半跏思惟形の如意輪観音像や宝珠法に関わる人物であったことにも注目した。すなわちこ

の時期にあらわれた如意輪観音像の新たな展開や、阿育王を意欲した小塔供養が、ともに後白河院の王権護持と深く関わっていた可能性を指摘した。

さらに、後白河院の身近にいた重源が醍醐寺僧であり、三宝院流の勝賢とも密接な交流関係にあったことをふまえると、重源に関わる五輪塔や宝珠もまた、如意輪観音信仰との関わりが注目される。

後白河院の仏教信仰にはいまだ不明な点が多く、院および周辺の僧たちの阿育王信仰や如意輪観音信仰との関わりについて、今後さらに詳しく追究してゆきたい。

注

(注一) 『玉葉』 卷第三六養和元年九月条。

(注二) 『玉葉』 卷第三六養和元年十一月条。

(注三) 皿井舞「勸進と結縁の思想的背景―『覚禅鈔』造塔法を手掛かりとして―」、『覚禅鈔の研究』覚禅鈔研究会編、親王院堯榮文庫、二〇〇四年。

(注四) 日野一郎「我が国における小塔供養の推移」、『史観』第十七冊、一九三八年。追塩千尋「阿育王伝説の展開(2)―中世―」、『日本中世の説話と仏教』和泉書院、一九九九年。

(注五) 『仁和寺史料 寺誌編一』(奈良国立文化財研究所編、一九六四年)。

(注六) 日野氏前掲論文、追塩氏前掲論文。

(注七) 追塩氏によれば、中世の八万四千塔供養において阿育王塔と明記するのは、養和元年、建久八年(一一九七)、建保四年(一二一六)の三例のみであるという(追塩氏前掲論文、一〇二頁)。

(注八) 『阿育王伝』、『大正新脩大藏経』五〇―一〇二下―一〇二中)、『阿育王経』、『大正新脩大藏経』五〇―一三四下―一三五上)、『釈迦譜』、『大正新脩大藏経』五〇―七八下―七九上)。

(注九) 日野氏前掲論文、追塩氏前掲論文。

(注一〇) 西山美香「鎌倉將軍の八万四千塔供養と育王山信仰」、『金澤文庫研究』第三一六号、二〇〇六年)。

(注一一) 『元亨釈書』卷第十四、『本朝高僧伝』卷第六五など。小林剛『俊乗坊重源史料集成』(吉川弘文館、一九六五年、一七―二〇頁)。

(注一二) 『玉葉』 卷第三八寿永二年正月条。

(注一三) 『南無阿弥陀仏作善集』、『東大寺造立供養記』

(注一四) 『山塊記』 文治元年八月条。

(注一五) 堀池春峰「後白河法皇と重源上人(上)・(下)」、『岡山春秋』

四一・四二、一九五六年)。小原仁「東大寺の復興と勸進」(中尾堯編『旅の勸進聖 重源』、吉川弘文館、二〇〇四年)。

(注一六) 堀池春峰「俊乗房重源上人と東大寺復興―重源と源頼朝との関係を通して―」(『南都仏教史の研究 上 東大寺編』法蔵館、一九八〇年、初出は一九五五年)。藤田明良「南都の『唐人』―東アジア海域から中世日本を見る―」(『奈良歴史研究』五四、二〇〇〇年)。横内裕人「重源における宋文化―日本仏教再生の試み―」(『アジア遊学』一二二、二〇〇九年)。渡邊誠「後白河法皇の阿育王山舍利殿建立と重源・栄西」(『日本史研究』五七九、二〇一〇年)。なお近年、後白河院による養和元年と文治五年の八万四千塔供養、および後鳥羽院による建仁三年の八万四千塔供養が、東大寺復興造営の供養と歩調を合わせるかのように行われた点が注目されている(上川通夫「末法思想と中世の『日本国』」シリーズ 歴史学の現在 再生する終末思想』歴史学研究会編、青木書店、二〇〇〇年。皿井氏前掲論文)。

(注一七) 渡邊氏前掲論文。

(注一八) 石田茂作「五輪塔」(『日本仏塔』講談社、一九六九年)。薮田嘉一郎編『五輪塔の起源』(綜芸舎、一九五八年)。石田尚豊「三角五輪塔考」(『MUSEUM』一九五七年四月号)。

(注一九) 『南無阿弥陀仏作善集』。

(注二〇) 石田氏前掲論文。緒方啓介「仏像と仏舎利の塔形」(中尾堯編『旅の勸進聖 重源』吉川弘文館、二〇〇四年)。内藤栄「重源の舍利信仰と三角五輪塔の起源」(『舍利荘嚴美術の研究』青史出版、二〇一〇年)。

(注二一) 伊東史朗「板彫像の再検討」(『佛教芸術』一五〇、一九八三年)。

(注二二) 清水紀枝「注五七 日本の阿育王塔」(『美術史料として読む』集神州三宝感通録』―釈読と研究―(四)『奈良美術研究』十一、

二〇一一年)。

(注二三) 皿井氏前掲論文。なお皿井氏は「木形経」について、「この経典の名称については管見の限りでは見あたらず、転写時の写し間違いかとも推測されるが、不明」としている。

結章 今後の課題と展望

大同元年（八〇六）八月、弘法大師空海は唐より帰朝し、持ち帰った品々を記載した目録を朝廷に献上した。空海はこの『御請来目録』において「密藏深玄にして翰墨に載せがたし。さらに凶画を仮りて悟らざるに開示す」、すなわち密教の教えは言葉よりも凶画によって伝えることができるという。以後、真言密教の発展において、ほとけの姿をうつした仏像や画像が重要な役割を果たしてきた。

『御請来目録』には『観自在菩薩如意輪瑜伽』・『観自在菩薩如意輪念誦儀軌』という如意輪観音に関わる二本の經典の名がみえる。また同目録の「仏像等」の項目に挙げた胎藏界曼荼羅には、六臂の如意輪観音像が描かれていた。以後、如意輪観音は空海の弟子たちによって特別に重んじられ、六臂如意輪観音像の造像は真言宗と皇室の接点ともなった。

やがて如意輪観音の像容は日本独自の展開を遂げ、第一章・第二章でみたように、石山寺本尊タイプの如意輪観音像が生み出され、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像もまた如意輪観音と結びつけられてゆく。さらに第三章で述べた通り、修法

の本尊として、如意輪観音の象徴としての宝珠をあらわした舍利容器や厨子がさかんに制作された。

本論ではこれら如意輪観音像の新たな展開にあらためて目を向け、その具体的な時期や信仰の様相、これを主導した人的ネットワーク、そして仏教界の動向や王権との関わりについて考察をすすめてきた。

なおここで、如意輪観音像をめぐる日本独自の展開について、本論で得た結果をもとに、大きく三つの段階に分類を試みたい。

I 萌芽期（十世紀頃）

施無畏印・与願印を結び片足を踏み下げた石山寺本尊「観音」像が、醍醐寺僧淳祐の進出を契機として「如意輪観音」とよび変えられた。これが日本で最初に成立した、通例と異なる形式の如意輪観音像とみられる。よって淳祐の活躍した十世紀を、日本独自の展開の萌芽期と位置付けたい。なお醍

醐寺には、六臂像でありながら片足を踏み下げる珍しい形式の如意輪観音像が伝来する。この像もまた十世紀初めの作と推定されており、萌芽期における如意輪観音像の展開と密接に関わっていたものと推測される。

II 発展期（十世紀末～十二世紀後半頃）

Iの石山寺本尊と同じ形式の東大寺大仏左脇侍が、十世紀末から十二世紀の間に観音から如意輪観音へとよび変えられた。この時期、醍醐寺の法流、あるいは淳祐と密接に関わる真言僧（齋然・深覚・仁海・濟慶・深観ら）が相次いで東大寺別当に就任しており、石山寺で成立したIの如意輪観音像が東大寺に伝播した背景に、彼らが深く関わっていたことが推察される。さらに十二世紀以降、淳祐を祖とする石山流の僧（恵什・守覚・覚禪）が編纂した図像集に、石山寺本尊タイプの如意輪観音像が収録された。

つづいて十二世紀後半、真言僧覚性の四天王寺への進出を契機として、聖徳太子ゆかりの半跏思惟像である四天王寺金堂本尊および広隆寺泣き弥勒が如意輪観音と称される。太子と如意輪観音を同体とみる信仰が、覚性・守覚・心覚・寛敏らの周辺で成立していた。この半跏思惟形の如意輪観音像を

めぐる人的ネットワークもまた、醍醐寺の法流と密接に関わっていた。

また十一世紀から十二世紀にかけて、醍醐寺の周辺で如意輪観音の象徴としての宝珠が注目され、様々な宝珠法が生み出された。特に醍醐寺三宝院流（定賢、勝覚、勝賢、聖賢ら）において如意輪観音と宝珠の結びつきが重視され、「三尊帳」（もしくはその源流となるもの）や如意輪宝珠法などが創出され、宝珠を如意輪観音の象徴としてあらわした舍利容器や厨子が制作された。さらに十二世紀以降、これら三宝院流の僧を中心として、宮中の仁寿殿観音供や夜居加持が、如意輪観音信仰と強く結びつけられてゆく。

すなわちこの時期、石山寺本尊タイプの如意輪観音像の東大寺への伝播や、半跏思惟形の如意輪観音像の登場、如意輪観音の象徴としての宝珠の表現など、新たな展開が次々にあらわれた。よってこれを、如意輪観音像をめぐる展開の発展期とみたい。

III 継承期（十三世紀～）

十三世紀に活躍した叡尊や道範は、Ⅱで成立した聖徳太子と如意輪観音を同体とみる信仰を継承した。そして、叡尊と関わりの深い信如、澄禅、顕真の影響下にあった中宮寺本尊や広隆寺桂宮院、法隆寺聖霊院の半跏思惟像が如意輪観音と称される。さらに天台僧の慈円もまた、醍醐寺三宝院流の隆聖から、聖徳太子・如意輪観音同体信仰などを継承した。また石山寺や六角堂の如意輪観音が聖徳太子信仰と明確に結びつき、多くの参詣を集めたのもこの時期である。すなわち醍醐寺を中心として生み出された如意輪観音信仰は、十三世紀以降、真言宗内にとどまらず、広く天台宗や在家の信者にまで普及したことが窺えよう。

以上、あくまでも現時点でつかみ得た大まかな流れであるが、これらの展開を萌芽期・発展期・継承期として捉えた。これにより、平安・鎌倉時代における醍醐寺が、如意輪観音信仰の拠点であっただけでなく、如意輪観音の像容に関わる新たな展開をも主導していたことが判明した。

さらに、石山寺・東大寺・仁和寺・聖徳太子関係寺院（四天王寺・広隆寺・法隆寺・中宮寺・六角堂）、そしておそらく岡寺や室生寺をも含めた寺院が、複雑な影響関係をもちながら、醍醐寺の如意輪観音信仰を軸としたネットワークを形

成していたことが窺える。

なお名畑崇氏により、後期摂関期から院政期にかけて、諸寺院が本尊の靈験を語って靈場化を促進し、靈場巡拝がさかんとなり、それに対応して四天王寺、六角堂、広隆寺、石山寺・法隆寺など太子ゆかりの寺院が靈場化を進めていたことが指摘されている（注二）。これらの寺院が、本論で提示した寺院ネットワークと重なり、時期的にも一致することが注目されよう。真言宗における聖徳太子と如意輪観音を結びつける信仰の創出は、当時太子信仰によって隆盛を極めていた天台宗への対抗という意味もあつたかもしれないが、寺院側もまた、靈場化を促進するための新たな太子信仰を求めていたものと推測される。さらに十一世紀以降、西国三十三所観音靈場への巡礼も盛んとなり、特に石山寺や六角堂、岡寺は如意輪観音を札所の本尊として参詣を集めていた。これら寺院の靈場化との関連についても、さらなる課題としたい。

また根立研介氏により、院政期の法会や新造した寺院の本尊として、あえて靈験ある古仏が用いられたことが明らかにされている（注三）。石山寺本尊や東大寺大仏左脇侍、四天王寺金堂本尊、広隆寺泣き弥勒など、その尊名を如意輪観音とよび変えられた像もまた、奈良時代に造像された古仏であった。古仏への再注目という点で、根立氏の指摘する院政期の

動向と一致するが、これらの像については、単なる注目にとどまらず、如意輪観音という新たな意味づけがなされた点も特筆すべきであると考ええる。

なおとりわけ院政期は、真言宗内が小野流と広沢流、さらに野沢十二流、そしてそこからより細かい法流へと分派が進んだ時代として知られる。本論で取り上げた覚性や守覚は広沢流の中核となる仁和寺の門跡であり、従来、小野流の中心寺院である醍醐寺との関わりについては、あまり注目されてこなかった。さらに叡尊もまた、真言律宗の開祖としての印象が強く、醍醐寺僧としての活動についてはほとんど論じられていない。慈円にいたっては、その著作に聖徳太子・如意輪観音同体説がみえるものの、天台僧であることから、これが醍醐寺三宝院流の口伝を継承したものであったことは、重要視されてこなかった。すなわち本論で見出したのは、法流や宗派を超えた新たな人的ネットワークの存在であった。

そして第四章・第五章において、このような、いわば特殊なネットワークが形成された背景に、後白河院をはじめとする為政者の意向が密接に関わっていたことを指摘した。近年、歴史学の分野で、後白河院の子息、法親王としての守覚の位置づけや、院の近臣僧としての勝賢の活動への注目が高まっている。本論で取り上げた半跏思惟形の如意輪観音像や宝珠

をあらわした仏具は、王権の求めに応える形で生み出された可能性が高い。すなわち院政期の真言密教が王権と結びつきながら飛躍的な発展を遂げる過程で、醍醐寺を拠点として生み出された日本独自の如意輪観音像が重要な役割を担ったことが推察される。

日本における真言密教の展開において、仏像や仏画、仏具等、いわゆる仏教美術作品が担った機能について、今後さらに詳しく追究してゆきたい。

注

- (注一) 名畑崇 「太子観の展開とその構造」『聖徳太子と飛鳥仏教』田村圓澄・川岸宏教編、吉川弘文館、一九八五年。
- (注二) 根立研介 「附論 後白河・後鳥羽院政期の古仏の使用をめぐって」『日本中世の仏師と社会』塙書房、二〇〇六年。

参考文献一覧

論文・単行書

- 赤松俊秀「南北朝内乱と未来記について―四天王寺御手印縁起・慈鎮和尚夢想記―」『鎌倉仏教の研究』平楽寺書店、一九五七年。
- 綾村宏「創建とあゆみ」『石山寺の信仰と歴史』鷲尾遍隆監修・綾村宏編集、思文閣出版、二〇〇八年。
- 弥永信美「如意輪観音と女性性」『インド哲学仏教学研究』八、二〇〇一年。
- 阿部泰郎「宝珠と王権―中世王権と密教儀礼」『岩波講座 東洋思想 十六 日本思想 二』、岩波書店、一九八九年。
- 阿部泰郎「守覚法親王における文献学」(阿部泰郎・山崎誠編『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』勉誠社、一九九八年)。
- 阿部泰郎「守覚法親王と院政期の仏教文化」(速水侑編『院政期の仏教』吉川弘文館、一九九八年)。
- 阿部泰郎「文観著作聖教の再発見―三尊合行法のテクスト布置とその位相」『比較人文学年報』六、二〇〇九年。
- 泉武夫『日本の美術三八〇 虚空蔵菩薩像』(至文堂、一九九八年)。
- 泉武夫「愛染明王と千体画卷」『仏画の尊容表現』中央公論美術出版、二〇一〇年。
- 泉武夫氏「天皇の仏画―『門葉記』にみる三壇御修法の本尊制作」『平成十八〜平成二十年度科学研究費補助金研究成果報告書「奉為の造像」研究』(二〇一〇年)。
- 猪川和子「石山寺本尊観音菩薩像」『美術研究』二七二、一九七一年。
- 猪川和子「岡寺如意輪観音像」『MUSEUM』三三〇、一九七七年。
- 石田茂作『聖徳太子全集第五卷 太子関係芸術』(龍吟社、一九四三年)。
- 石松日奈子「弥勒坐勢研究―施無畏印・倚坐の菩薩像を中心に」『MUSEUM』五〇二、一九九三年。
- 井上一稔『日本の美術 三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』(至文堂、一九九二年)。
- 井上一稔「奈良時代の如意輪観音信仰とその造像―石山寺像を中心に」『美術研究』三三三、一九九二年。
- 井上一稔「新出・石山寺木造如意輪観音坐像をめぐる」『博物館学年報』三五、二〇〇三年。

- 井上一稔「観心寺如意輪観音像と檀林皇后の夢」(笠井昌昭編『文化史学の挑戦』思文閣出版、二〇〇五年)。
- 井上正「中宮寺半跏思惟像について」(『國華』八一九、一九六〇年)。
- 井上光貞『新訂日本浄土教成立史の研究』(山川出版社、一九五六年)。
- 稲木吉一「聖徳太子と初期仏像観」(『造形と文化』雄山閣、二〇〇〇年)。
- 稲城正己「八〇九世紀の經典書写と転輪聖王観」(元興寺文化財研究所民俗文化財保存会編『元興寺文化財研究所創立四十周年記念論文集』クパプロ、二〇〇七年)。
- 稲次保夫「中宮寺半跏思惟像の様式に関する一考察」(『愛媛大学教育学部紀要 第二部 人文・社会科学』二四、一九九二年)。
- 林南壽『広隆寺史の研究』(中央公論美術出版、二〇〇三年)。
- 岩田茂樹「石山寺の彫像―本尊二臂丈六観音像を中心に―」(『観音のみてら 石山寺』奈良国立博物館、二〇〇二年)。
- 岩田茂樹「新発見の銅造仏像(四軀)と納入厨子銘文」(『石山寺本尊如意輪観音像内納入品』奈良国立博物館、二〇〇二年)。
- 岩本裕「如意輪観音の原名について」(『足利惇氏博士喜寿記念 オリエンント学インド学論集』国書刊行会、一九七八年)。
- 上島享「日本中世の神観念と国土観」(『日本中世社会の形成と王権』名古屋大学出版局、二〇一〇年)。
- 内田啓一『文観房弘真と美術』(法蔵館、二〇〇六年)。
- 内田啓一「奈良国立博物館蔵神泉苑請雨経法道場図について」(『戒律文化』五、二〇〇七年)。
- 宇野茂樹「石山寺本尊考」(『文化史研究』一七、一九六五年)。
- 追塩千尋「古代・中世における太子信仰の性格」(『史流』一四、一九七三年)。
- 追塩千尋「叡尊をめぐる諸問題」(『中世の南都仏教』吉川弘文館、一九九五年)。
- 追塩千尋「初期叡尊の宗教的環境」(『中世の南都仏教』吉川弘文館、一九九五年)。
- 追塩千尋「平安・鎌倉期広隆寺の諸相」(『日本古代の祭祀と仏教』吉川弘文館、一九九五年)。
- 大橋一章「中宮寺考」(『美術史研究』一一、一九七四年)。
- 大橋一章「四天王寺の発願と造営について」(『風土と文化』一、二〇〇〇年)。
- 大橋一章「中宮寺の創立について」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要第三分冊』四六、二〇〇〇年)。
- 小野玄妙「東大寺盧舎那仏の右脇侍虚空蔵菩薩私考」(『考古学雑誌』六一四、一九一五年)。

- 景山春樹『舍利信仰―その研究と史料』（東京美術、一九八六年）。
- 上川通夫「如意宝珠法の成立」『日本中世仏教史料論』（吉川弘文館、二〇〇八年）。
- 上川通夫「院政と真言密教」『日本中世仏教形成史論』校倉書房、二〇〇七年）。
- 川岸宏教「中世初期の四天王寺」『IBU四天王寺国際仏教大学紀要』文学部三二号・短期大学部四〇号、一九九九年）。
- 川岸宏教「四天王寺別当としての慈円―御手印縁起信仰の展開―」『四天王寺学園女子短期大学研究紀要』六、一九六四年）。
- 川岸宏教「叡尊と四天王寺―御手印縁起信仰の展開―」『四天王寺学園女子短期大学研究紀要』七、一九六五年）。
- 川岸宏教「釈迦如来転法輪所・当極楽土東門中心」『日本仏教学会年報』四二、一九七七年、平楽寺書店）。
- 川岸宏教「中世初期の四天王寺」『IBU四天王寺国際仏教大学紀要』文学部三二、短期大学部四〇、一九九九年）。
- 河田貞『日本の美術 二八〇 仏舍利と経の荘嚴』（至文堂、一九八九年）。
- 菊地大樹「後白河院政期の王権と持経者」『中世仏教の原形と展開』吉川弘文館、二〇〇七年）。
- 木村博「中世における密教文化―所謂「密教化」の問題と「法隆寺」―」『歴史教育』一五―八、一九六七年）。
- 清滝淑夫「広隆寺の成立に就いて」『南都仏教』一四、一九六三年）。
- 工藤美和子「忠を以て君に事へ、信を以て仏に帰す―一〇―一世紀の願文と転輪聖王」『平安期の願文と仏教的世界観』佛教大学、二〇〇八年）。
- 小泉恵英「ガンダーラの仏伝美術と転輪聖王」（宮治昭編『ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡展』静岡新聞社・静岡放送事業局、二〇〇七年）。
- 小島裕子「院政期における愛染王御修法の展開」『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』平成九年度文部省科学研究費補助金「研究 究成果公開促進費」助成出版、一九九八年）。
- 紺野敏文「請求「本様」の写しと仏師（二）―「太子御形」半跏思惟像とその展開（上）―」『佛教芸術』二五六、二〇〇一年）。
- 紺野敏文「虚空蔵菩薩像の成立（下）―東大寺大仏脇侍像と講堂像をめぐる―」『佛教芸術』二三二、一九九七年）。
- 齋木涼子「仁寿殿観音供と二間御本尊―天皇の私的仏事の変貌―」『史林』九一―二、二〇〇八年）。
- 佐伯有清『円仁』（吉川弘文館、一九八九年）。
- 佐伯有清『円珍』（吉川弘文館、一九九〇年）。
- 佐伯有清『聖宝』（吉川弘文館、一九九一年）。

- 佐々木正則「三千院救世観音像内納入願文―願主中臣行範に対する疑義ならびに前備中守中原朝臣行範について―」（『佛教藝術』一四三、一九八二年）。
- 皿井舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織（上）」（『美術研究』三九二、二〇〇七年）。
- 皿井舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織（中）」（『美術研究』三九三、二〇〇八年）。
- 皿井舞「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織（下）」（『美術研究』三九八、二〇〇九年）。
- 佐和隆研『醍醐寺』（講談社、一九六七年）。
- 佐和隆研「聖宝僧正とその造像について」（『南都仏教』一、一九五四年）。
- 佐和隆研「醍醐寺の仏教と歴史」（『密教大系』六、法蔵館、一九九五年）。
- 塩入良道・木内堯央編『最澄』（吉川弘文館、一九八二年）。
- 清水善三「覚禅抄における各巻の構成とその成立過程」（『佛教芸術』七〇、一九六九年）。
- 清水紀枝「半跏思惟形の如意輪観音像の成立をめぐる―醍醐寺との関わりを中心に―」（『美術史研究』四六、二〇〇八年）。
- 杉橋隆夫「四天王寺所蔵「如意宝珠御修法日記」・「同」紙背（富樫氏関係）文書について」（『史林』五三―三、一九七〇年）。
- ステイブン・トレンソン「醍醐寺における祈雨の確立と清瀧神信仰」（ルチア・ドルチェ、松本郁代編『儀礼の力―中世宗教の実践世界』法蔵館、二〇一〇年）。
- 杉山二郎「元興寺極楽坊聖徳太子孝養立像の修理」（『大和文化研究』五一―四、一九六〇年）。
- 藪田香融「平安仏教の成立」（『密教体系』六、日本密教Ⅲ法蔵館、一九九五年）。
- 多賀宗隼『慈円の研究』（吉川弘文館、一九八〇年）。
- 鷹巢晃「御代始三壇法とその本尊画をめぐる二、三の問題―南北朝・室町初期を中心に―」（『古美術』五七、一九八〇年）。
- 高田良信「聖徳太子信仰の展開―特に法隆寺を中心として―」（『聖徳太子研究』七、一九七三年）。
- 高田良信『法隆寺教学の研究』（法隆寺、一九九八年）。
- 武内孝善「御遺告の成立過程について」（『印度学仏教学研究』八六、一九九四年）。
- 田中重久「日本の円堂と印度の円堂」（『日本に遺る印度系文物の研究』東光堂、一九四三年）。
- 田中恵「観心寺草創期の造仏と真紹」（『岩手大学教育学部研究年報』四一―二、一九八二年）。

- 棚橋光男『後白河法皇』（講談社、二〇〇六年）。
- 田辺三郎助「江戸時代再興の東大寺大仏脇侍像について」『佛教芸術』一三一、一九八〇年）。
- 田村圓澄「四天王寺草創考」『奥田慈応先生喜寿記念 仏教思想論集』奥田慈応先生喜寿記念論文集刊行会、一九七六年）。
- 田村寛康「奈良時代東大寺盧舎那仏の両脇侍について」『佛教芸術』一二〇、一九七八年）。
- 田村隆照「圖像抄―成立と内容に関する問題」『佛教芸術』七〇、一九六九年）。
- 津田徹英「醍醐寺における清灌権現の成立とその背景について―醍醐寺如意輪観音像考序説―」『慶応義塾大学三田哲学会大学院生論文集』第一集、一九九〇年）。
- 土谷恵「小野僧正仁海像の再検討」『日本古代の政治と文化』青木和夫先生還暦記念会編、吉川弘文館、一九八七年）。
- 土谷恵「中世初頭の仁和寺御流と三宝院流―守覚法親王と勝賢、請雨経法をめぐる―」（阿部泰郎、山崎誠編『守覚法親王と仁和寺御流の文献学的研究 論文篇』勉誠社、一九九八年）。
- 徳竹由明「石山寺開基伝承の形成」『日本文学』五二―三、二〇〇三年）。
- 徳竹由明「石山寺開基伝承の展開―『石山寺流記』・『石山寺縁起』へ―」『国語国文』七四―三、二〇〇五年）。
- 内藤栄『舍利莊嚴美術の研究』（青史出版、二〇一〇年）。
- 内藤栄『日本の美術 五三九 舍利と宝珠』（ぎょうせい、二〇一一年）。
- 内藤藤一郎「夢殿秘仏と中宮寺本尊」一〇四『東洋美術』四、五、六、八、一九三〇～一九三一年）。
- 永井清一「上醍醐―聖宝・重源を中心に―」『古美術』三三三号、一九七一年）。
- 中野玄三「石山寺観祐と密教図像」『続日本仏教美術史研究』思文閣出版、二〇〇六年）。
- 中野玄三「醍醐寺薬師三尊像と平安前期の造寺組織―皿井舞氏の論文に答える―」『鳳翔学叢』七、二〇一一年）。
- 中前正志「石山寺縁起と六角堂縁起」『日本文藝研究』五二（三）、二〇〇〇年）。
- 永村眞『中世東大寺の組織と経営』（塙書房、一九八九年）。
- 永村眞「『真言宗』と東大寺―鎌倉後期の本末相論を通して―」『中世寺院史の研究』下、中世寺院史研究会編、法蔵館、一九八八年）。
- 西井芳子「山科御所と御影堂」（財団法人古代学協會編『後白河院』吉川弘文館、一九九三年）
- 西川新次「観心寺如意輪観音像について」『美術史』二二六、一九五六年）。
- 西川新次「聖宝・会理とその周辺」『國華』八四八、一九六二年）。

- 錦織亮介「別尊雜記の研究―その成立問題を中心にして」『佛教芸術』八二、一九七一年)
- 根立研介『日本の美術 三七六 愛染明王像』(至文堂、一九九七年)
- 朴亨國「如意輪觀音像の成立と展開―インド・東南アジア・中国―」『佛教芸術』二六二、二〇〇二年)
- 濱田隆「ポストン美術館如意輪觀音画像考」『ミュージアム』三八六、一九八三年)。
- 林幹彌『太子信仰 その発生と発展』(評論社、一九七二年)
- 速水侑「觀音靈場信仰の成立と展開」『觀音信仰』、塙書房、一九七〇年)。
- 肥田路美「等身像」考―唐代撰述史料にみえる皇帝像と仏像との関わりを中心に」『風土と文化』三、二〇〇二年)
- 肥田路美「舍利信仰と王権」『死生学研究』十一、二〇〇九年)。
- 平岡定海「平安初期における真言密教の南都進出について」『結城教授頌壽記念 仏教思想史論集』大蔵出版、一九六四年)
- 平岡定海「東大寺の寺院構造について」『日本寺院史の研究』吉川弘文館、一九八一年)
- 福山敏男「四天王寺の建立年代に関する研究」『東洋美術』二一、一九三五年)
- 福山敏男「奈良時代に於ける石山寺の造宮」『日本建築史の研究』桑名文星堂、一九四三年)。
- 福山敏男「石山寺の創立」『寺院建築の研究』中、中央公論美術出版、一九八二年)
- 福山敏男「石山寺・保良宮と良弁」『寺院建築の研究』中、中央公論美術出版、一九八二年)
- 藤井雅子『中世醍醐寺と真言密教』(勉誠出版、二〇〇八年)
- 藤巻和宏「一山と如意宝珠法をめぐる東密系口伝の展開―三宝院流三尊合行法を中心として―」『むろまち』五、二〇〇一年)
- 藤巻和宏「如意宝珠をめぐる東密系口伝の展開と一山縁起類の生成―『一山秘密記』を中心として」『国語国文』七一―一、二〇〇二年)
- 藤巻和宏「宝珠をめぐる秘説の顕現―随心院蔵『一山秘記』の紹介によせて」『古典遺産』五三、二〇〇三年)
- 藤巻和宏「寺社縁起とお伽草子―東大寺縁起・石山寺縁起をめぐる―」『三宝絵を読む』小島孝之・小林真由美・小峯和明編、吉川弘文館、二〇〇八年)。
- 藤巻和宏「聖地の地下には―日本中世の宝珠・舍利信仰の一隅より―」(藤巻和宏編『聖地と聖人の東西―起源はいかに語られるか―』、勉誠出版、二〇一一年)
- 細川涼一「鎌倉時代の尼と尼寺―中宮寺・法華寺・道明寺」『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館、一九八七年)。

- 堀裕「護持僧と天皇」(大山喬平教授退官記念会編『日本国家の史的特質(古代・中世)』思文閣出版、一九九七年)。
- 堀池春峰「弘法大師と南都仏教」(『南都仏教史の研究 上 東大寺編』法蔵館、一九八〇年)。
- 松岡久美子「聖徳太子の物部守屋討伐譚と山門の四天王法―四天王寺様四天王の受容をめぐって―」(中野玄三・加須屋誠・上川通夫編『方法としての仏教文化史―ヒト・モノ・イメージの歴史学―』勉誠出版、二〇一〇年)。
- 松下隆章「摩尼宝珠曼荼羅に就いて」(『美術研究』一三一、一九四三年)。
- 松本郁代「鳥羽勝光明院宝蔵の『御遺告』と宝珠―院政期小野流の真言密教―」(『中世王権と即位灌頂』森話社、二〇〇五年)。
- 松本公一「後白河院の信仰世界―蓮華王院・熊野・厳島・園城寺をめぐって―」(『文化史学』五〇、一九九四年)。
- 真鍋俊照「心覚と別尊雜記について―伝記および凶像「私加之」の諸問題―」(『佛教芸術』七〇、一九六九年)。
- 真鍋俊照「空海請来梵字法身偈と摩尼宝珠曼荼羅」(『佛教芸術』一二二、一九七九年)。
- 真鍋俊照「虚空蔵求聞持法画像と儀軌の東国新出(下)」(『金沢文庫研究』二九五、一九九五年)。
- 真鍋俊照「女神像の凶像展開と三弁宝珠」(『密教学研究』二八、一九九六年)。
- 源豊宗「美術史雜記―中宮寺本尊と我國の半跏思惟像―」(『仏教美術』一八、一九三一年)。
- 宮本忠雄「仏像と絵画の莊嚴」(『石山寺の信仰と歴史』鷺尾遍隆監修・綾村宏編集、思文閣出版、二〇〇八年)。
- 宮治昭「観音菩薩像の成立と展開―インドを中心に―」(『シルクロード学研究』十一、シルクロード学研究センター、二〇〇一年)。
- 村田治郎「四天王寺創立史の諸問題」(『聖徳太子研究』二、一九六六年)。
- 毛利久「半跏思惟像とその周辺」(田村圓澄・黄壽永編『半跏思惟像の研究』吉川弘文館、一九八五年)。
- 望月信成「如意輪観音と弥勒菩薩」(『寧楽』二、一九二六年)。
- 安田元久『後白河上皇』(吉川弘文館、一九八六年)。
- 藪田嘉一郎「太秦広隆寺蔵二軀半跏思惟形像の中世における伝来と信仰(上)」(『佛教史学』四、一九五〇年)。
- 藪元晶『雨乞儀礼の成立と展開』(岩田書院、二〇〇二年)。
- 横内裕人「密教修法からみた治承・寿永内乱と後白河院の王権―寿永二年法住寺殿転法輪法と蓮華王院百壇大威徳供をめぐって―」(『日本中世の仏教と東アジア』塙書房、二〇〇八年)。
- 頼富本宏「観音信仰と巡礼の寺」(『石山寺の信仰と歴史』鷺尾遍隆監修・綾村宏編集、思文閣出版、二〇〇八年)。

全集・展覧会図録

「四天王寺の宝物と聖徳太子信仰」展実行委員会編『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』（四天王寺の宝物と聖徳太子信仰）展実行委員会、一九九二年）。

東京国立博物館・総本山醍醐寺・日本経済新聞社編『国宝 醍醐寺展』（日本経済新聞社発行、二〇〇一年）。

奈良国立博物館編『仏舎利の荘厳』（同朋舎出版、一九八三年）。

奈良国立博物館編『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館、二〇〇一年）。

奈良国立博物館編『観音のみてら 石山寺』（奈良国立博物館、二〇〇二年）。

奈良国立博物館編『石山寺本尊如意輪観音像内納入品』（奈良国立博物館、二〇〇二年）。

奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観 二 法隆寺（二）』（岩波書店、一九六八年）。

奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観 一 東大寺（三）』（岩波書店、二〇〇〇年）。

奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観 一四 西大寺』（岩波書店、一九七三年）。

西川 新次・山根 有三・有賀 祥隆編『醍醐寺大観』一卷（岩波書店、二〇〇二年）。

文化庁監修『国宝・重要文化財大全 三 彫刻』（毎日新聞社、一九九八年）。

町田甲一編『大和古寺大観 一 法起寺・法輪寺・中宮寺』（岩波書店、一九七七年）。

毎日新聞社「重要文化財」委員会事務局編『重要文化財二九 考古Ⅱ』（毎日新聞社、一九七六年）。

図版出典

第一章 日本における二臂如意輪観音像の成立について

- 図1 『大正図像』三。
- 図2 『石山寺 宝物篇』（大本山石山寺、二〇〇八年）。
- 図3 『岡寺』（参詣者用リーフレット）。
- 図4 泉武夫『日本の美術三八〇 虚空蔵菩薩像』（至文堂、一九九八年）。
- 図5 『日本絵巻大成四 信貴山縁起』（中央公論社、一九七七年）。
- 図6 井上一稔『日本の美術三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』（至文堂、一九九二年）。
- 図7 伊東史朗『日本の美術四七九 十世紀の彫刻』（至文堂、二〇〇六年）。
- 図8 鷲尾遍隆監修・綾村宏編集『石山寺の信仰と歴史』（思文閣出版、二〇〇八年）。
- 図9 井上一稔『日本の美術三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』（至文堂、一九九二年）。

第二章 半跏思惟形の如意輪観音像の成立と醍醐寺

- 図1 井上一稔『日本の美術三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』（至文堂、一九九二年）。
- 図2 『中宮寺 如意輪観世音菩薩』（中宮寺、二〇一〇年）。
- 図3 『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』（四天王寺の宝物と聖徳太子信仰） 展実行委員会編集・発行、一九九二年）。
- 図4 『NHK国宝への旅 十五』（日本放送出版協会、一九八九年）。
- 図5 『法隆寺』（法隆寺、発行年未記載）。
- 図6 『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』（四天王寺の宝物と聖徳太子信仰） 展実行委員会編集・発行、一九九二年）。
- 図7 『法隆寺―日本美術の黎明―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇四年）。

- 図 8 『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』（四天王寺の宝物と聖徳太子信仰）展実行委員会編集・発行、一九九二年）。
- 図 9 『国宝・重要文化財大全 3 彫刻』（毎日新聞社、一九九八年）。
- 図 10 井上一穂『日本の美術三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』（至文堂、一九九二年）。
- 図 11 『石山寺本尊如意輪観音像内納入品』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇二年）。
- 図 12 『観音のみてら 石山寺』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇二年）。
- 図 13 松浦正昭「西大寺叢尊と真言律の美術」（『古美術』九九、一九九一年）。

第三章 醍醐寺をめぐる宝珠法の展開と如意輪観音信仰

- 図 1 『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇二年）。
- 図 2 内藤栄『日本の美術 五三九 舎利と宝珠』（ぎょうせい、二〇一一年）。
- 図 3 『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇二年）。
- 図 4 『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇二年）。
- 図 5 『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇二年）。
- 図 6 『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇二年）。
- 図 7 田中公明『曼荼羅イコノロジー』（平河出版、一九八七年）。
- 図 8 『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇二年）。
- 図 9 『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇二年）。
- 図 10 『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇二年）。
- 図 11 『国宝 醍醐寺展』（東京国立博物館・総本山醍醐寺・日本経済新聞社編、日本経済新聞社発行、二〇〇一年）。
- 図 12 『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇一年）。
- 図 13 『仏舎利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇一年）。
- 図 14 ステイブ・トレンソン「醍醐寺における祈雨の確立と清瀧神信仰」（ルチア・ドルチェ、松本郁代編『儀礼の力―中世宗教の実践世界』

法蔵館、二〇一〇年。

図 15 『仏舍利と宝珠―釈迦を慕う心―』（奈良国立博物館編集・発行、二〇〇一年）。

第四章 後白河院をめぐる如意輪観音の造像と信仰

図 1 『四天王寺の宝物と聖徳太子信仰』（四天王寺の宝物と聖徳太子信仰） 展実行委員会編集・発行、一九九二年）。

図 2 文化庁監修 『国宝・重要文化財大全 三 彫刻』（毎日新聞社、一九九八年）。

図 3 『朝日ビジュアルシリーズ十二 醍醐寺・仁和寺』（朝日新聞社、二〇〇七年）。

第五章 院政期真言密教をめぐる如意輪観音像の展開と王権

図 1 井上一稔 『日本の美術三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』（至文堂、一九九二年）。

図 2 井上一稔 『日本の美術三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』（至文堂、一九九二年）。

図 3 村田靖子 『小金銅仏の魅力―中国・韓半島・日本―』 里文出版、二〇〇四年）。

図 4 井上一稔 『日本の美術三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』（至文堂、一九九二年）。

図 5 井上一稔 『日本の美術三二二 如意輪観音像・馬頭観音像』（至文堂、一九九二年）。

図 6 『国宝 醍醐寺展』（東京国立博物館・総本山醍醐寺・日本経済新聞社発行、二〇〇一年）。

図 7 小泉恵英 『ガンダーラの仏伝美術と転輪聖王』（宮治昭編『ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡展』静岡新聞社・静岡放送事業局、二〇〇七年）。

図 8 肥塚隆・宮治昭編 『世界美術大全集 東洋編十三 インドー』（小学館、二〇〇〇年）。

付論 後白河院政期における「阿育王塔」の制作について

図 毎日新聞社 「重要文化財」委員会事務局編 『重要文化財二九 考古Ⅱ』（毎日新聞社、一九七六年）。